

雪形(YUKIGATA)の景観・産業・文化特性
からみる価値評価に関する研究

RESEARCH ON THE VALUE EVALUATION OF YUKIGATA'S LANDSCAPE,
INDUSTRY, AND CULTURAL CHARACTERISTICS

2023年2月

千葉大学大学院 園芸学研究科
環境園芸学専攻 緑地環境学コース

HAN YIRUI

韓 旻睿

(千葉大学審査学位論文)

雪形(YUKIGATA)の景観・産業・文化特性
からみる価値評価に関する研究

RESEARCH ON THE VALUE EVALUATION OF YUKIGATA'S LANDSCAPE,
INDUSTRY, AND CULTURAL CHARACTERISTICS

2023年2月

千葉大学大学院 園芸学研究科
環境園芸学専攻 緑地環境学コース

HAN YIRUI

韓 旻睿

目次

第一章 序章	1
1. 研究の背景	2
1.1. 雪形とは	2
1.2. 雪形の現状と課題	8
1.3. 雪形に関する保全・継承の必要性	14
2. 研究の目的	16
3. 研究の位置づけ	17
3.1. 既往研究	17
3.2. 研究の位置づけ	19
4. 研究の構成	21
5. 文化的景観について	24
5.1. 文化的景観とは	24
5.2. 日本における文化的景観候補として選定されている雪形	26
6. 用語の定義	28
6.1. 雪形	28
6.2. 雪形の単位	28
6.3. 雪形の色	29
参考文献	30
第二章 全国の雪形の把握とその分布の特徴	32
1. 研究の枠組み	33
1.1. 研究の背景と目的	33
1.2. 研究の手法	33
2. 雪形の諸特徴の把握に関する資料収集	34
3. 雪形の数及び出現する山岳の分布の特徴	36
3.1. 雪形の抽出	36
3.2. 雪形の分布の特徴	38
3.3. 雪形の望見地である地域及びその特徴	41
4. まとめ	43
参考文献	44
第三章 雪形の諸特徴についての多面的検討及び評価項目の設定	46
1. 研究の枠組み	47
1.1. 研究の背景と目的	47
1.2. 研究手法	47
2. 全国における雪形（631 体）の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベースの構築に関する考え	49
2.1. 全国における雪形（631 体）の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベースの評価項目の設定	52
3. 「文化的価値を有する雪形」（150 体）の特性に関するデータベースの構築に関する考え	58
3.1. 「文化的価値を有する雪形」の特性分析に関するデータベースの構築の目的及び対象	58
3.2. 「文化的価値を有する雪形」の特性分析に関するデータベースの評価項目の設定	60
4. 「馬・駒」の雪形（95 体）と関連する地域文化の考察に関するデータベースの構築に関する考え	63

4.1. 「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベースの構築の目的及び対象	63
4.2. 「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベースの評価項目の設定	64
5. まとめ	66
参考文献	67
第四章 全国における雪形（631 体）の景観特性に関する考察	69
1. 研究の枠組み	70
1.1. 背景と目的	70
1.2. 研究の手法	70
2. 数量化Ⅲ類により雪形の景観特性の分析	72
3. クラスタ分析により景観特性における雪形の類型化	73
4. 地理・立地特性による全国における雪形の景観特性の各タイプの特徴	75
5. まとめ	82
参考文献	83
第五章 全国における雪形（631 体）の産業・文化特性に関する考察	84
1. 研究の枠組み	85
1.1. 研究の背景と目的	85
1.2. 研究の手法	85
2. 雪形に関する産業文化と景観特性の関係	89
2.1. 農業	89
2.2. 漁業	90
2.3. 養蚕業	91
2.4. 山仕事	91
2.5. 産業占い	91
3. 雪形に関する地域文化と景観特性の関係	93
3.1. 山名の由来	93
3.2. 伝説の対象	93
3.3. 地誌・紀行文における記録	93
4. 雪形の基本特徴と景観特性の関係	95
4.1. 雪形の色と景観特性の関係	95
4.2. 雪形の形と景観特性の関係	97
5. 十二支の形から見る産業・文化特徴	99
6. まとめ	106
参考文献	107
第六章 「文化的価値を有する雪形」（150 体）の山岳特性・眺望特性に関する考察	109
1. 研究の枠組み	110
1.1. 研究の背景と目的	110
1.2. 研究の方法	111
2. 「文化的価値を有する雪形」（150 体）の特性分析	114
2.1. 「文化的価値を有する雪形」（150 体）の山岳特性	114
2.2. 「文化的価値」を有する雪形が出現する山岳の各類型の特徴	116
2.3. 「文化的価値を有する雪形」の眺望特性	117
2.4. 「文化的価値を有する雪形」の眺望特性の各類型の特徴	119
3. まとめ	121
参考文献	122
第七章 地方自治体における景観・文化資源としての雪形への意識と利活用等の現状調	

査	123
1. 研究の枠組み	124
1.1. 研究の背景と目的	124
1.2. 研究の手法	124
2. 各自治体における景観・文化資源としての雪形への意識・活用実態の考察	125
2.1. 調査内容	125
3. 景観・文化資源としての雪形への意識と活用方法意識・活用方法	126
4. 景観・文化資源としての雪形への意識と活用方法の特徴	127
5. 景観・文化資源としての雪形への意識と活用方法の特徴的な活用事例	130
5.1. 栗原市	130
5.2. 福島市	132
5.3. 勝山市	134
5.4. 魚津市と黒部市	136
5.5. 妙高市・上越市	138
5.6. 駒ヶ根市・安曇野市・大町市	144
6. まとめ	147
参考文献	149
第八章 「馬・駒」の雪形と関連する地域文化に関する調査	151
1. 研究の枠組み	152
1.1. 研究の背景と目的	152
1.2. 研究手法	153
2. 「馬・駒」の雪形が出現する山岳の特性についての総合考察	155
3. 「馬・駒」の雪形にまつわる伝説	156
4. 「馬・駒」の雪形の分布と日本における馬の文化の関係について	158
4.1. 「馬・駒」の雪形の分布と耕馬文化の関係	158
4.2. 「馬・駒」の雪形の分布と馬の流通関係について	158
4.3. 「馬・駒」の雪形の分布と馬の信仰について	160
5. まとめ	165
参考文献	166
第九章 雪形に関する価値認識に関する総合考察	168
1. 研究成果の概要	169
2. 総合考察	176
3. 今後の課題と展望	179
付録	181
参考文献	182
図表リスト	193
謝辞	

第一章 序章

1. 研究の背景

1.1. 雪形とは

1.1.1. 雪形の定義

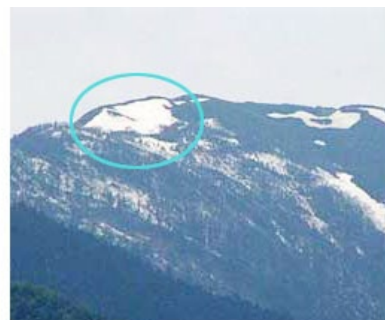
『広辞苑 第三版』¹⁾によれば、雪形は「山腹の雪の消え具合によってできる形→雪占。」として定義されているものである。「雪占」は、「山や野に消え残る雪の形によって、農作業の時期を測り、またその年の豊凶を占うこと。山の名は雪占に因んだものがある。」と解釈されている。

雪形は、多雪地帯では毎年の春から初夏頃(4月下旬～6月上旬前後)に出現し、山に残される白い残雪と黒い地肌によって作られた「一枚の絵」のようなものである²⁾。また、雪形には消え残った雪を成す「白い形(ポジ型)」と周囲が白い雪で囲まれた黒い山肌を成す「黒い形(ネガ型)」(図1-1-1)がある。

かつて気象学が発達していない時代には、農民たちは、毎年出現するその形を農業などに関わる人物道具などの形や動物の形に見立て、代掻き、作物の種まきなどの農事暦として利用し、農耕社会にとって人々の生活と共存してきた重要な指標であった(図1-1-2)(図1-1-3)(図1-1-4)(図1-1-5)。



↑ 黒い岩肌でネガ型の常念坊が現れる
常念岳



↑ 白い残雪でポジ型の蝶が舞う
蝶ヶ岳

図1-1-1 ネガ型とポジ型の雪形³⁾

(長野県安曇野市HPより引用)

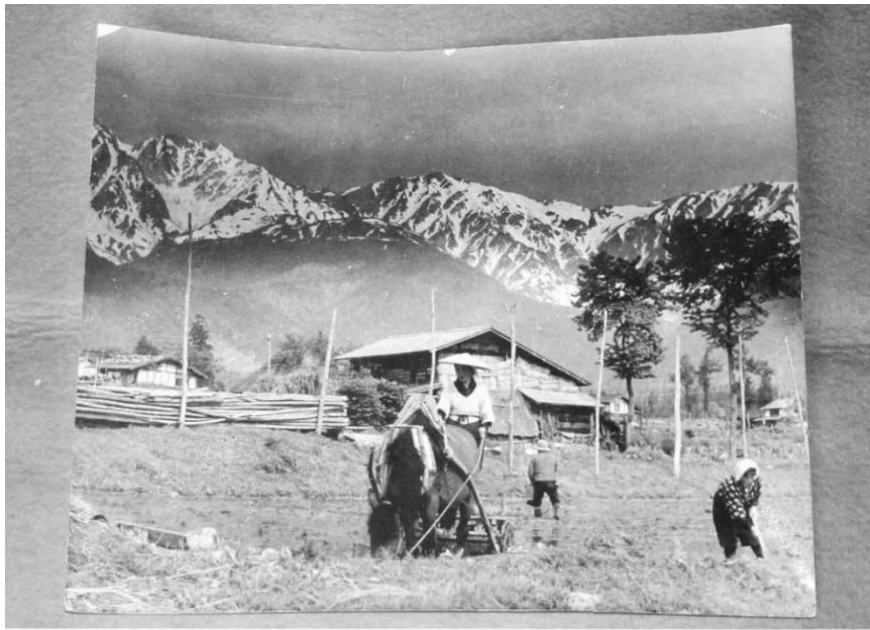


図 1-1-2 長野県白馬岳「代馬」と馬を利用した代かきの情景⁴⁾
(宮野 典夫「代かきのころ」より引用)



図 1-1-3 長野県常念岳「万能鋤」と万能鋤で代かき作業⁴⁾
(宮野 典夫「雪形-山麓の民俗」より引用)

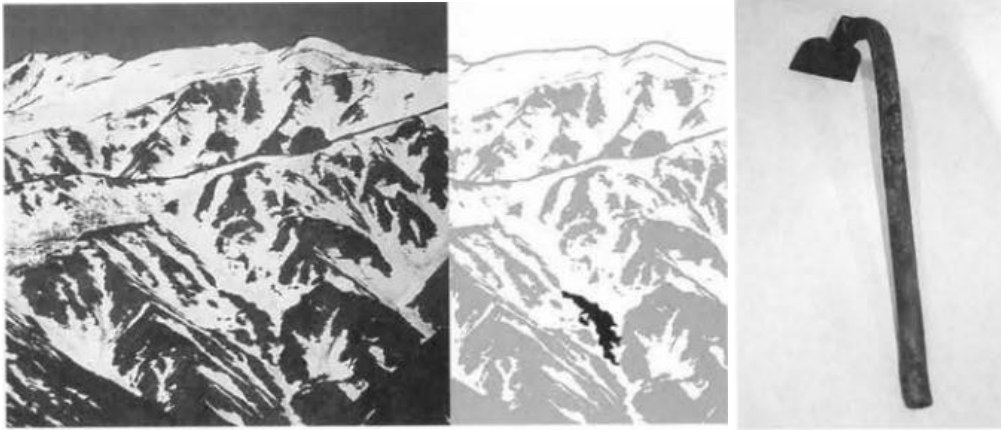


図 1-1-4 長野県八方尾根「手斧」の雪形と手斧⁴⁾
(宮野 典夫「雪形-山麓の民俗」より引用)



図 1-1-5 青森県八甲田山の「苗モッコ」と田植え作業と苗モッコ⁵⁾
(室谷 洋司「ふるさと雪形探訪Ⅲ」より引用)

1.1.2. 農事暦としての雪形

農事暦とは、「農事に従う人たちに必要な事項を注した暦。農事はまず季節を知ることが重要で、そのため太陰太陽暦時代の東洋における暦の二十四節気はその基をなすものであった。これに播種・収穫・施肥などの時期、あるいはとくに気象上注意すべき時期、さらに豊作を起念し収穫を感謝する祭りの日などを記載した暦書が農事暦である。」と解釈される⁶⁾。

明治時代以前には、各地の農事暦として、津軽地方では『耕作晰』、会津地方では『会津農書』など地域の気候条件などに基づいて農事の適期や種類を示す暦書がある⁷⁾。『会津農書』では、すでに雪形に関する記録が残されている。「(前略)亦当領の飯豊山頂上の雪村消、牛の形に似たる所有り、是飯豊牛といふ。此牛躰の雪見ゆる時に農の時を考えふる事あり。」と農業の目安としての飯豊山の「牛形」が描写されていた⁸⁾。

しかしながら、暦書が普及しない時代には、このような伝承はすでに日本全国における各地で無数に残されている。暦を見なくても季節の変化を体感し、身近の自然現象を観測しながら、「桐の花の咲く頃に豆を蒔け。(青森)」など、農事の種類や手順を決める伝承が俚諺・歌謡などの形で伝承されている⁹⁾。岩科は¹⁰⁾、このような「自然現象を使用した農事暦」は「自然暦」と解釈された。また、雪形は「“自然暦”の一種である。」と定義された。具体的には、身近の山の残雪の変化を見ながら、「仙ノ倉山の三の字で苗代、二の字で豆まき、一の字で田植えが行う。(湯沢町)」、「駒ヶ岳の駒が出ると耕作にかかる。(小出町)」、「鳥海山の種まき爺で種まき。(吹浦)」など農業に関わる口伝承が残されている。雪形は長期的な経験が蓄積されてきた一種の農耕の文化であることも分かった。

また、山岳写真家田淵は¹¹⁾、雪形は「ロコミで伝承された日本民俗の文化財であり、自然と人間との交流から自然発生的に生まれた生活の知恵です。」と指摘している。

さらに、教育学者小山は¹²⁾、「雪形のような自然を活用した農事暦は、山に対する特別の思い(稲作農耕社会の観念や世界観、宇宙観)^[注1]という、「自然に逆らう代りに自然を師として学び、自然自身の太古以来の経験をわが物として自然の環境に適応するように努める」^[注2]日本人の生き方を明確に示している。」と指摘している。

1.1.3. 地誌・紀行文に記録されている雪形

明治時代以前には、既に雪形に関する記録が残されている。

先述の『会津農書』などの農書のみならず、滝沢馬琴の『羈旅漫録』(1802、享和2年)などの紀行文にも「富士にて四五月の頃、だんだん雪消え残りたるが、宝永山の方に人の形のごとく雪消え残ることあり、それを農男と称す。この残雪見ゆる年もあり、田子の土人云、農男見ゆる年は五穀熟す。田子の田植え忘るな富士の農男 馬琴」など雪形が奇観として記録されていた¹⁰⁾。また、葛飾北斎の『富嶽百景』(1834、天保5年)には富士山の「農男」の風景と山麓の農耕の情景と共に描かれていた¹³⁾ (図1-1-6)。

また、雪形の中には、長野県白馬岳の「代馬」、蝶ヶ岳の「蝶」、五竜岳の「御菱」など、山名の由来になって人々に知られているものがある。

以上のことから、雪形は自然風景でありながら、かつて農耕社会の暮らしと密接に関わる一種の文化として意義づけられていることが明らかになった。

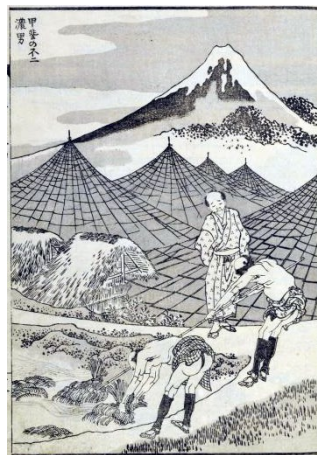


図1-1-6 富士山「農男」¹³⁾

(葛飾北斎『富嶽百景』(1834)より引用)

1.1.4. 農事暦についての今日的解釈

岩科¹⁰⁾は、雪形の形が成立するには、「一に地形の状態に左右される、第二に積雪量、第三に気温。」に影響されると指摘している。

また、納口¹⁴⁾は、「地形・植生・気候が大きく変わらない限り、雪解けに伴う形の変化はほぼ毎年同じようになり返される。」とされ、「雪形の現れる時期については気象条件と関係し、冬の間雪の大きいときで一ヵ月程度の変動をすることもある。このため、雪形がいつ現れるかは冬と春を合わせた地球の暖かさ寒さの指標としての意味を持つ。それと同時に、山の残雪を水資源としてみれば、雪形は水瓶の水位計と考えることもでき、従って、雪形の出現が例年よりも早い時は残雪量が不足して、水不足になると予想することができる。」と科学的の視点から雪形と用水の関係について述べた。

さらに、『日本地誌』¹⁵⁾では、「本州、四国、九州は熱帯気団と寒帯気団の交錯する場所であり、(後略)」とされている。また、「熱帯気団の支配域を象徴する照葉樹林は多くのナッツ類や根茎類を産出し、それは採集から栽培へ指向を駆り立てた。その中で培われた農耕様式の粹は水稻栽培として晶出する。」という記述がある。さらに、「まさに雪形はブナ林もしくは常緑針葉林域の象徴などだ。さらに、この雪形の認知を通して、多雪環境をもたらした寒帯気団と、水田耕作の源である照葉樹林(文化)をもたらした熱帯気団とが、ここ本州でしっかりと融合している姿に認めることができる」とされ、雪形は「特に気温や水温などに左右される田植えの季節をさし示す気候景観としては、このうえないものであったと思われる。」と指摘された。雪形が稲作に多用されている原因も明確になった。

1.2. 雪形の現状と課題

1.2.1. 雪形文化の消失

しかし、現代では、雪形は厳しい状況に直面している。具体的には、以下に示す通りである。

「農事暦としての意義の喪失」

農耕の進歩、天気予報の発達による農事開始時期と雪形の出現時期が一致しない場合が多く農事暦としての意味がなくなっていることや、残雪の状況をかたち例えるような風習がなくなり雪形に目を向ける住民も少なくなっている。

「少子高齢化による伝承の消滅」

また、農村人口の減少や少子高齢化などの社会問題により、農村の継続が難しい場合があり、若年層を含め地元でも知られていない状況である。

「眺望の阻害」

さらに、高層のリゾートホテルなどの建設などにより、雪形への眺望が遮断された事例などもある。また、スキー場の建設などにより、雪形の形が崩れてしまい、消滅に至る場合もある。

それらの要因により、「雪形」は極めて美しい日本的な風致景観でありながら、全国的にも民俗学者や山岳研究者、登山者以外に知られていない場合も少なくない。

1.2.2. 日本国内における雪形の動向

1.2.2.1. 文化的景観候補としての雪形

雪形に関する最近の動向については、文化庁による 2005 年に発行された『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書』¹⁶⁾で、「独特の気象によって現れる景観」として、福島県飯豊連峰の「寝牛と白馬」の雪形、新潟県守門岳の雪形、富山県僧ヶ岳の雪形、岐阜県笠ヶ岳の「馬」の雪形と乗鞍岳の雪形、「複合景観」には岩手県岩手山の雪形が文化的景観候補として選定されている。

しかし、それらの雪形は、すでに農事暦として使用されていないため、文化的景観の条件としての、「生業として営まれているもの」には整合しないことや一時的な気象現象と見られることもあり、文化的景観として認定されるまでには至っていない。

1.2.2.2. 現代社会における雪形に関する情報発信

一方、最近では、一部の雪形は地域の資源として、地域新聞、行政や地元の団体などから情報発信されているものも出てきている。

「行政機関における情報発信」

国土交通省が発行した『雪に学び、雪を楽しむ』¹⁷⁾ (図 1-2-1)は、雪(=雪国の環境や特性等)を生活に活かし、「学雪」「楽雪」などの事例を通して、雪の価値を再発見し、雪国の新しい魅力や可能性を発信するガイドブックである。この中で、雪形を「雪で知る「地域文化」」として位置づけられた。

また、農林水産省発行の『農と食のサイエンス 2014』のガイドブック¹⁸⁾ (図 1-2-2)には、「田植えに役立つ山の雪」として、雪形が紹介されている。さらに、同機関が「子どもたちの食に関する関心や理解を増進し、自然の恩恵や食に関わる人々の様々な活動への理解を深めるよう取り組まれています」の理念の基に発行された教材『教育ファーム大作戦』¹⁸⁾でも、「天気を予測せよ！」の項で雪形が取り上げられている。児童や青少年への情報発信も出始めている。

さらに林野庁 HP²⁰⁾には、北海道、中部、上越など各地の森林管理局による雪形に関する情報を発信が見られる。

「マスコミにおける情報発信」

NHKをはじめ、マスコミや地域新聞などから、岩手山(図-1-2-3)、北アルプスなどの各地の雪形に関する情報が発信されるようになった²¹⁾。

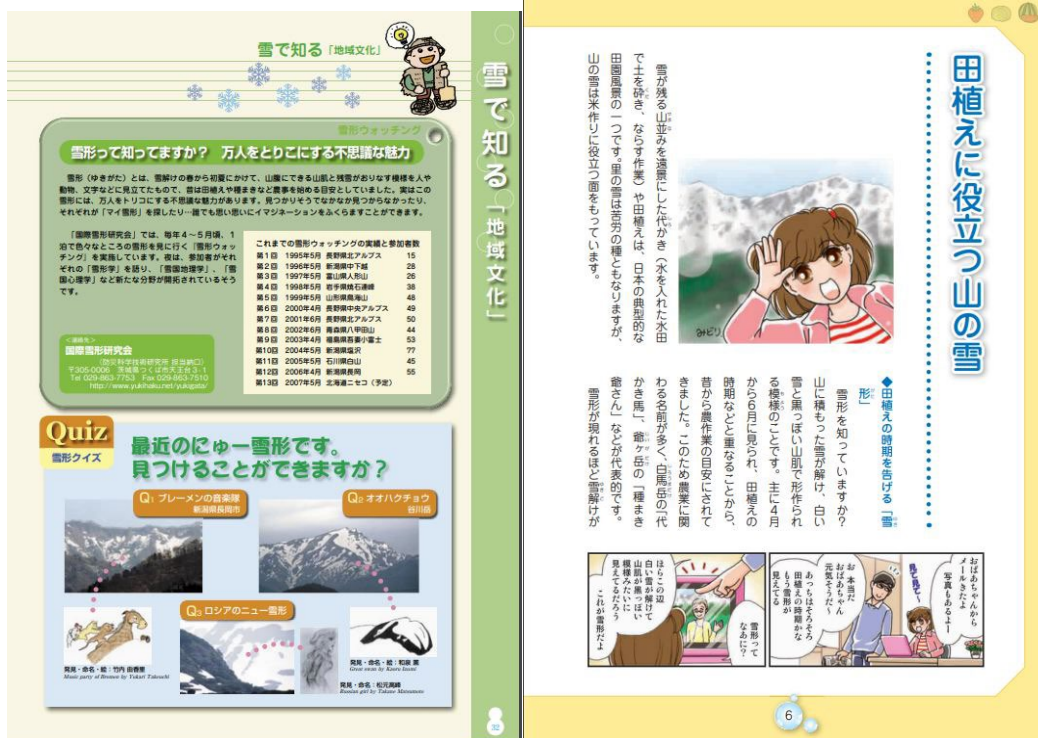


図 1-2-1 ガイドブック『雪に学び、雪を楽しむ』¹⁷⁾

図 1-2-2 ガイドブック『農と食のサイエンス 2014』¹⁸⁾



図 1-2-3 岩手県岩手山「鷲」の雪形²¹⁾

1.2.2.3. 眺望景観資産

2004年、景観法²²⁾が策定された以降、各自治体において眺望景観の保全・維持に関する条例が創出された。

2018年、京都の景観ガイドライン²³⁾では、眺望景観とは「眺望景観や借景は、特定の「視点場」とそこから眺められる「視対象」、そして視点場から視対象を眺めるときに視界に入る空間、すなわち、眺めを保全するために建築物等の高さやデザインを規制・誘導する必要のある「眺望空間」から実現されるものであり、一般的に「視点場」と「視対象」とは一对に特定されるものです。」とされている。「視対象」は「優れた眺めの対象となるもので、山並み、河川、歴史的な建造物、趣のある町並み、自然と一体となった伝統文化を象徴する目印その他優れた眺望景観の要素」と定義されている。また、「視対象」の中では、〈7 「しるし」への眺め〉の項では、「京都には、夏の風物詩である送り火が焚かれる五山があります。これらは自然風景の中にあって良好なランドマークとして位置づけられています。」と五山の送り火が取り上げられている。

五山の送り火は、お盆の時期に、先祖の精霊を送るために、京都市五山に点火によるものである。具体的には、東山には「大文字」、松ヶ崎には文字「妙・法」、西賀茂には「船形」、大北山には「左大文字」、嵯峨には「鳥居形」などの文字や形が点火により山腹に浮かび上がる。これらの送り火は、すべて京都市登録無形民俗文化財に指定されている²⁴⁾。京都五山の送り火は人工的に点火によるものであるが、「大」の文字や「船」などの形が山に浮かび上がることと、一定の時期にしか見られない季節性を有する点が雪形と類似性が見られる。

近年、政策の中で新潟県妙高市『歴史文化基本構想』²⁵⁾や上越市『上越市景観計画』²⁶⁾で、妙高山の雪形「はね馬」が景観資産として注目されるようになってきている。このように、雪形は地域の景観として重要視されるようになってきており、日本における多くの山に見られる雪形も、京都五山の送り火のように、「しるし」としての眺望景観として評価される契機が訪れたかもしれない。

1.2.3. 国際における雪形の動向²⁷⁾

1.2.3.1. 「YUKIGATA」の用語

国際雪形研究会が作成した雪形分布図（YUKIGATA DISTRIBUTION MAP）によると、日本をはじめ、ノルウェー、ロシア、スイス、オーストラリア、中国などの15ヶ国では雪形の伝承を有することが分かった(図1-2-4)。

しかし、海外における雪形について調査した納口によると、海外では「馬」、「猫」、「犬」、「爺さん」、「婆さん」など残雪に名前を付ける例はあるものの、日本語の「雪形」のようにこれらをまとめて表現する言葉は存在しなかった。また、日本のように農耕などの地域文化と密接に関連する「かたち」や「伝承」としての研究文献は殆ど見られないとされている²⁸⁾。

そのため、納口はこの点において日本は雪形という文化に関する先進国であることを指摘し、雪形というコンセプトは「我が国にしかない」と述べた。また、「YUKIGATA」という言葉は「津波 TSUNAMI」のように、国際用語になり得るとも指摘された。さらに、近年「雪形」が海外の雪や氷の研究者の間では「YUKIGATA」として徐々に定着し始めているという報告もある。「このような雪形には、世界的に誇れる文化遺産的な長い歴史がある、自然観察を通してちょっとした科学を楽しめる、国際性がある。」との指摘もある。

1.2.3.2. 世界中の雪形

納口らの調査によると、海外では、ノルウェーリレハンメル「聖火ランナー The Olympic Torch runner yukigata in Norway」や、アメリカのソルトレイク郡スーペリア山での「ドラゴン The Dragon」(図-1-2-5)、「バタフライ The Butterfly」(図-1-2-6)などの雪形が見られる。

また、ノルウェーの「聖火ランナー The Olympic Torch runner yukigata in Norway」は伝統的な雪形ではなく、リレハンメル・オリンピックの時に木を伐採して、木の黒い部分と木のない白い部分より作られた人工的なものとされている。

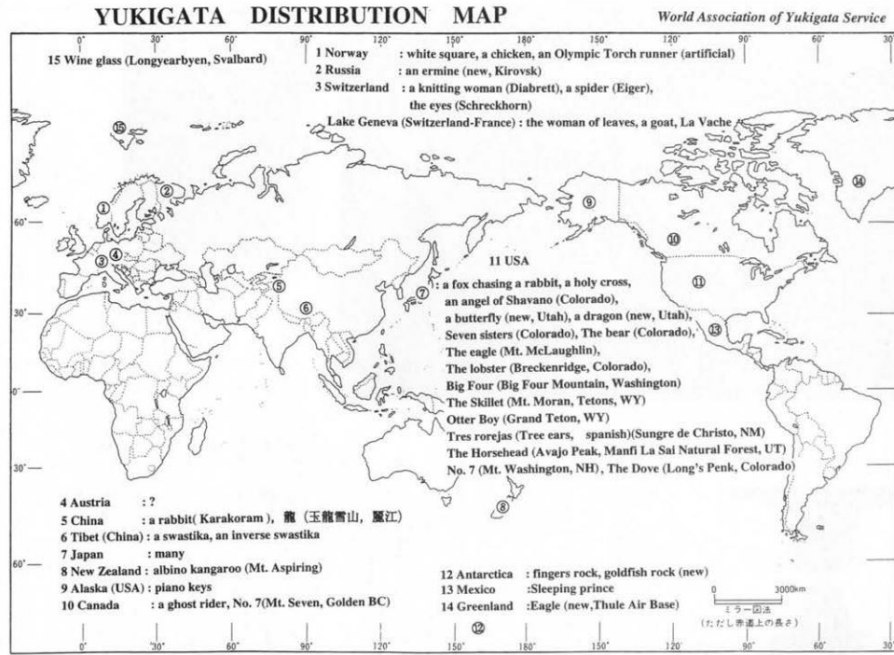


図-1-2-4 国際雪形研究会が作成した雪形分布図 (YUKIGATA DISTRIBUTION MAP) ²⁷⁾



図-1-2-6 アメリカソルトレイク郡スーペリア山「ドラゴン The Dragon」 ²⁷⁾

図-1-2-7 アメリカソルトレイク郡スーペリア山「バタフライ The Butterfly」 ²⁷⁾

1.3. 雪形に関する保全・継承の必要性

過去の文献においては、作田、赤坂²⁾により、「雪形は地域を離れては意味を成さないという特徴がある」と記述され、さらに、「雪形は「山の風景」ではなく「里の風景」であること」という記述もある。また、宮腰²⁰⁾は、「雪形を確認するには山と地域の人々の生活と何らかの形で関連がある」と指摘された。雪形が成立するには周りの環境と深く関係があり、雪形は地元の里と住民の文化に密接に関わる風景であることが明確にされた。

さらに、秋田谷³⁰⁾は、雪形を「大地をキャンパスとした芸術として、また雪国固有の自然景観として取り上げてみたい。」と指摘されている。また、同氏は、農水省の農村を活性化する為に景観づくりを支援する制度『景観づくり、むらづくり—農村景観づくりの手引き—』^{〔注4〕} (1994)の中で、「農村固有の景観を活用し、ふるさと体験や生涯学習に活用し、更に都市との交流を図る目的としている」という項目に雪景色を意識したものが見られないため、雪に関する自然景観をこの中に含め、遠景に位置する雪形を多くの里の住民、特に子供に認識させることを提案した(表 1-3-1)。

加えて、大越³¹⁾は、「雪形の形がよくなると農耕を開始するという言い伝えには、美の追求が含まれていると考えられよう。」と述べている。また、これまで農事暦として伝承されてきた雪形に対して、「これからの雪形の伝承」について、「自然(環境)美の理解のための雪形」と指摘し、自然景観として保護するためにこれからの伝承に意義があることが明確にされている。

雪形は、山岳という空間と降雪、そして雪解けという3つの条件を満たさないと成立しない現象である。加えて、雪形のできる山の向きなどとその周囲の地形や、見られる範囲の里の集落の農業や定住状況などの多くの条件が揃わないと成立し得ないものであると考えられる。具体的には、雪形は視対象である遠景の山岳の気象現象による風景として、視点場である近・中景の農地などの里から見られる風景として構成されたものであり、また雪形の形に、人物、生物、動物、農具など人間を含む地域の生物の営みの文化を用いて雪形の名称にして時代を経て受け継がれてきた点が特徴である(図 1-3-1)。

かつては農事暦との関係性を強く言われてきた雪形が、その役割をほぼ失くした現在、日本特有の風致景観及び地域文化としての特性と今後保全・継承の価値づけについて検討する必要があるとされている。

表 1-3-1 雪に関する自然景観³⁰⁾

『景観づくり,むらづくり—農村景観づくりの手引き—』(1994)	
近景	水,土,草木,花,魚,昆虫
中景	水辺,里山,樹木,丘陵
遠景	山林,山脈,海,河川,地平線,野焼
秋田谷による雪に関する自然景観の提案	
近景	雪の結晶,窓霜,氷紋,雪の造形,動物の足跡
中景	樹木,樹霜,おみ渡り,丘陵,流氷,湖氷
遠景	森林,雪形,太陽柱,雪山

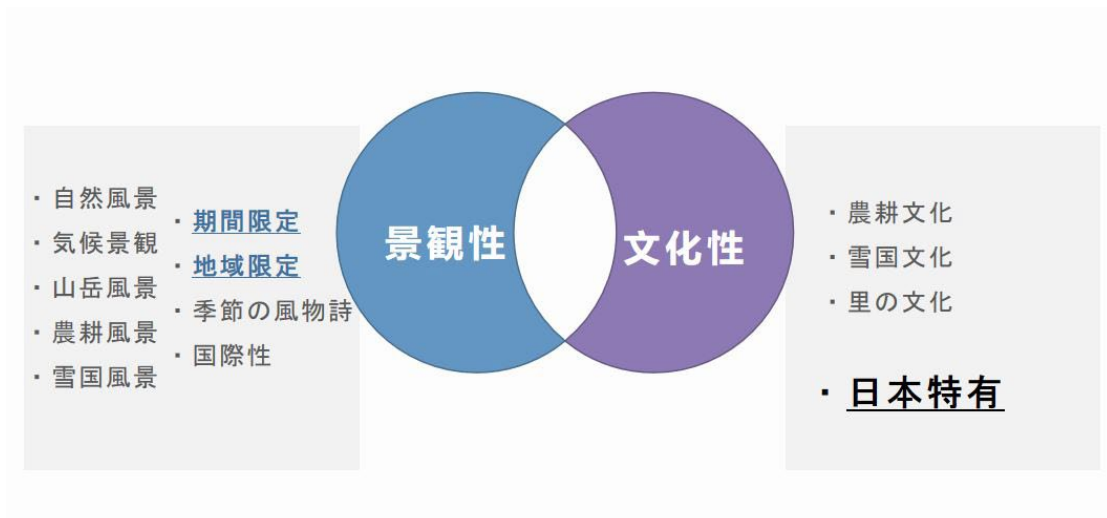


図 1-3-1 雪形に関する景観・文化的特徴

2. 研究の目的

かつては農事暦との関係性を強く言われてきた雪形が、その役割をほぼ失くした現在、日本特有の風致景観及び地域文化としての特性を現代においての価値づけを行い、今後保全・継承の方向性について検討することを目的とする。そのために、以下 6 つの小目的を通して検討を行う。

- (1) 全国の雪形及び分布の特徴を把握する。(第 2 章)
- (2) 全国を対象とした雪形の諸特徴に関するデータベースを構築、評価項目を設定する。(第 3 章)
- (3) 雪形が出現する山岳の地理的条件及び望見地である地域の立地条件から全国における雪形 (631 体) の景観・産業・文化特性を考察する。(第 4 章・第 5 章)
- (4) 「文化的価値を有する雪形」(150 体) の山岳の特性・眺望特性を明らかにし、さらにそれらの雪形の望見地である自治体における雪形への意識と利活用の実態を把握する。(第 6 章・第 7 章)
- (5) 「馬・駒」の雪形 (95 体) と馬に関連する地域文化の関係性を明らかにする。(第 8 章)
- (6) 以上の分析により明らかにした内容を総括し、今後雪形に対する保全・継承の方向性を提示する。(第 9 章)

3. 研究の位置づけ

3.1. 既往研究

雪形に関する既往研究は、多岐にわたっているが、多いというわけではない。

その中の殆どは、民俗学に関する研究である。近年では、景観学、地理・気象・自然科学、教育学の視点からの研究も見られる。具体的には、以下に示す通りである。

「民俗学に関する研究」

具体的には、岩科¹⁰⁾、田淵¹¹⁾などの民俗学の研究者による雪形の形、望見地・伝承地、農事暦などの伝承などを調査・集成した研究である。

全国の雪形及び雪形の伝承について調査・収集した文献は、岩科¹⁰⁾、田淵¹¹⁾、稲³²⁾の研究が確認された。岩科は、まだ多くの研究者に普及していない時期に全国の雪形及びその伝承について調査し、100体以上の雪形を収集した。また、雪形を「“自然暦”の一種であり、自然現象を使用した農事暦」と定義している。一方、田淵は日本全国における300体以上の雪形を収集し、「雪形」の用語が定着し、雪形が全国的に知られるようになったことに貢献した。さらに、岩科と田淵が収集した情報を踏まえて、稲は全国における400体以上の雪形を収集した。

また、地方の調査においては、新潟県内では佐久間³⁴⁾をはじめ、齋藤³⁵⁾、山崎³⁶⁾⁻⁴⁰⁾による研究と、青森県内では室谷⁵⁾などの研究者による雪形とその伝承を調査・集成した研究などがある。

「景観学に関する研究」

景観学においては、作田、赤坂²⁾による福島県吾妻小富士の「兎の雪形」の出現位置を撮影地と山との角度や距離から特定し、また自然環境や地形条件を解析し、さらに伝承の分布、現代社会における「兎の雪形」の捉え方を考察した研究がある。

また、宮腰による新潟県の雪形をケーススタディとして雪形の見える山の景観特性(距離、仰角、向き、視点場の標高と山岳の標高)について研究したものが²⁹⁾ある。

「その他」

その他には地理・気象・自然科学と教育学の視点からの研究がある。

地理・気象・自然科学の視点からは、納口らによる雪形の形成・消滅の過程から用水の計量、雪形を生む自然要素を分析した研究¹⁴⁾と高橋らによる雪形を用いたスギ花粉飛散ステージを予測した研究⁴¹⁾などがある。これらの研究により、今後雪形は科学的に利用できる価値が見られることが明らかになった。

教育学の視点からは、小山¹²⁾、山崎⁴²⁾、和泉⁴³⁾らによる雪形を教科書や授業に取り入れる実践についての研究がある。小山¹²⁾は雪形を農業に従事する先人の知恵であると考え、その地域を子供に伝えるために、小学校の社会科の授業や教材に雪形を取り入れた。山崎⁴²⁾は、若世代に雪国の文化遺産である雪形を伝えるために、新潟大学における教養科目「新潟“雪”物語」において、新潟県内のお年寄りや地元の方に雪形探索に関するヒアリングなどの活動を導入した。和泉⁴³⁾は子供たちに季節感や時間感覚の重要性を理解されるために、雪形を事例として取り上げ、昔話と農事暦の意義について考察することで、健全な季節感覚や時間感覚を育成する授業を行った。

3.2. 研究の位置づけ

研究背景にもすでに述べたように、雪形が伝承されるには、視対象である雪形が出現する山岳の地形や向き、標高、連峰か独立峰かなどの地理的特性、また望見地である地域の立地条件、地形条件などの立地特性と山を眺望する里の住民の営みの行為などの多くの条件が揃わないと成立し得ないと考えられる。

上述の既往研究の中では、雪形の景観特性については、作田、赤坂²⁾による福島県吾妻小富士の雪形「兎の雪形」が出現する位置の地形、宮腰²⁹⁾による新潟県における雪形が出現する山岳の標高やと視点場の村落との距離、仰角、向きについての検討に留まっている。また、雪形の文化特性について言及したものは、上述の岩科¹⁰⁾、田淵¹¹⁾などの民俗学者による民俗学の視点から農事暦などの伝承などを収集した研究に留まっている。さらに、雪形の今日的意義とこれからの伝承について、上記の教育学に関する研究と和泉、小山ら^{12) 42) 43)}、作田ら²⁾のような地域研究はあるが、全国の雪形への意識・利活用の実態の全体像がまだ明確にされていない。

しかし、雪形が出現する山岳はどのような地理的特性(独立峰か連峰かなど)を持つのか？雪形の伝承を有する地域はどのような立地特性(位置づけ、地形など)が見られるのか？また、それぞれの地域環境に応じて伝承されてきた雪形にはどのような文化的表現(種蒔きや田植えなどの営みに関する産業行為など)が見られるのか？さらに、それらの営みに関する産業行為は山岳及び望見地の地理条件、地形条件にはどのような関連性が見られるのか？日本全国における雪形を改めて調査し、雪形の伝承を有する地域の地形条件、地理条件、また人の産業行為など全ての要素に着眼し、雪形の景観・産業・文化特性について検討したような研究はまだない。

また、雪形の望見地である地域における雪形に関する保護・継承の実態を系統的に把握し、地域の景観・文化資源としての新たな価値づけの可能性を探り、保護・継承の可能性について検討したような研究は必要とされている。

本研究では、文化的景観の視点から、単体の雪形の価値だけでなく、雪形の伝承が生まれる空間の環境などの特性とそこで生み出される文化とを結びつけることで、今後の雪形の保護・継承に貢献する点で意義を持つものとして位置付けられる。そこで、本研究は、以下の点について特徴が見られる。

第一に、日本全国の雪形を対象として、山岳の標高や独立峰か連峰かなどの山岳の地理的特性、伝承を有する里の地形などの立地特性をはじめ、農事暦を含め地域の営みに関する

る産業行為や民話などの地域文化など、雪形の諸特徴について全面的に調査検討を行い、データベースにまとめた研究は他に見られない。

第二に、雪形の景観特性を視対象である雪形が出現する山岳の標高、連峰か独立峰などの山岳の地理的特性、また望見地である里の地形などの立地特性など雪形の伝承を有する地域の空間特性を表した要素から全面的に論ずる点は従来の雪形研究に見られない。

第三に、雪形の産業・文化特性を、はじめに地域の営みに関する産業行為、次に民話など雪形に関する地域文化、さらに雪形の色や形などの基本特徴と雪形の景観特性(山岳の地理的特性・望見地の立地特性)の関係から論証したものは他に見られない。

第四に、雪形が景観・文化資源としての潜在的な価値を調査し、将来的な保護・継承に役立つと考えられる。

4. 研究の構成

4.1. 研究の構成

本研究は、序章と終章を加えて9章で構成されている（図1-4-1）。

序章にて雪形の定義及びその保護・継承に関する背景と課題を明確にし、本研究の目的、位置づけを提示した。

第2章では、全国の雪形についての文献や記事、写真集、その他の雪形に関する各種の記述を有する資料を収集・整理した。これは、本研究における雪形の諸特徴を把握するための基礎資料としている。それらの資料に記載されている雪形全てを対象とした日本全国の雪形とその分布の特徴を把握した。

第3章では、図1-4-1で示された本研究の構成とする3つの部分の目的について考察するために、雪形の諸特徴について把握し、「データベースA：全国における雪形（631体）の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベース」、「データベースB：「文化的価値を有する雪形」（150体）の特性に関するデータベース」、「データベースC：「馬・駒」の雪形（95体）と関連する地域文化の考察に関するデータベース」、の3つのデータベースを構築し、それぞれの評価項目を設定した。

第4章と第5章では、「データベースA：全国における雪形（631体）の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベース」の評価項目を使用し、全国における雪形（631体）の景観・産業・文化特性を考察した。対象は、望見地が明確に記載されている631体の雪形である。

第4章では、「データベースA」から雪形の伝承を有する地域の空間の特性を表す項目を抽出し、Bell Curve 社^[注3]のエクセル統計の多変量解析の数量化Ⅲ類により全国における雪形の景観特性を分析した。さらに非階層分析「k-means 法」を用いて類型化し、各類型の特徴を考察した。

第5章では、雪形の産業・文化特性を考察した。具体的には、以下4つの内容と景観特性（山岳の地理的特性・望見地の立地特性）の関係から検討を行った。第一に雪形に関する地域の営みなどの産業行為と景観特性の関係、第二に山名や民話など雪形に関する地域文化と景観特性の関係、第三に雪形の色や形と景観特性の関係、第四に雪形と十二支文化の

関係である。分析には、クロス集計を用いた。

第6章と第7章では、「データベースB：「文化的価値を有する雪形」（150体）の特性に関するデータベース」の評価項目を使用し、文献調査やアンケート・ヒアリング調査により抽出された150体の「文化的価値を有する雪形」の山岳特性、眺望特性を分析し、さらに、それらの雪形の望見地である市町村に対する調査から景観・文化資源としての雪形の可能性について考察した。

第6章では、「データベースB」から「文化的価値を有する雪形」が出現する山の知名度や望見地と山への眺望関係など雪形の山岳特性、眺望特性に関連する項目をBell Curve社のエクセル統計の多変量解析により数量化Ⅲ類で特徴を分析した。さらにはユークリッド平方距離・ウォード法で類型化を行い、各類型の特徴を明確にした。

第7章では、「文化的価値を有する雪形」（150体）の望見地である地域の区市町村史、郷土資料等自治体公式サイト、地域新聞等より雪形についての住民意識や観光資源等を把握し、それらをもとに、文化的価値を有する雪形の望見地である68自治体に対する雪形への住民意識と利活用の現状についてアンケート及びヒアリング調査を実施した。アンケート調査は郵送及びメールにて質問し、ヒアリングは新型コロナウイルスの影響を考慮し、電話によって実施した。期間は、2021年7月20日～8月20日である。

第8章では、「馬・駒」の雪形（95体）と関連する地域文化について考察した。まず、第4章～第7章の考察により得られた「馬・駒」の雪形に関する景観・産業・文化など各種特性をまとめた。次に、以上を踏まえた「データベースC：「馬・駒」の雪形（95体）と関連する地域文化の考察に関するデータベース」の中から、「馬・駒」の形の雪形と日本における馬に関連する文化に関する項目を抽出し、「馬・駒」の形の雪形の文化価値をより詳細に考察した。

最後に、終章ではこれまでの章を通じて得られた知見を総括し、本論文の結論と今後の展望及び課題を提示した。

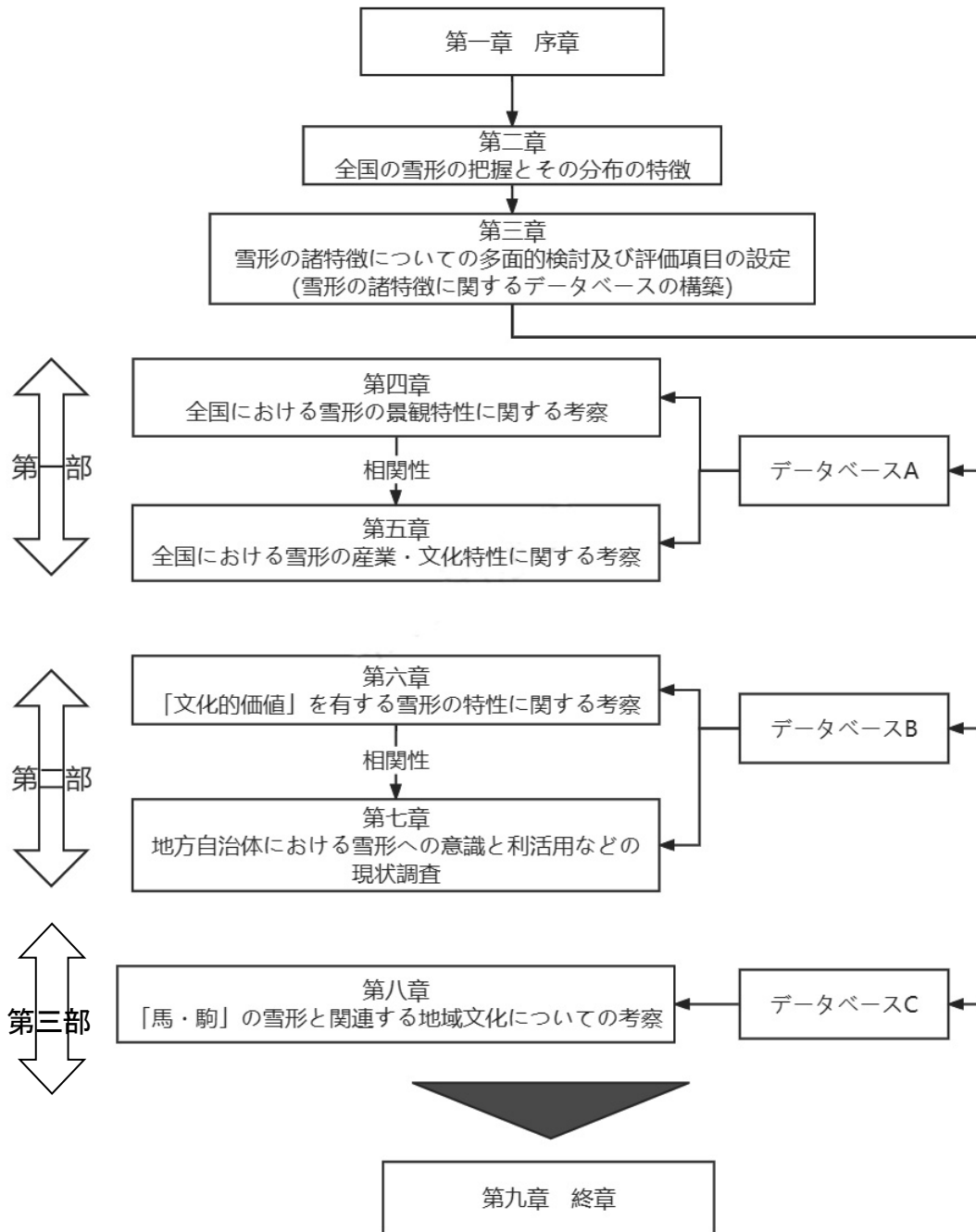


図 1-4-1 研究のフロー

5. 文化的景観について

5.1. 文化的景観とは

5.1.1. 文化的景観の定義及び制定までの流れ

1972年、第17回ユネスコ総会において、世界遺産条約が採択されたが、世界遺産一覧表に登録された文化遺産の多くは、記念的建造物など人間の創造性に基づく作品としての文化遺産と原生的な自然遺産との両極に偏る傾向を示し、その中間にある多様な自然的地域の顕著な普遍的価値が必ずしも十分に一覧表に反映されていないのではないかと指摘されてきた。こうして、人間の営みと自然との結合である文化的景観が、従来の文化遺産と自然遺産との狭間を埋める新たな概念として注目され始めた¹⁶⁾。

1992年、第16回世界遺産委員会において、文化的景観の定義を「Cultural landscapes are cultural properties and represent the "combined works of nature and of man" designated in Article 1 of the Convention。」とした⁴⁴⁾。また、文化的景観の地域を有する自然の程度や自然に対する人間の行為の影響程度により、「意向された景観」、「有機的に進化する景観」、「関連する景観」、の3つの領域に分類された(表1-4-1)¹⁶⁾。

日本国内においては、岡田⁴⁵⁾によれば、古都保存法(1966)や伝統的建造物群保存地区制度(1975)などの法律・条例の制定及び棚田サミットなどの活動の開催をはじめ、以下3つの理由により、景観の文化的価値に着目して保護を行うこととなったと指摘されている。1. 景観や文化財に対する市民の関心が高まり、棚田や里山などの景観の保護を望む声が強まった。2. 既存の文化財保護法の概念では、保護することができていない景観地があった。3. 伝統的建造物群は伝統的な「建造物」が「群になって形成されている」ところに価値を見出しており、農山漁村等の景観地は対象とすることができない。

2004年、文化財保護法の改正により文化的景観の概念が正式に導入され、第2条における文化的景観を「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と正式に定義されている^{46),47)}。

表 1-5-1 世界遺産条約における各領域別の文化的景観¹⁶⁾

番号	領域	定義
1	意匠された景観	人間の設計意図の下に創造された景観（庭園、公園など）。
2	有機に進化する景観	<p>(1) 継続する景観 <u>伝統的な生活様式と密接に結びつき、現代社会の中で活発な社会的役割を持ち、進化の過程が今なお進行中である継続中の景観（棚田など）。</u></p> <p>(2) 遺跡の周囲に残る化石景観</p>
3	関連する景観	信仰や宗教、文学、芸術活動などと直接関連する景観。

5.2. 日本における文化的景観候補として選定されている雪形¹⁶⁾

2005年、文化庁により発行された『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書』¹⁶⁾によれば、「世界遺産条約」及び「文化財保護法」における文化的景観の定義に基づき、日本の風土・文化条件から文化的景観の定義を「農山漁村地域の自然、歴史、文化を背景として、伝統的な産業及び生活と密接に関わり、その地域を代表する独特の土地利用の形態又は固有の風土を表す景観で価値が高いもの」としてより詳しくした。報告書の調査対象とする文化的景観は、「世界遺産条約」における第2領域の「有機的に進化する景観」に該当するとされている。

また、文化的景観の定義に合致する対象に2000年10月から2003年3月にわたって1次調査及び2次調査を実施した。1次調査は表-1の条件に従い、対象とした2311件の中から2つ以上の条件を満足したものの502件が選出された。2次調査は「文化的景観」の独特の性質、構成要素、風景上の価値、景観維持の可能性などの観点から優秀なものを対象とし、180件の重要地区を選定した。

さらに、調査結果に基づき、全国における「文化的景観」を「Ⅰ土地利用に関するもの」、「Ⅱ風土に関するもの」、「Ⅲ伝統的産業及び生活を示す文化財と一体となり周辺に展開するもの」、「Ⅰ～Ⅲの複合景観」、の4つの類型・12つの種別に分類した。

本研究の研究対象である雪形は、「Ⅲ伝統的産業及び生活を示す文化財と一体となり周辺に展開するもの」の中で、「独特の気象によって現れる景観」の項に位置づけている。その中で、福島県飯豊連峰の「寝牛と白馬」の雪形、新潟県守門岳の雪形、富山県僧ヶ岳の雪形、岐阜県笠ヶ岳の「馬」の雪形と乗鞍岳の雪形、そして「複合景観」には岩手県岩手山の雪形が文化的景観候補として選定されている（表1-5-2）。

しかし、それらの雪形の殆どは、すでに農事暦として使用されていないため、文化的景観の条件としての、「生業として営まれているもの」には整合しないことや特定の季節及び場所においてのみ、一時的な気象現象と見られることもあり、文化的景観として認定されるまでには至っていない。

表 1-5-2 文化的景観候補として選定された雪形¹⁶⁾

文化的景観の種類	類別	山岳名と雪形名	県名	自治体名
独特の気象によって 現れる景観	重要地域	飯豊連峰の寝牛と白馬の雪形	福島県	喜多方市
	2次調査地域	守門岳の雪形	新潟県	魚沼市
		僧ヶ岳の雪形	富山県	魚津市、黒部市
		笠ヶ岳と乗鞍岳の雪形	岐阜県	高山市
		笠ヶ岳の馬の雪形	岐阜県	高山市
複合景観 宮沢賢治に関連する 文化的景観	重要地域	岩手山の雪形	岩手県	滝沢市

6. 用語の定義

6.1. 雪形

雪形は昔、「雪占」、「残雪絵」、「雪絵」などと呼ばれ、地方により呼び方は多様であり、明確な呼び方はなかった。

戦前、「雪形」という呼称が殆どなく、1932年、山村における普段に使用されている古い言葉を収集した民俗学者柳田国男の著作『山村語彙』の中で、「ウサギユキ」、「シシノマナコ」、「ノリモノガタ」、「マメマキコゾウ」など残雪の形の表現が記録されているのみである⁴⁸⁾。

1933年、民俗学者中村太郎は『日本民俗論考』にて「雪形」という言葉を使用している⁴⁹⁾。

1938年、岩科小一郎は「残雪絵考」一文を『山小屋』に発表し、「残雪」という言葉を使っている。1943年、同氏は『登山講座』第五巻「山岳語彙」にて「雪形」という用語を取り上げ、その後、1968年発行の『山の民俗』にて「雪形考」を発表した^{10),50)}。

その後、1981年、山岳写真家田淵行男は全国的規模で雪形を集大成した『山の紋章・雪形』¹¹⁾一書を出版し、岩科と田淵により「雪形」という言葉は定着したと考えられる。また、田淵は雪形の中で消え残った雪を成す白いものを「陽画型(ポジ型)」、周囲が白い雪で囲まれた黒い山肌を成すものを「陰画型(ネガ型)」と分類した。

1983年にはじめて、『広辞苑 第三版』にて雪形の定義を「雪形：山腹の雪の消え具合によってできる形。」と正式に取り上げられた¹⁾。

6.2. 雪形の単位

雪形の単位について、最初に全国の雪形を集成した岩科¹⁰⁾以前には、雪形の単位が記載される文献はなかった。岩科は雪形の単位に「種」を使ったが、定着するまでには至らなかった。研究者や記者などにより数を数える言葉としての「一つ」、「一例」、「一個」などが使用されている例も見られる。

その後、全国の雪形をまとめた田淵¹¹⁾は雪形の単位に「体」を使用しており、その後、青森県の雪形を調査した室谷⁵⁾をはじめ多くの研究者も「体」を使用している。

公的資料においては、2011年、『新編弘前市史 通史編 岩木地区』⁵¹⁾では、青森県岩木山の雪形が取り上げられており、雪形の単位について、「体」が使われている。

以上のことから、本研究では、雪形の単位は「体」を用いた。

6.3. 雪形の色

「ネガ型」、「ポジ型」また、田淵は雪形の中で消え残った雪を成す白いものを「陽面型(ポジ型)」、周囲が白い雪で囲まれた黒い山肌を成すものを「陰面型(ネガ型)」と分類した¹¹⁾。

参考文献

- 1) 新村出編：広辞苑 第三版, pp. 2441, 岩波書店, 1982.
- 2) 作田哲啓, 赤坂信：吾妻小富士の雪形—地域限定・期間限定の自然風景—に関する一考察, ランドスケープ研究 Vol. 70, No. 4, pp. 312-319, 2007.
- 3) 安曇野市 HP：観光案内 雪形.
(<https://www.city.azumino.ngano.jp/soshiki/32/10316.html>)
- 4) 宮野典夫：「代かきのころ」, 「雪形—山麓の民俗—」, 山と博物館 Vol. 53, No. 3, 市立大町山岳博物館, 2008.
- 5) 室谷洋司：ふるさと雪形探訪Ⅲ 日本—雪形の棲む岩木山, やぶなべ会報, pp. 42-47, 2006.
- 6) JapanKnowledge 電子版：日本大百科全書, 小学館.
(<https://japanknowledge.com/introduction/writer1.html>)
- 7) 秋山高志, 北見俊夫, 前村松夫, 若尾俊平編：図録・農民生活史事典, pp. 230-234, 柏書房, 1991.
- 8) 佐々木長生：『会津農書』にみる麦の栽培と民俗：非文字資料としての農書・風俗帳, pp. 35-63, 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター, 2019.
- 9) 川口孫治郎：自然暦 新装版, pp. 43, 八坂書房, 2013.
- 10) 岩科小一郎：山の民俗, pp. 200-240, 岩崎美術社, 1968.
- 11) 田淵行男：山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 12) 小山茂喜：伝統・文化に関する教育の充実に関する実践—雪形を扱った事例, 教職研究, Vol. 3, pp. 73-90, 2010.
- 13) 永楽屋東四郎編：富岳百景 3 編 三, 葛飾北斎画, 1834-1835.
- 14) 納口恭明, 河島克久：特別寄稿 気象センサーとしての雪形の生滅, 気象利用研究, Vol. 12, pp. 34-37, 1999.
- 15) 日本地誌研究所編：日本地誌 第1巻 (日本総論), pp. 203-204, 二宮書店, 1980.
- 16) 文化庁文化庁記念物課監修：日本の文化的景観—農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書一, pp. 78, pp. 80, 同成社, 2005.
- 17) 国土交通省：ガイドブック『雪に学び, 雪を楽しむ』.
- 18) 農林水産省：ガイドブック『農と食のサイエンス2014』.
- 19) 農林水産省：教材『教育ファーム大作戦』.
- 20) 林野庁 HP：(<https://www.rinya.maff.go.jp/index.html>)
- 21) NHK：岩手県岩手山「鷲」の雪形.
(https://www.nhk.or.jp/morioka/oosumi_blog/4gatu/article/220419/index.html)
- 22) 国土交通省：景観三緑法.
(<https://www.mlit.go.jp/crd/townscape/keikan/index.htm>)
- 23) 京都市：京の景観ガイドライン.
(<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000281294.html>)
- 24) 京都五山送り火連合会.
(<https://gozan-okuribi.com/2022/ja/top.html>)
- 25) 妙高市：歴史文化基本構想.
(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/rekishibunka/pdf/r1392234_115.pdf)
- 26) 上越市：上越市景観計画.
(<https://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/toshiseibi/keikan-keikan-keikaku.html>)
- 27) 納口恭明：「山岳文化都市宣言記念事業in大町 第2回北アルプス雪形まつり北アルプス雪形フォーラム 雪形の魅力と可能性 (後)」山と博物館, Vol. 49, No. 6, 市立大町山岳博物館, 2004.
- 28) 納口恭明：雪形って知っていますか? (山と気象), 国立公園, Vol. 764, pp. 11-14, 2018.
- 29) 宮腰和弘：雪形の見える山の景観特性について—新潟県をケーススタディとして—, pp. 349-354, 都市計画

論文集 Vol. 32, 1997.

- 30) 秋田谷英次：雪形に期待する, 砂防と治水, Vol. 29, No. 5, pp. 4-6, 1996.
- 31) 大越公平：雪形伝承にみる自然観—自然との共生, 生活文化研究:紀要, Vol. 9, pp. 187-200, 2002.
- 32) 稲雄次：雪形一覽, 北方風土：北国の歴史民俗考古研究誌, Vol. 54, pp. 120-140, 2007.
- 33) 国土地理院編：国土地理院地図.
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 34) 佐久間惇一：越後・雪形資料, あしなか, Vol. 133, pp. 1-7, 1972.
- 35) 斎藤義信：図説雪形, 高志書院, 1997.
- 36) 山崎進：妙高山と南葉山の雪形, あしなか, Vol. 253, pp. 1-10, 1999.
- 37) 山崎進：新潟県魚沼地方の雪形(1), 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 253, pp. 77-96, 2000.
- 38) 山崎進：佐渡の雪形, 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 38, pp. 33-54, 2003.
- 39) 山崎進：新潟県魚沼地方の雪形(2), 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 38, pp. 67-90, 2004.
- 40) 山崎進：新潟県枳尾郷の雪形, 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 41, pp. 93-118, 2006.
- 41) 高橋裕一, 川村宏, 大西拓也, 松澤茂, 小畑征二郎, 川島茂人, 井上聡, 小野瀬浩司：気象衛星 NOAA の画像からの雪形を用いたスギ花粉飛散ステージの予測, 日本花粉学会会誌, Vol. 46, No. 2, pp. 93-101, 2000.
- 42) 山崎英二：農事暦をテーマとした昔話について, 越谷保育専門学校研究紀要 Vol. 4, pp. 12-18, 2015.
- 43) 和泉薫：全教育としての新潟“雪”物語, 気象利用研究, Vol. 13, pp. 51-54, 2009.
- 44) UNESCO World Heritage Centre：Cultural Landscapes.
(<https://whc.unesco.org/en/culturallandscape/>)
- 45) 岡田哲也, 篠原修：「文化的景観」の成立過程と成果・課題に関する考察, 土木学会景観・デザイン研究講演集, NO. 4, pp. 11-18, 2008.
- 46) 文化庁：文化財保護法の一部を改正する法律等について, 2004.
(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyousei/shokan_horei/bunkazai/hogoho_kaisei.html)
- 47) 文化庁：文化的景観.
(<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/keikan/>)
- 48) 柳田国男編：山村語彙, 大日本山林会, 1932.
- 49) 中山太郎：日本民俗学論考, pp. 105, 一誠社, 1933.
- 50) 小野和英：田淵行男と民俗学者らとの交流：雪形をめぐって, 長野県立歴史館研究紀要, Vol. 25, pp. 69-85, 2019.
- 51) 岩木町史編集委員会編：新編弘前市史 通史編 岩木地区, pp. 24-26, 2011.

「注」

- 1) 山折哲雄：日本のこころ, 日本人のこころ, pp. 19-21, 日本放送出版協会, 2004.
- 2) 小宮豊隆編：『寺田寅彦随筆集 第5巻』, pp. 237, 岩波書店, 1963.
- 3) BellCurve 社：エクセル統計.
(<https://bellcurve.jp/ex/>)
- 4) 農村景観計画研究会：景観づくり・むらづくり—農村景観づくりの手引き, ぎょうせい, 1994.

第二章 全国の雪形の把握とその分布の特徴

1. 研究の枠組み

1.1. 研究の背景と目的

全国の雪形の諸特徴を把握するために、まず、全国の雪形とその分布の特徴について把握することが必要である。

1932年、民俗学者柳田国男が、山村における普通に使われている古い言葉を収集した著作『山村語彙』¹⁾には、「ウサギユキ」、「シシノマナコ」、「ノリモノガタ」、「マメマキコゾウ」など、7つの残雪の形の表現が記録されている。最初に全国範囲の雪形を調査・収集したのは、民俗学者岩科小一郎による「雪形考」²⁾ (1943)であり、その中で100本の雪形が収集された。その後、山岳写真家田淵行男は1981年に、全国的な規模で雪形を集大成した著作『山の紋章・雪形』³⁾一書を出版し、311本の雪形を調査・収集した。

その後、地域の雪形をまとめて調査した研究として、新潟県には佐久間⁴⁾をはじめ、斉藤⁵⁾、山崎⁶⁻⁹⁾などの民俗学者によるものがあり、青森県には室谷¹⁰⁾によるものと、石川県には小川¹¹⁾による研究がある。さらに、個別の雪形について報告される研究や記事なども見られるが、それら全てを対象とした全国の雪形及びその分布の特徴について考察した研究がまだ見られない。

そのため、本章では、まず、それらの資料を用いて日本全国の雪形とその分布を把握し、その上で、分布の特徴を明らかにすることを目的とする。

1.2. 研究の手法

① 全国の雪形についての文献や記事、写真集、その他の雪形に関する各種の記述を資料収集し、雪形の諸特徴を把握するための基礎的資料を作成する。

② 前述の資料に記述されている全ての雪形を対象として、日本全国における雪形及び雪形が出現する山岳を把握する。

③ 地理院発行の白地図をベースとして雪形が出現する山岳の分布図を作成し、山岳分布の地理的特徴や地域の気候特徴から雪形の分布の空間的特性を明らかにする。

④ 雪形の望見地である地域が所属する区市町村を特定し、各県における雪形の分布数を明確にする。

2. 雪形の諸特徴の把握に関する資料収集

全国の雪形とその分布を文献調査より明確にした。用いた文献は、全国範囲の雪形を把握した岩科、田淵、稲らの調査報告 3 報をはじめ、地域の雪形をまとめた佐久間、斉藤、山崎らの調査報告 10 報、計 13 報をベースに、各地の雪形を追加・補足したものの 23 報を加えて、計図書 9 冊、報告・記事 25 報から全国の雪形を抽出した(表 2-2-1)。

また、それらの文献には、雪形の出現位置や色、農事暦に関する利用など雪形にまつわる文化に関する記載もあるため、第 3 章～第 8 章における雪形の諸特徴の把握や評価項目の設定、さらに景観・産業・文化など各種特性の分析のための基礎資料とした。

表 2-2-1 雪形の抽出及び諸特徴の把握に用いた文献

全 国	<ul style="list-style-type: none"> ・「残雪絵考」「雪形考」岩科 小一郎(1938,1968) ・『山の紋章・雪形』田淵 行男(1977) ・「雪形一覧」稲 雄次(2007)
地 方	<ul style="list-style-type: none"> ・「越後・雪形資料」佐久間 惇一(1972) ・『図説雪形』斎藤 義信(1997) ・「妙高山と南葉山の雪形」,「新潟県魚沼地方の雪形(1)」,「佐渡の雪形」,「新潟県魚沼地方の雪形(2)」,「新潟県栃尾郷の雪形」山崎 進(1999,2000,2003,2004,2006) ・「白山の雪形」小川 弘司ら (2007) ・『全国駒・馬の雪形』編纂委員会編(2009) ・「八甲田山の雪形」室谷 洋司(2011)
補 足	<ul style="list-style-type: none"> ・「雪形に期待する」秋田谷 英次(1996) ・「農牛と農鳥」土橋 里木(1959) ・「月山と朝日の雪形」小野 洸(1962) ・「山村雑記(5) 残雪絵考=雪形と農耕について」向山 雅重(1969) ・「特集 それゆけ! 北アルプス 随想 アルプスの雪形伝承」長沢 武(1977) ・「VI. 雪形と生活」『豪雪:五六豪雪と三八豪雪』長井 真隆(1982) ・「農事暦になった蝶や羚羊,黒馬の雪形 春の大系線車窓にみる北アルプスの山肌」山下 喜一郎(1983) ・「二 越中の雪形と『越中旧事記』,三 幻の駒ヶ岳残雪絵像」『立山黒部奥山の歴史と伝承』広瀬 誠(1984) ・「雪形の見えるころ 安曇野」NHK 編集センター(1985) ・「地理歳時記 気象のパロメーター・雪形」市川 健夫(1988) ・『新潟県の歴史と民俗』駒形 啓先生退職記念事業の会(1988) ・『年中行事の研究』田中 宣一(1992) ・「加越の雪形と信州・安曇野の小さな記念館」青木 忠(1999) ・「雪形から新緑へ」小平 裕子(2000) ・「雪形伝承にみる自然観-自然との共生」大越 公平(2002) ・「雪形祭・節句・獅子舞(特集 風土と慣習)」南雲 道雄(2008) ・「甲斐の野男-富士の雪形考」信清 由美子(2010) ・「残雪に龍を見る-雪形(雪絵)の伝承」大越 公平(2010) ・「飛驒の雪形-農事暦の饗宴」脇田 雅彦(2011) ・「雪形って知っていますか?(山と気象)」納口 恭明(2018) ・「田淵行男と民俗学者らとの交流:雪形をめぐる」小野 和英(2019)
計: 図書 9 冊, 報告・記事 25 報	

3. 雪形の数及び出現する山岳の分布の特徴

3.1. 雪形の抽出

最初に全国の雪形を収集した岩科²⁾は、報告「雪形リスト」の中で、全国における 60 座の山で 100 体の雪形が確認されたと記述している。同氏の「雪形考」、「富士の残雪」、「残雪絵考」などを加えると、実際に 73 座の山で 118 体の雪形が記述されていることが本稿によって確認された。この後、山岳写真家田淵行男は全国的な規模で雪形を集大成した著作『山の紋章・雪形』³⁾において、311 本の雪形を調査・収集したと記述している。ただし、補遺などを含めると、全国における 161 座の山で 318 体の雪形が本稿によって確認された。また、稲¹³⁾は、岩科や田淵、さらに各地の雪形について調査した研究者の記事や報告などを踏まえ、全国 167 座の山で 415 体の雪形を確認したことが明らかになった。

さらに、佐久間⁴⁾、斉藤⁵⁾、山崎⁶⁾⁻⁹⁾など地域の雪形をまとめて調査したものや全国の雪形についての文献や記事、写真集、その他の雪形に関する各種の記述により抽出された雪形の数の詳細は、**図 2-2-1** に示す通りである。

その結果、それらの文献より、計 20 県、202 座の山、691 体の雪形を抽出した(**表 2-2-2**)。

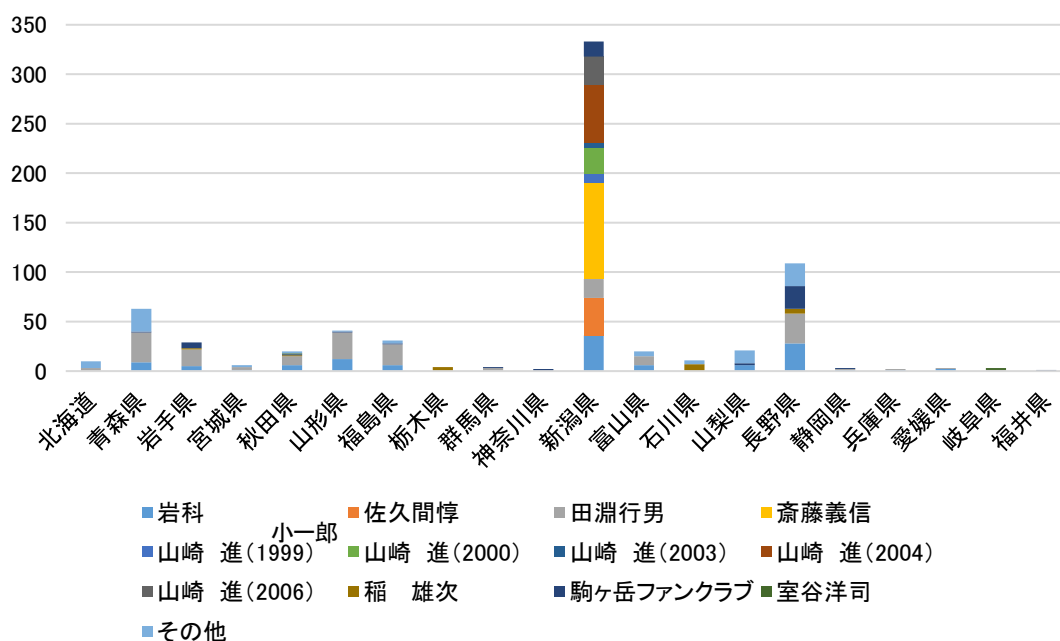


図 2-2-1 各文献により抽出されたの雪形の詳細数

表 2-2-2 雪形の数と分布地域

県別	山岳(座)	数(体)	11. 新潟県	55	333
1. 北海道	8	10	12. 富山県	12	20
2. 青森県	6	63	13. 石川県	3	11
3. 岩手県	16	29	14. 福井県	2	3
4. 宮城県	3	6	15. 山梨県	5	21
5. 秋田県	13	20	16. 長野県	40	81
6. 山形県	19	41	17. 岐阜県	2	3
7. 福島県	17	31	18. 静岡県	1	3
8. 栃木県	4	5	19. 兵庫県	1	2
9. 群馬県	4	4	20. 愛媛県	1	3
10. 神奈川県	2	2	計: 20	202	691

注: 以下の山岳は, 山を眺望する方向や角度などが異なることにより, 複数の県から雪形が見られる場合もある。括弧内の数値は, 各山における雪形の伝承を有する県数を示した。秋田駒ヶ岳 (2), 栗駒山 (3), 蔵王山 (2), 鳥海山 (2), 神室山 (2), 飯豊山 (3), 朝日岳 (2), 乗鞍岳 (2), 黒負山 (2), 富士山 (2)。

3.2. 雪形の分布の特徴

全国の雪形が出現する山岳のプロットしたものを図 2-2-2 に示し、山名と所在地は表 2-2-3 に示す通りである。

雪形の分布には、顕著な空間的特徴が見られる。はじめに地理関係から見ると、最北端は北海道の利尻島から、最南端は四国地方の愛媛県までに分布し、その内、沿海県 15 県、内陸県 5 県に分布しており、134 の自治体が望見地であることが明らかになった。雪形が出現する山岳の所在地は表 2-2-3 に示し、雪形の望見地の詳細は表 2-2-4 に示す通りである。各県における雪形の分布は図 2-2-3 であった。

次に気候関係から見ると、また、図 2-2-2 より雪形が出現する山岳の殆どは気候が厳しい日本海沿岸の地域に分布していることが分かった。雪形は基本的、豪雪地帯に出現し、その中の大部分が特別豪雪地帯に出現することが明らかになった。

更に山岳関係から見ると、雪形は縦の軸に奥羽山脈、越後山脈、飛弾山脈、木曾山脈、赤石山脈などの山脈と山地、横の軸には白神山地、フォッサマグナが経由した山系、その他、利尻島、渡島半島、下北半島、津軽半島、佐渡島に分布していることが明確になった。

* 図例:

- 雪形が出現する山岳
- 豪雪地帯
- 特別豪雪地帯

山脈・山地:

- | | |
|-----------|--------|
| ① 白神山地 | ⑦ 飛弾山脈 |
| ② 出羽山地 | ⑧ 木曾山脈 |
| ③ 奥羽山脈 | ⑨ 赤石山脈 |
| ④ 北上高地 | ⑩ 飛弾高地 |
| ⑤ 越後山脈 | ⑪ 中国山地 |
| ⑥ フォッサマグナ | ⑫ 四国山地 |

島・半島:

- ⑬ 利尻島
- ⑭ 渡島半島
- ⑮ 下北半島
- ⑯ 津軽半島
- ⑰ 佐渡島

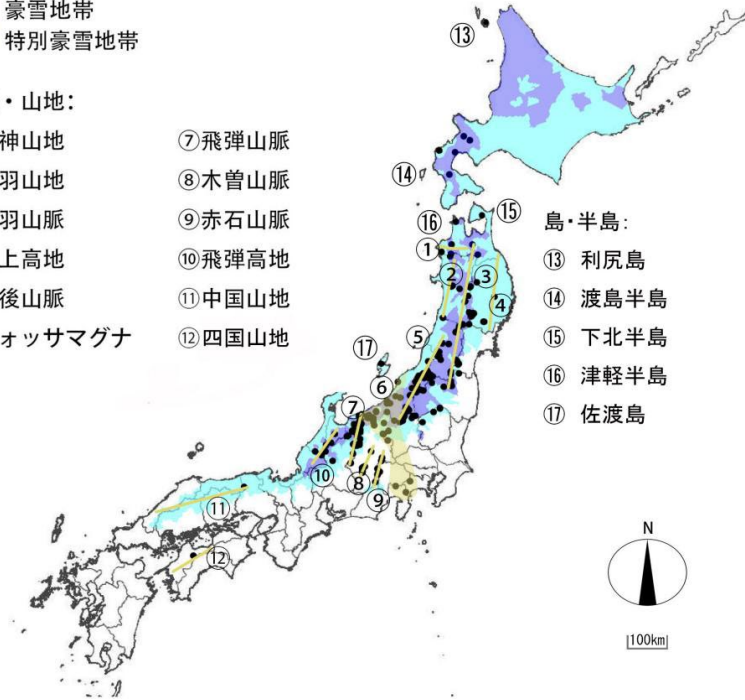


図 2-2-2 全国における雪形の分布とその空間的特徴¹⁴⁾¹⁵⁾
(国土地理院白地図より作成)

表 2-2-3 雪形が出現する山岳と所在地

県名	山岳名							
北海道	函岳	山形県	大朝日岳	新潟県	守門岳	山梨県	富士山	
	砂蘭部岳		小朝日岳		五百山		(甲斐)駒ヶ岳	
	狩場山		蔵王山		猿倉山		観音ヶ岳	
	写万部山		飯豊山		大平山		(白根)間ノ岳	
	ワイスホルン		李蔵山		上権現堂山		農鳥岳	
	羊蹄山		八森山		(越後)駒ヶ岳		乗鞍岳	
	利尻山		葉山		中ノ岳		小蓮華山	
	愛冠岬		瀧山		八海山		白馬岳	
青森県	岩木山	福島県	神室山	新潟県	入道岳	長野県	鍵ヶ岳	
	八甲田山		温暖山		薬師岳		五竜岳	
	大駒ヶ岳		栗子山		丹後山		鹿島槍ヶ岳	
	増川岳		安達太良山		苗場山		西岳	
	尾太岳		笠掛山		金城山		爺ヶ岳	
	釜臥山		箕輪山		榊形山		不動岳	
岩手県	湯森山	福島県	磐梯山	新潟県	巻機山	長野県	餓鬼岳	
	(秋田)駒ヶ岳		鬼面山		牛ヶ岳		常念岳	
	束稲山		(会津)駒ヶ岳		万太郎山		東天井岳	
	(焼石)駒ヶ岳		吾妻小富士		仙ノ倉山		前穂高岳	
	獅子ヶ鼻岳		景鶴山		米山		蝶ヶ岳	
	大荒沢		半田山		(刈羽)黒姫山		乗鞍岳	
	横岳		秋山		尾神岳		鉢伏山	
	経塚山		燧ヶ岳		菱ヶ岳		四阿山	
	東焼石岳		(飯豊)大日岳		妙高山(明高山)		飯縄山	
	天竺山		(飯豊)西大日岳		南葉山(青田難波山)		高社山	
	早池峯山		飯豊山		南葉山(籠町難波山)		権現山	
	三森山		(飯豊)牛ヶ岩山		火打山		将基頭山	
	栗駒山		霊山		焼山		(木曾)駒ヶ岳	
	和賀岳		牛首山		烏帽子岳		茶臼山	
真昼岳	日留賀岳	頸城駒ヶ岳	伊那前岳					
岩手山	太郎山	黒姫山	宝剣岳					
宮城県	栗駒山	栃木県	茶臼岳	新潟県	白鳥山	長野県	島田娘ノ頭	
	蔵王山		南月山		雨飾山		熊沢岳	
	馬ノ神岳		至仏山		金北山		空木岳	
秋田県	藤里駒ヶ岳	群馬県	谷川岳	富山県	五頭山	長野県	南駒ヶ岳	
	(秋田)駒ヶ岳		本白根山		弥彦山		越百山	
	栗駒山		浅間山		首名岳		御嶽山	
	鳥海山	蛭ヶ岳	日倉山		間ノ岳			
	舟ヶ沢山(位置不明)	(箱根)駒ヶ岳	蒜場山		八ヶ岳			
	大石岳	光禿山	鉢伏山		飯綱山			
	太平山	えぶり差岳	東笠山		浅間山			
	ウツギヤライ	二王子岳	西笠山		車山			
	高松岳	飯豊山	僧ヶ岳		仙岳山			
	白神岳	駒形山	牛岳		赤石岳			
	鶴ガ岳	金鉢山	八乙女岳		雨飾山			
	真昼岳	棚橋山	人形山		黒負山(新潟)			
	神室山	菱ヶ岳	早乙女岳		笠ヶ岳			
山形県	鳥海山	新潟県	鯨山	富山県	剣岳	岐阜県	乗鞍岳	
	月山		森立峠		越中駒ヶ岳		静岡県	富士山
	地神山		萱峠		朝日岳		兵庫県	氷ノ山
	(飯豊)駒形山		薬師山		笈ヶ岳		愛媛県	石鎚山
	障子ヶ岳		金倉山		白山		計: 20県、202座山	
	竜ヶ岳		白山		鷲走ヶ岳			
	朝日岳(中岳)		粟ヶ岳		大日山			
	西朝日岳		御神楽岳		赤兔山			
	鍋倉山	福井県	(越前)大日山					

3.3. 雪形の望見地である地域及びその特徴

2.1 に示された文献により、雪形の望見地は 20 県、134 自治体であることが明確にされた。雪形の望見地である県市町村名は表 2-2-3 に示し、各県における雪形の分布は図 2-2-4 に示す通りである。

表 2-2-4 雪形の望見地である市町村の詳細

県	市町村						
北海道	八雲町	山形県	鶴岡市	新潟県	五泉市	長野県	大田市
	長万部町		東根市		加茂市		松本市
	石狩市		舟形町		魚沼市		塩尻市
	利尻町		小国町		見附市		須坂市
青森県	弘前市		大江町		南魚沼市		飯山市
	板柳町		飯豊町		小千谷市		信濃町
	藤崎町		新庄市		十日町市		長野市
	十和田市		最上町		湯沢町		伊那市
	三戸町		寒河江市		柏崎市		駒ヶ根市
	七戸町		山形市		登米市		辰野町
	青森市		金山町		新発田市		木曾町
	今別町		白鷹町		妙高市		上松町
	西目屋村	米沢市	上越市	宮田村			
	新郷村	本宮市	糸魚川市	飯綱町			
むつ市	二本松市	佐渡市	佐久市				
岩手県	雫石町	郡山市	胎内市	岐阜県	高山市		
	金ヶ崎町	福島市	聖籠町		飛騨市		
	奥州市	桑折町	富山県	静岡県	富士宮市		
	花巻市	本宮市			富山市	富士市	
	西和賀町	伊達市			魚津市	兵庫県	養父市
	盛岡市	檜枝岐村			黒部市	愛媛県	西条市
宮城県	栗原市	喜多方市	南砺市	県：20県 市町村：134			
	蔵王町	西会津町	朝日町				
	白石市	那須塩原市	射水市				
秋田県	七ヶ宿町	栃木県	石川県		加賀市		
	能代市				那須町	小松市	
	仙北市	群馬県	福井県		白山市		
	東成瀬村	草津町	勝山市		川北町		
	にかほ市	嬬恋村	山梨県		富士吉田市		
	湯沢市	胎内市			富士河口湖町		
	八峰町	神奈川県	不明		甲斐市		
	大仙市	新潟県	関川村		富士市		
秋田市	村上市		甲府市				
山形県	庄内町		阿賀野市	富士宮市			
	遊佐町		新潟市	白馬村			
	真室川町		阿賀町	小谷村			
	大蔵村		三条市	安曇野市			
西川町	長岡市	長野県					

全国の雪形の分布

* 図例：

● 雪形が出現する山岳

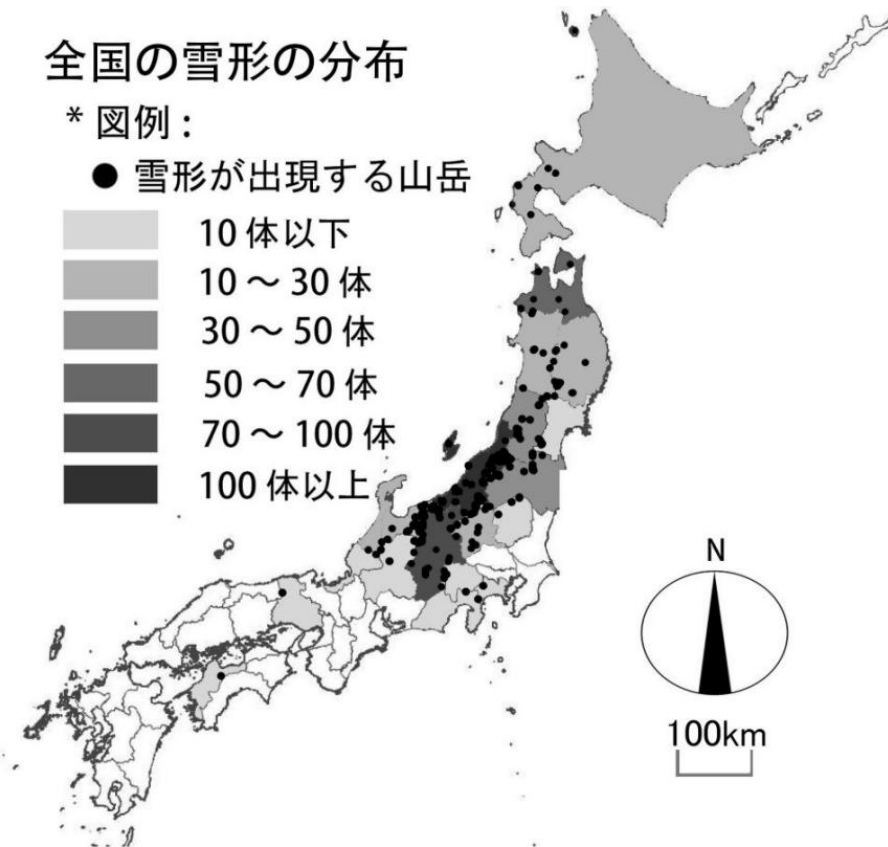


図 2-2-3 各県における雪形の分布
(国土地理院白地図より作成)

雪形の望見地である県市町村については、北海道 4 市町村、青森県 11 市町村、岩手県 6 市町村、宮城県 4 市町村、秋田県 8 市町村、山形県 19 市町村、福島県 10 市町村、栃木県 2 市町村、群馬県 4 市町村、新潟県 24 市町村、富山県 7 市町村、石川県 4 市町村、福井県 1 市町村、山梨県 6 市町村、長野県 18 市町村、岐阜県 2 市町村、静岡県 2 市町村、兵庫県 1 市町村、愛媛県 1 市町村、計 20 県、134 市町村であることが明らかになった。

各県における雪形の分布について、10 体以下の雪形が望見される地域が最多で 9 県であり、具体的には、宮城県、栃木県、群馬県、神奈川県、福井県、岐阜県、静岡県、兵庫県、愛媛県である。次いで 10～30 体は 5 県であり、北海道、岩手県、秋田県、富山県、山梨県が望見地である。さらに、30～50 体は 2 県であり、山形県、福島県が望見地である。50 体以上はただ 3 県であり、その中で、100 体以上は新潟県のみであることが明らかになった。

4. まとめ

本章では、日本全国の雪形とその分布を把握し、その上で、分布の特徴を明らかにした。本章で明らかになった点は、以下に示す通りである。

①岩科、田淵など全国範囲の雪形を把握したものと佐久間、斉藤、山崎など地域の雪形をまとめて調査したものをベースとし、さらに各地の雪形を追加・補足したものを加えて、図書 9 冊、報告・記事 25 報を全国の雪形の抽出や諸特徴の把握の基礎資料とした。

②上記した文献から、計 202 座の山で 691 体の雪形を抽出した。

③雪形の望見地は 20 県、134 自治体であることが明らかになった。具体的には、最北端は北海道の利尻島から、最南端は四国地方の愛媛県までに分布し、その内、沿海県 15 県、内陸県 5 県に分布していることが明らかになった。

④雪形は基本的、豪雪地帯に出現し、その中の大部分が特別豪雪地帯に出現することが明らかになった。

⑤雪形は縦の軸に奥羽山脈、越後山脈、飛弾山脈、木曾山脈、赤石山脈などの山脈と山地、横の軸には白神山地、フォッサマグナが経由した山系、その他、利尻島、渡島半島、下北半島、津軽半島、佐渡島に分布していることが明確になった。

これらのことから、雪形はかつて、農耕文化が盛んであった雪国地域の共通の文化であり、空間的には広域性と普遍性が見られることが推察される。

参考文献

- 1) 柳田国男編：山村語彙，大日本山林会，1932.
- 2) 岩科小一郎：山の民俗，pp. 200-240，岩崎美術社，1968.
- 3) 田淵行男：山の紋章・雪形，学習研究社，1981.
- 4) 佐久間惇一：越後・雪形資料，あしなか，Vol. 133， pp. 1-7，1972.
- 5) 斎藤義信：図説雪形，高志書院，1997.
- 6) 山崎進：妙高山と南葉山の雪形，あしなか，Vol. 253， pp. 1-10，1999.
- 7) 山崎進：新潟県魚沼地方の雪形(1)，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 253， pp. 77-96，2000.
- 8) 山崎進：佐渡の雪形，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 38， pp. 33-54，2003.
- 9) 山崎進：新潟県魚沼地方の雪形(2)，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 38， pp. 67-90，2004.
- 10) 山崎進：新潟県栃尾郷の雪形，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 41， pp. 93-118，2006.
- 11) 室谷洋司：八甲田山の雪形，青山県立郷土館土曜セミナー，2011.
(<https://www.slideshare.net/aokyodokan/ss-8140393>)
- 12) 小川弘司，納口恭明，神田健三，和泉薫：白山の雪形，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 34， pp. 45-53，2007.
- 13) 稲雄次：雪形一覧，北方風土：北国の歴史民俗考古研究誌，Vol. 54， pp. 120-140，2007.
- 14) 国土地理院編：国土地理院地図。
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 15) 豪雪地帯及び特別豪雪地帯指定図。
(<http://www.sekkankyo.org/zenkoku.htm>)

【表 2-2-1 雪形諸特徴の把握に用いた文献】

- ・岩科小一郎：山の民俗，pp. 200-240，岩崎美術社，1968.
- ・田淵行男：山の紋章・雪形，学習研究社，1981.
- ・稲雄次：雪形一覧，北方風土：北国の歴史民俗考古研究誌，Vol. 54， pp. 120-140，2007.
- ・佐久間惇一：越後・雪形資料，あしなか，Vol. 133， pp. 1-7，1972.
- ・斎藤義信：図説雪形，高志書院，1997.
- ・山崎進：妙高山と南葉山の雪形，あしなか，Vol. 253， pp. 1-10，1999.
- ・山崎進：新潟県魚沼地方の雪形(1)，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 253， pp. 77-96，2000.
- ・山崎進：佐渡の雪形，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 38， pp. 33-54，2003.
- ・山崎進：新潟県魚沼地方の雪形(2)，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 38， pp. 67-90，2004.
- ・山崎進：新潟県栃尾郷の雪形，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 41， pp. 93-118，2006.
- ・小川弘司，納口恭明，神田健三，和泉薫：白山の雪形，石川県白山自然保護センター研究報告，Vol. 34， pp. 45-53，2007.
- ・編纂委員会編：全国駒・馬の雪形，編纂委員会，2009.
- ・室谷洋司：八甲田山の雪形，青山県立郷土館土曜セミナー，2011.
(<https://www.slideshare.net/aokyodokan/ss-8140393>)
- ・土橋里木：農牛と農鳥，甲斐の民話，pp. 76-77，未来社，1959.
- ・小野洗：月山と朝日の雪形，あしなか，Vol. 80， pp. 4-5，1962.
- ・向山雅重：山村雑記(5)残雪絵考＝雪形と農耕について，岳人，Vol. 262， pp. 130-134，1969.
- ・長沢武：特集 それゆけ！北アルプス 随想 アルプスの雪形伝承，岳人，Vol. 359， pp. 96-97，1977.

- ・富山地学会編：豪雪：五六豪雪と三八豪雪，pp. 231-238，古今書院，1982.
- ・山下喜一郎：農事暦になった蝶や羚羊，黒馬の雪形 春の大糸線車窓にみる北アルプスの山肌，Vol. 431，pp. 154-155，1983.
- ・広瀬誠：立山黒部奥山の歴史と伝承，pp. 490-500，桂書房，1984.
- ・NHK 編集センター編：NHK 関東甲信越小さな旅 4，pp. 35-62，学陽書房，1985.
- ・市川健夫：地理歳時記 気象のバロメーター・雪形，地理，Vol. 33，No. 5，pp. 68-69，1988.
- ・駒形魁先生退職記念事業の会：新潟県の歴史と民俗，pp. 285-294，1988.
- ・田中宣一：年中行事の研究，pp. 76-101，国学院大学，1992.
- ・雪形に期待する，砂防と治水，Vol. 29，No. 5，pp. 4-6，1996.
- ・青木忠：加越の雪形と信州・安曇野の小さな記念館，気象，Vol. 505，pp. 16032-16036，1999.
- ・小平裕子：雪形から新緑へ，かびれ，Vol. 70，No. 5-823，pp. 24-25，1999.
- ・大越公平：雪形伝承にみる自然観—自然との共生，生活文化研究：紀要，Vol. 9，pp. 187-200，2002.
- ・南雲道雄：雪形祭・節句・獅子舞(特集 風土と慣習)，公評，Vol. 45，No. 6，pp. 28-35，2008.
- ・信清由美子：甲斐の野男—富士の雪形考，甲斐，Vol. 121，pp. 181-183，2010.
- ・大越公平：残雪に龍を見る—雪形(雪絵)の伝承，関東学院大学部紀要，Vol. 120・121，pp. 295-307，2010.
- ・脇田雅彦：飛騨の雪形—農事暦の饗宴，民具マンスリー，Vol. 44，No. 4-520，pp. 10681-10696，2011.
- ・納口恭明：雪形って知っていますか? (山と気象)，国立公園，Vol. 764，pp. 11-14，2018.
- ・小野和英：田淵行男と民俗学者らとの交流：雪形をめぐる，長野県立歴史館研究紀要，Vol. 25，pp. 69-85，2019.

「注」

本研究に関するデータベースは、2021年8月までに収集した情報を基に作成したものであり、今後は雪形の数や望見地などの情報を更新する場合もある。

また、本研究では、望見地が記載されている雪形すべてを対象として抽出したが、望見地である地域の住民、研究者や記者などにより、雪形に関する呼称や形に対しての認識が異なることもあり、呼称が異なっても同一の雪形を示す場合もある。

第三章 雪形の諸特徴についての多面的検討及び 評価項目の設定

1. 研究の枠組み

1.1. 研究の背景と目的

第2章では、全国の雪形とその分布の特徴を明らかにした。雪形の分布は、地域の気温や積雪量、また稲作などの地域産業などに影響されていることが明らかになった。

しかしながら、雪形が伝承されるには、それ以上多様な条件が揃わないと成立し得ないと考えられる。具体的には、視対象である雪形が出現する山岳の地形や向き、標高、連峰か独立峰かなどの地理的特性や山岳にまつわる文化、また望見地である地域の立地条件、地形条件などの立地特性と山を眺望する里の住民の営みの行為や生活の文化など多くの条件によるものであると考えられる。

雪形はかつて農事暦として非常に価値があったものの、現在はその役割をほぼ失っている。今後、雪形を一種の文化的景観として保護・継承するためには、その景観・文化的価値を改めて検討することは非常に重要である。

既往研究においては、雪形の景観特性について、景観学からは作田、赤坂¹⁾による福島県吾妻小富士の雪形「兎の雪形」が出現する場所の自然環境や地形条件を解析した研究と、宮腰²⁾による新潟県における雪形の見える山と視点場の村落との距離、仰角、向きについて検討した研究がある。また、雪形の文化について言及したものは、上述の岩科³⁾、田淵⁴⁾などの民俗学者による民俗学の視点から農事暦などの伝承などを収集した研究に留まっている。

本章では、過去の研究を踏まえて、雪形の伝承を有する地域の地形条件、地理条件、また人の産業行為など雪形の景観・文化的価値に関連する全ての要素に着眼し、雪形に関する価値評価の基盤となるデータベースを構築することを目指す。

1.2. 研究手法

① 文献調査により雪形の伝承を有する里の地形条件、山岳の地理条件、また人の産業行為や地域文化など雪形の諸特徴に関する全ての要素を指標として抽出する。

② 雪形の諸特徴に関連するデータベースを構築し、評価項目を設定する。雪形データベースは、以下3つを作成した。

データベース A：全国における雪形（631 体）の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベース

データベース B: 文献などにより「文化的価値」が明確な雪形 (150 体) を抽出し、その特性に関するデータベース

データベース C: 雪形の中で、数が多いことや雪形が山岳の名称に多く使われていること、現在の自治体の景観計画などの政策に位置づけられていることから、「馬・駒」の雪形 (95 体) と関連する地域文化の考察に関するデータベース

2. 全国における雪形(631 体)の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベースの構築に関する考え

データベース A は、全国における雪形の景観・産業・文化特性を考察するために（第 4 章、第 5 章）、雪形の望見地となる地域の立地特性や雪形出現の山岳の地理的特性などの評価項目を設定し、データベースにまとめた。対象は、第 2 章で抽出された 691 体の雪形の中で、望見地が明確に記載されている 631 体である。

2002 年、環境省による『自然との触れ合い分野の環境影響評価技術検討会中間報告書』⁵⁾では、「「景観」項目が人と自然との豊かな触れ合いの確保という視点のもとに設けられたことを踏まえれば、従来から行われてきた特定の眺望点から特定の景観資源を眺めた眺望景観への影響だけでなく、事業実施区域周辺の身近な身のまわりの景観への影響についても捉えていくことが重要である。」と指摘され、「人と自然との触れ合い」の観点から「景観」項目における環境要素の細区分として「眺望景観」（視覚を通じて認知される景観像）と「囲繞景観」（身のまわりの景観として認知される場）の区分を採用した。また、「景観」の価値を認識する軸として「普遍価値」（誰しものが普遍的に共有しているような価値軸）と「固有価値」（特定の地域や特定の主体に固有な価値軸）のふたつの軸を設定した（表 3-2-1）。

そのため、雪形の景観特性に直接影響する要因を考慮し、「眺望景観」と「囲繞景観」の全ての要素に関係していると考えられる。具体的には、視対象である雪形と雪形が出現する山岳、さらに望見地である地域の空間の特性にも大きく関連があると考えられる。そのため、データベース A は、第一に雪形を生む要因としての山の積雪量による積雪期間、山肌の地形による雪形の出現位置の特定を行った。第二に視対象である雪形が出現する山の類型、標高などの山岳の地理的特性を特定した。第三に雪形の望見地である近・中景の農地などの里の地形などの立地条件、地域特性などを特定した。

本来、望見地の里から雪形への視距離や見込み角、仰角など景観の視覚特性を項目に入れるべきであるが、それらの分析には、雪形の正確な出現位置を特定する必要がある。既往文献では、雪形の出現位置について、殆どの文献では、「山頂直下」、「山頂付近から谷筋」、「中腹付近」などのみの記載である。また、宮腰²⁾は新潟県における山頂から望見地中心部までの距離から雪形の視距離と仰角を算出したが、全国の雪形から見ると、一部の独立峰や山容の大きい連峰では山腹にも雪形が見られる場合もある。以上のことから、雪形への視距離や見込み角、仰角を全ての雪形に対して特定することは今の

段階では困難である。

次に、雪形の産業・文化的特性を考察するためには、雪形の色や形、また産業文化・地域文化などの文化的表現を把握した。

その結果、表 3-2-1 に示す通り、全国における雪形（631 体）の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベースは、4 項目・13 カテゴリーとした。

表 3-2-1 「景観」に対する価値認識⁵⁾

影響を受ける 景観の種類		価値軸	
		眺望景観 視覚を通じて認知される景 観像の変化状況によって捉 えられる影響	囲繞景観 身のまわりの景観として認 知される場の変化状況によ って捉えられる影響
普遍価値	誰しものが普遍的 に共有している ような価値軸	自然性 眺望性 利用性 主題性 力量性 調和性 統一性 審美性	多様性 自然性 傑出性 視認性 利用性 快適性
固有価値	特定の地域や特 定の主体に固有 な価値軸	固有性 歴史性 郷土性 減少性 親近性	固有性 歴史性 郷土性 減少性 親近性

表 3-2-2 データベース A :

全国における雪形 (631 体) の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベース

項目	カテゴリー	詳細	調査手法
雪形の基本特徴	色	ポジ型,ネガ型	表 2-2-1
	形	人物,動物,鳥類,魚類,虫類・爬虫類,植物,道具,文字・形,その他	表 2-2-1
	出現する時間と期間	~月~月	表 2-2-1
	出現位置	山頂付近,稜線付近,山腹	表 2-2-1
雪形の文化的表現	産業文化	農,漁,蚕,山,占 (産業)	表 2-2-1
	地域文化	山名の由来,伝説の対象,地誌・紀行文における記録	表 2-2-1
	その他	その他	表 2-2-1
山岳の地理的特性	所在地	県,市町村	前章 表 2-2-1 国土地理院地図 日本山名事典
	標高	500m以下(特低),500~1000m(低1),1000~1500m(低2),1500~2000m(中),2000~2500m(高1),2500~3000m(高2),3000m以上(特高)	国土地理院地図 日本山名事典
	類型	独立峰,連峰・山地 火山	日本山名事典 山と溪谷「日本の独立峰45選」 日本活火山総覧 (第4版)
望見地の立地特性	所在地	県,市町村	前章 表 2-2-1
	地形	平野,丘陵,盆地,谷間,高原・高地	国土地理院 20 万分 1 地形図 国土地理院編:地形分類と自然地域の名称
	位置づけ	沿海地域,中間地域,内陸地域	各市町村史

2.1. 全国における雪形（631 体）の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベースの評価項目の設定

2.1.1. 雪形の基本特徴

項目の詳細については、雪形の基本特徴について、雪形の色、形、出現位置、出現する時間と期間の4つのカテゴリーにまとめた。

色のカテゴリーには、「ポジ型」、「ネガ型」を設定した。

形のカテゴリーには田淵³⁾、岩科⁴⁾、稻⁶⁾を参考に、9種類に分類した(表 3-2-3)。

2.1.2. 雪形の文化的表現

雪形の文化的表現については、産業文化と地域文化の2つのカテゴリーを設定した(表 3-2-4)。

「産業文化」

雪形は従来、農事暦との関係性が強くいわれており、『会津農書』などの暦書では、田や畑の仕事の目安が記載されているものが殆どである⁷⁾。一方、雪形には、田畑仕事に関するものが殆どであるが、養蚕業、山仕事、漁業などの多様な産業の営みの目安として利用されてきたものも既往文献より確認された。『日本農書全書』では、養蚕業に関する蚕書は「狭義の農書」として収録されたが⁸⁾、それらの養蚕暦は田畑仕事に関する暦書とは別系統のものとして位置づけられていると考えられる。また、漁業には漁書などの漁暦、林業には林業書が存在する。

そのため、ここではこれらの営みを地域の「産業文化」としてまとめた。その結果、産業文化のカテゴリーには、「農業（種蒔き、代掻き、豆蒔きなど）」、「漁業（鰯捕り、鯛捕りなど）」、「養蚕業（蚕の上簇、繭作りなど）」、「山仕事（山菜採り、熊狩りなど）」、「産業占い（豊凶占い、用水占いなど）」に分類した。

さらに、農業に関する雪形には、岩科⁴⁾を参考とし、田仕事と畑仕事、その他の農業に分類した。漁業には、海水漁業、淡水漁業に分類した。

産業文化に関する詳細は、表 3-2-4 に示す通りである。

「地域文化」

また、雪形には山名の由来になったり、伝説の対象になったり、地誌・紀行文に記録されたりなどの地域文化と深く結びついているものも見られる。そのため、地域文化のカテゴリーには「山名の由来」、「伝説の対象」、「地誌・紀行文における記録」に分類した。

「山名の由来」となった雪形には、長野県白馬岳の「代馬」や蝶ヶ岳の「蝶」のように、

「現在まで山名として使われているもの」がある⁹⁾。また、長野県前穂高岳の「御幣」のように、山の古名の「御幣岳」になったものと³⁾、新潟県日倉山の「爺と媪」のように、「じや坂、ばや坂」、「じじばばさん」など地元でしか呼ばれていない山名になったものなどがある¹⁰⁾。これらの雪形を山の「俗名となったもの」に分類した。

「伝説の対象」となったものは、主に「民話の対象」と「信仰の対象」に分類した。「民話の対象」は、新潟県二王子岳の「逆さ男」のように、「昔、ある男が重病の親に氷を取ってくれと頼まれたがいうことを聞かずにいた。その後、女房がクセヤミ（つわり）になって雪が欲しいといったら、二つ返事で山に出かけていった。ところが谷にマクレ（逆さに）落ちて死んでしまった、それからというもの春になると、その姿が田貝山（二王子岳の俗名）に見えるようになった。」など民話や怪談が残されているものと民謡に歌われているものを示している¹⁰⁾。「信仰の対象」は数が少ないが、富山県劔岳の「シカノハナ」のように、古来亡者の山として信仰されてきた山に出現し、生業に関せず、他界信仰にかかわっているものと、長野県五竜岳の「御菱（武田菱）」のように、戦国武将武田氏の家紋として伝承され信仰されてきたものなどがある。シカノハナとは死者の枕元に立てておく一種の造花と言われている³⁾。

「地誌・紀行文などの古文献における記録」は、先述の『会津農書』（1684、貞享元年）など、農書を含め地方の歴史や風土を収集した「地誌」と、滝沢馬琴の『羈旅漫録』（1802、享和2年）など、日記や随筆などによる「紀行文」などの古文献に記録されたものを示している。ここの「地誌・紀行文」は、明治時代までのものを挙げた。

さらに、「暖かになる」、「水泳してよい季節になる」などやや抽象的で、季節の到来などを告げる目安になるものと、単に形象のみ伝承され地元で親しまれてきたものなどは「その他」に分類した。

表 3-2-2 雪形の形象の種類と数^{③,④,⑥}

人物 149
<p>農作業関係 102 (田起こし・代かき「田搔き・田打ち・代かき爺 / 婆 / 坊主, 馬・牛引き爺 / 坊主, 鋤・鎌・杵爺 / 婆, 水引き・水くみ入道 / 婆」, 田植え「田植え・苗取爺 / 婆 / 男, 早乙女, 植女」, 作物の種まき「種 (籾) ・粟・豆・稗・そばまき爺 / 男 / 婆 / 小僧 / 坊主 / 入道 / 法師 / 権兵衛」, その他「半夏爺さん, 農男」),</p> <p>その他の人物 47 (僧, オヨリ婆, 八乙女, 太夫, 舞姫, 盆踊り娘, 天神, 恵比寿様, 風神, 釈迦, 地藏, 常念坊, 天狗, 鬼面, 牛女, 人形, 少年, 少女, 飯盛り婆, 島田娘, 花嫁, 逆さ男, 酒こしばんば, 陣屋代官姿, 相撲取り, スキーヤー, 鷹匠)</p>
動物 194
<p>家畜 140 (馬・駒, 牛, 犬, 猫), その他の動物 54 (兎, 猿, 鼠, 象, 虎, 獅子, 羚羊, 山羊, 鹿, 狐, 狸, 猪, 蝙蝠, 竜)</p>
鳥類 59
<p>鳥, 鶴, 鷺, 鳩, 鶏, カラス, ツバメ, 鷲, 鳶, 鴨, 雁, 郭公, 鷹, 雷鳥</p>
魚類 28
<p>海水魚 18 (鯨, 鰈, 鯛, 鯛, 鮪, 蟹, タツノオトシゴ, 蛤, ホラ貝), 淡水魚 10 (鮒, 鯉)</p>
虫類・爬虫類 13
<p>虫類 5 (蝶, カタツムリ, 蚕), 爬虫類 8 (ヤモリ, 蛇, 亀)</p>
植物 28
<p>松, 銀杏, 杉, 牡丹, ウツギ, 松茸, クルミ, ミョウガ, 大根, 苗, 豆, 粟穂, 藁, かぼちゃ, 夕顔, カタウリ, 桑</p>
道具 101
<p>農具 46 (鋤, 馬鞍, 鋤, 杵, 鎌, 鋤, 鋏, 鋸, 斧, モッコ, ツットコ, カツギ, 臼, ワラダ, 笠, 三つ又), その他の道具 55 (船 / 舟, 錨, 魚釣針, 着物, 袴, 股引き, 花こうがい, 烏帽子, 御幣, 駕籠, 御神酒スズ, 花立, シカノハナ, 棺, 鯨ほこ, 鈎, 扇, 錠, 鍵, 炬燵, 鏡, 傘, 茶釜, 飯盛りしゃもじ, 瓢箪, ワッパ, 榭, 漏斗, お膳, 盃, 瓶)</p>
文字・図形 41
<p>文字 29 (へ, タ, ニ, ウ, マ, い, と, 一, 二, 三, 五, 七, 八, 十一, 大, 牛, 火, 上, 川, 松, 子, 山, XY), 図形 12 (菱形, 心形, 星形, 円, 三日月, 日の丸)</p>
その他 18
<p>田かき岩, 田植え雪, 粟まき雪, 四つマナコ, 三ツ雪, 七どこ雪, ぬの雪, オトミ雪, 道心雪, 連嶺の雪, 雪の真ん中に割れ目, 大森 (盛) の雪, マンマフットツ, ちまき, 祝い餅, やきめし, 大波</p>
<p>*注: ここで示したデータは, 望見地が明確に記載されている 631 体の雪形の種類と数である。</p>

表 3-2-3 雪形に関する産業・地域文化の種類と数¹⁾

カテゴリー	詳細項目/数	内容
産業文化	農業 369	田仕事 260 (田起こし・代かき「田起こし, 田打ち, 荒くり, 代掻き」, 苗づくり「苗代づくり, 種(粃)まき」, 田植え), 畑仕事 125 (野菜の種まき「豆, 粟, 稗, 木綿, 麻, ジャガイモ, イモ, そば, 茄子, キュウリ, カタウリ, トウモロコシ」, 作物の収穫「麦, 大根」, 施肥), その他の農の信号 13 (農をする, 農事の目安)
	漁業 23	海水漁業 21 (鯿, 鰯, 鯛, 鯛, 白身魚, 雑魚), 淡水漁業 2 (川魚捕り, イサザ)
	養蚕業 9	養蚕開始, 蚕が出る, 蚕を掃く, 蚕の上簇
	山仕事 26	山菜採り 23 (ゼンマイ, 筍), その他 3 (薪採り, 山草刈り, 熊狩り)
	産業占い 45	作物の豊凶占い 29 (豊凶作, 米の値が上がる, 飢饉), 豊漁 4, 用水占い 12 (水十分, 水不足), 伝承占い 3 (金が無くなる, 火の用心, 早く首がもげた性の方がその年の死者の数が多い)
地域文化	山名の由来 77	現在まで山名として使われているもの 45, 俗名 32 (山岳の古名になったもの, 地域で俗称されるもの)
	伝説の対象 25	民話の対象 21 (民話/怪談, 民謡), 信仰の対象 4 (他界信仰, 阿弥陀信仰, 地藏信仰, 武家信仰)
	地誌・紀行文における記録 39	地誌・紀行文などの古文獻に記録されているもの 39
その他 168	季節変化に示すもの(動植物など) 7 (水泳してよい, 暖かになる, 春になる, 鳥が飛来), 形象に言及したもの 161	
<p>*注1: ここで示したデータは, 望見地が明確に記載されている 631 体の雪形の種類と数である。</p> <p>*注2: 雪形には「農業」の目安のみとして利用されているものと, 飯豊山の「牛形」のように, 「農業」の目安として利用されると同時に, 「地誌などの古文獻に記録されているもの」がある。このような複数の文化的表現を有する場合は, それぞれの項目に「1」をつけることにした。</p> <p>*注3: 各項目の内容については, 「農業」の場合は, 雪形には仙ノ倉山の「三の字」のように, 「田仕事」の目安として利用されると同時に, 「畑仕事」の目安として使用されるものがある。この場合は, 「田仕事」と「畑仕事」のそれぞれに「1」をつけることにした。他の項目の内容も同様である。「田仕事」の細目の分類は, 参考文献 11) を参考にした。</p> <p>*注4: 「地誌・紀行文における記録」については, 一部の紀行文は地誌に収録される場合もあるので, ここではまとめて調査した。</p>		

2.1.3. 雪形が出現する山岳の地理的特性

雪形が出現する山岳の地理的特性について、雪形の見え方は山岳の類型に、また雪形の望見範囲は山岳の標高と関連しており、そのため、山岳の地理的特性については、標高、類型の2つのカテゴリを設定した。

「雪形が出現する山岳の種類」

山岳の種類の項目について、「独立峰」、「連峰・山地」に分類し、また「火山」であるか否かについても評価項目とした。

「雪形が出現する山岳の標高」

山岳の標高のカテゴリには、山の平均標高を算出した結果、雪形の多くは「1500～2000m」の範囲に出現している。また、山岳の標高は雪形に関する産業の種類やに大きく影響すると考えた。そこで「データベース A」では、山岳の標高を細かく分類し検討を行った。具体的には、「500m 以下(特低)」の山を平地の山、「500～1000m(低 1)」、「1000～1500m(低 2)」の山を低山、「1500～2000m(中)」の山を平均標高の山、「2000～2500m(高 1)」、「2500～3000m(高 2)」の山を高山、「3000m 以上(特高)」の山を特高の山の7段階に設定した。

2.1.4. 雪形の望見地の立地特性

雪形の望見地である地域は、雪形を眺望するには中・前景に位置しており、望見地の地形、位置づけなどの立地特性は雪形の景観特性に影響する重要な要素であると考えられる。

そこで、望見地の立地特性について、地形と位置づけの2つの項目から検討を行った。

「望見地の地形」

はじめに望見地の地形を地形図や各市町村史に基づいて、「平野」、「丘陵」、「盆地」、「谷間」、「高原・高地」、の5つのタイプに分類した(図 3-2-1)。その中、「高原・高地」の項目には、地形図で表記した高原の他、山頂などの山の高所から向こうの山の雪形を眺望する場合の地形もこのタイプに分類した。また、一部の雪形は海上で見られる場合もあり、この場合は「平野」地形に分類した。さらに、雪形の望見地には特定な集落のみで見えるものと市町村レベルの広域範囲で見える場合がある。広域的に見える場合は、便宜的に市町村中心部の地形を用いた。

望見地の位置づけについては、雪形の伝承を有する地域の殆どは日本海沿岸の20県に分布している。その内、海岸線を持たない5県を内陸県、その他の15県を沿海県とした。

しかし、沿海県の中でも、海岸線を持つ市町村と海から遠く離れて、ほぼ内陸県の特徴に近い市町村とその二つの地域を連結する中間の市町村がある場合もある。そのため、海に近い地域と海から離れている地域が望見できる雪形の特徴が異なると考え、また、沿海県と内陸県のみで望見地の位置づけを判断するのは妥当性が低いと考えた。そこで本研究では、人々の生活が海に大きく影響され且つ海岸線を持つ市町村を沿海地域、沿海地域と接壤する市町村を中間地域とし、海へいくには中間地域の境界線を通る必要がある地域と本来、内陸県に位置する市町村を内陸地域と定義した(図 3-2-1)。内陸県の境界線を持つ市町村の多くは、海岸線を持つ沿海地域の市町村までには 1~2 個の中間地域の市町村が経由されており、このことから、本研究では、沿海地域、中間地域、内陸地域に分類するのが妥当であると判断した。

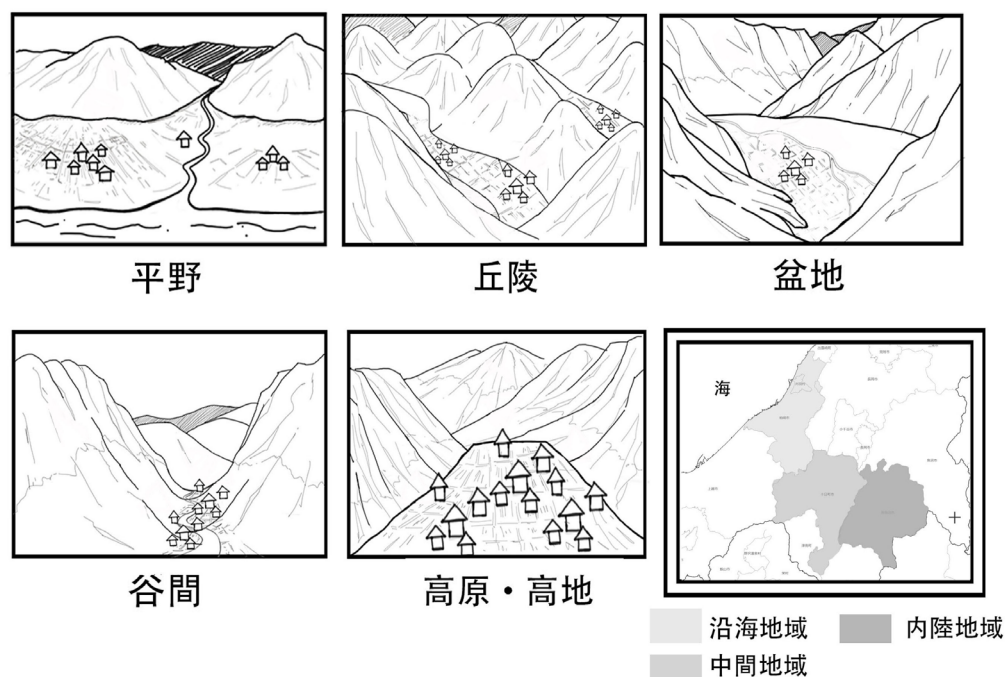


図 3-2-1 雪形の望見地の立地地形と位置づけ

3. 「文化的価値を有する雪形」(150 体)の特性に関するデータベースの構築に関する

考え

3.1. 「文化的価値を有する雪形」の特性分析に関するデータベースの構築の目的及び対象

データベース B は、「文化的価値を有する雪形」を抽出し、その特性に関するデータベースである（第6章、第7章）。

データベース A では全国の雪形における 631 体の雪形を抽出したが、その中に単に形象のみ伝承されているものが多い。雪形の伝承について、新潟県の雪形をまとめて調査・収集した民俗学者山崎¹²⁾によると、「雪形は集落全体で伝承されるのではなく、親から子へと家ごとに伝承されているという印象をもった。同じ集落内の同年代の人でも雪形を知っている人と知らない人とがおり、同一の雪形でも呼称が異なっていたりすることがあるし、稀だが同じ名称で異なる雪形を示している場合もあるからである。」と記述している。また、同氏は、「同じ山の雪形の中で、時代によって注目されるものが変わる場合がある。」と指摘している。

以上のことにより、雪形に関する呼称や形としての認識などは同じ村落でも統一できないことや、時代の変遷によって地域で注目されるものが異なることなどによって、すべての雪形を対象とした保存・継承することは困難であることが明らかになった。また、雪形の利活用に関しては、和泉、小山ら¹³⁾¹⁴⁾、作田ら¹⁾のような地域研究はあるが、全国の雪形への意識・利活用の実態の全体像がまだ明確にされていない。

そのため、どのような雪形が今後の保存・継承に対して価値や可能性が見られるのかについて検討し、さらにそれらの雪形の望見地である地方自治体に対する調査から景観・文化資源としての雪形の可能性を考察することが必要とされている。

一方、現在において、長野県安曇野市のホームページにて東天井岳の「白い仔犬」、蝶ヶ岳の「蝶」、常念岳の「常念坊」など日本アルプスに出現する一連の雪形が地域の景観として紹介されている¹⁵⁾。その他にも、福島県吾妻小富士の「雪ウサギ」と新潟県妙高山の「はね馬」、「山の字」なども市町村のホームページで紹介されており、観光 PR のキャラクターの形に使用されたりしているなど、雪形を地域の景観・観光資源として活用している市町村が出現している¹⁶⁾¹⁷⁾。ここで挙げたものは全て山名の由来や伝説の対象、または地誌・紀行文等古くから記載があるものなど地域文化と深く結びついているものである。

そこで、本研究では、それらの山名の由来や伝説の対象、または地誌・紀行文等古く

から記載があるなど地域文化と深く結びついてもとの、第 7 章におけるそれらの雪形の望見地である自治体に対する雪形への意識と利活用に関するアンケート・ヒアリング調査によって得られた情報により、縣市町村史に記載されているものと、現在まで伝承されてきたものも価値を有すると判断し、150 体の雪形を「文化的価値を有する雪形」とした。データベース A により抽出された 631 体の雪形の中にはないものも含まれる。また、文化庁の報告書¹⁸⁾で文化的景観候補として選定された雪形は全てこの中に含まれる。今後雪形の保全・継承するには、それらの雪形は残す価値や可能性が見られると考えられる。

3.2. 「文化的価値を有する雪形」の特性分析に関するデータベースの評価項目の設定

「文化的価値を有する雪形」の特性分析に関するデータベースには、3.1 で抽出された150体の「文化的価値を有する雪形」が、古文献や县市町村史などに多く記録が残されている理由や、また現在まで伝承されてきた理由について、それらの雪形の山岳特性、眺望特性から検討し、評価項目を設定した。

項目としては、まず雪形の基本特徴について、表 2-2-1 に示した文献の上で、アンケート・ヒアリング調査や地元の新聞報道などの追加資料により、「文化的価値を有する雪形」の基本情報（雪形の基本特徴の色、形、出現位置や期間）、文化的表現（農事暦などの営みとしての利用、地域文化としての認識など）をより詳しく把握した。

次に、それらの「文化的価値を有する雪形」が出現する山の「山岳の特性」と望見地から山への「眺望特性」に影響する要因を考慮し、評価項目を設定した。

「山岳の特性」について、新潟県における雪形が出現する山岳の景観特性について考察した宮腰²⁾によると、「雪形の出現する山には、信仰に関係のある山が多く含まれている。このような要素についても今後考慮する必要があると考えられる。」と指摘している。さらに、民俗学者田中¹⁹⁾も、雪形が出現する多数の山岳について、「山麓のみならず相当広い範囲の人々から篤い信仰の対象とされている山々である。そして、とくに田の神・農神の鎮まる山とする例の多いことは、注目されてよいであろう。」としており、「そこに生ずる雪形は、かつて山麓の人々には、単なる自然現象変化の一齣にとどまるものではなく、鎮まる神々が農作業の適期の指示を与えたもうている現れだとみなす心意が潜んでいたのではないか、と思われるのである。」と記述している。このように、日本では古来より山岳信仰が深く、山岳は神の住む場所として崇められ、雪形も信仰の山などの霊山や名山に関連していることが明確になった。また知名度の高い山に出現する雪形は、これからの保全・継承に対して価値があると考えられる。

そのため、「山岳特性」に関する評価項目は、「山岳の地理的特性」の「種類」と「山岳の知名度」から検討を行った。「山岳の知名度」山の個性と地域資源性、利用形態に着目した。カテゴリーには、「地域資源のランク」、「百名山」、「百霊山」、「地方富士」を設定した。

「眺望特性」について、「文化的価値を有する雪形」の中の多くは、農事暦のみならず、古くから奇勝として認識されていることが明らかになった。それらの雪形に対する認識は、望見地の地形のみならず、山と望見地の「眺望関係」にも大きく影響されると考えられる。山と望見地の「眺望関係」は宮腰²⁾を参考として、雪形が出現する山岳と望見地

との「距離」と望見地から山への「仰角」から考察した。第4章の全国における雪形の景観特性に関する考察では、全国の雪形を対象とした雪形の出現する位置が特定しにくいため、「眺望関係」は分析項目に入れてないが、「文化的価値を有する雪形」の活用現状に対するアンケート・ヒアリング調査や地域新聞、縣市町村史などの補足資料によりそれらの雪形は殆ど山頂付近に出現することが確認できた。そのため、「眺望関係」の「距離」と「仰角」は、宮腰²⁾を参考として、山と望見地の中心部の距離から平均値を算出、山頂との標高差から、仰角の平均を算出することが妥当であると判断した。また、山岳の「標高」について、「文化的価値を有する雪形」は1500m以上の平均標高以上の山に多く出現するため、「平均標高以上」と「平均標高以下」の2つに設定した。

その結果、「文化的価値を有する雪形」の特性分析に関するデータベースは、6項目・17カテゴリーにまとめた(表3-3-1)。

表 3-3-1 データベース B (150 体) :

「文化的価値」を有する雪形の特性分析に関するデータベース

項目	カテゴリー	詳細	調査手法
雪形の基本特徴	色	ポジ型,ネガ型	表 2-2-1 質問調査
	形	人物,動物,鳥類,魚類,虫類・爬虫類,植物,道具,文字・形,その他	
	出現する時間と期間	~月~月	
	出現位置	山頂付近,稜線付近,山腹	
雪形の文化的表現	産業文化	農,漁,蚕,山,占(産業)	質問調査 文献調査
	地域文化	山名の由来,伝説の対象,古文獻・古絵図の記録	
	地域文化の現状と変遷	県市町村史における記録 現代でも認識されているもの	
山岳の地理的特性	所在地	県,市町村	表 2-2-1 国土地理院地図 日本山名事典
	標高	平均標高以下, 平均標高以上	国土地理院地図 日本山名事典
	類型	独立峰,連峰・山地 火山	日本山名事典 山と溪谷「日本の独立峰 45 選」 日本活火山総覧(第4版)
山岳の知名度	地域資源のランク	観光資源台帳 ランク C 以上	「観光資源台帳」日本交通公社
	百名山	百名山である	日本百名山
	百霊山	百霊山である	日本百霊山伝承と神話でたどる日本人の心の山
	地方富士	地方富士である	おらが富士 340 座—全国富士行脚 18 年の記録
望見地の立地特性	所在地	県,市町村	表 2-2-1
	地形	平野,丘陵,盆地,谷間,高原・高地	国土地理院 20 万分 1 地形図 国土地理院編:地形分類と自然地域の名称 各市町村史
眺望関係	距離	平均距離以下	国土地理院 基準点成果等閲覧サービス
		平均距離以上	
	仰角	平均角度以下	算出
		平均角度以上	

4. 「馬・駒」の雪形(95 体)と関連する地域文化の考察に関するデータベースの構築に関する考え

4.1. 「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベースの構築の目的及び対象

データベース C は、「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベースである。(第 8 章)

第 4 章～第 7 章の考察では、全国の雪形の中で、「馬・駒」の数が最多である(95 体)ことが明らかになった。また、山名になったもの、伝説が残されているもの、古文献に記録されているもの及び現在まで認識・活用されているものには「馬・駒」の形が多いことと、さらに観光・景観など各種計画に取り上げられているものの殆どは「馬・駒」であることから、「馬・駒」は価値認識がされていることが明確になった。そのため、今後、雪形文化を保全・継承するには、「馬・駒」の雪形が残っていく可能性が非常に高いと考えられる。

第 7 章のアンケート・ヒアリング調査では、妙高山の雪形「はね馬」は、地元の童話「あさやけまつり」(童話作家 杉みき子)により知名度が高まり、市民にとって愛着や誇りのある景観となり、結果として『妙高市歴史文化基本構想』(2018)では「はね馬」が市の文化的景観として位置づけられている²⁰⁾。雪形を保全・継承するには、身近な文化と結びつける必要性があると考えられる。

4.2. 「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベースの評価項目の設定

以上のことから、データベース C の主な評価内容は、「馬・駒」の雪形と関連する地域文化である。

項目として、「馬・駒」の雪形と馬に関する文化との関係は、馬に関する信仰、街道文化、耕馬文化、馬産地文化から考察した。また、地元の人にとってどのような山には「馬・駒」の雪形が多く見られるのかについて、「馬・駒」の雪形が出現する山岳は「地域の最高峰」であるかどうか、「所属山地の最高峰」であるかどうか、また地域にとって「信仰の山」かどうかについても評価項目とした。

その結果、「馬・駒」の雪形（95 体）と関連する地域文化の考察に関するデータベースは、3 項目・11 カテゴリーにまとめた(表 3-4-1)。

表 3-4-1 データベース C (95 体) :

「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベース

項目	カテゴリー	詳細	調査手法
雪形の基本特徴	色	ポジ型,ネガ型	表 2-2-1
	形	動物(馬・駒)	
雪形の文化的表現	産業文化	農,漁,蚕,山,占(産業)	表 2-2-1
	地域文化	山名の由来,伝説の対象,古文獻・古絵図の記録,その他	
	山系の主峰	主峰である	国土地理院地図 日本山名事典
	地域の最高峰	最高峰である	国土地理院 20 万分 1 地形図 国土地理院 基準点成果等閲覧サービス 各市町村史
望見地における馬に関する文化	所在地	県,市町村	表 2-2-1
	信仰の山	山頂に神社がある, 地域における信仰の山である, 馬の関する信仰がある	国土地理院地図 各縣市町村史 日本山名事典 その他文献調査
	街道文化	街道・宿場	文献調査
	耕馬文化		文献調査
	馬産地		文献調査

5. まとめ

本章では、雪形の伝承を有する地域の地形条件、地理条件、また人の産業行為など全ての要素について系統的に調査検討を行い、雪形の諸特徴を把握し、雪形データベースを構築した。

その結果、以下3つのデータベースを作成した。

「データベース A：全国における雪形（631 体）の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベース」：「データベース A」は第 4 章と第 5 章における全国の雪形に対する景観・産業・文化特性を考察するために、雪形の色や形などの基本特徴、農事暦を含め地域の営みに関する産業行為や民話などの地域文化、山岳の標高や独立峰や連峰などの山岳の地理的特性、望見地の位置づけや地形などの立地特性などの評価項目についてのデータである。その結果、5 項目・16 カテゴリーとした。

「データベース B：文化的価値を有する（150 体）の特性に関するデータベース」：「データベース B」は、今後の保存・継承に対して価値が明確な 150 体の雪形を「文化的価値を有する雪形」として抽出し、それらの雪形の特性をより詳細に分析・考察するために、雪形が出現する山岳の知名度などの山岳文化と雪形が出現する山岳と望見地である里の距離や仰角などの眺望関係を加えて、6 項目・17 カテゴリーとした。

「データベース C：「馬・駒」の雪形（95 体）と関連する地域文化の考察に関するデータベース」：さらに、「データベース A」と「データベース B」に関する考察により雪形の中で、「馬・駒」の雪形は数が多いことや雪形が山岳の名称に多く使われていること、現在の自治体の景観計画などの政策に位置づけられていることから、「馬・駒」の雪形が価値認識されていることが明らかになったことと、雪形を保全・継承するには、身近な文化と結びつける必要性が見られることから、日本における耕馬の分布、馬の流通関係、馬の利用から派生した馬の信仰など各種の地域文化について考察し、「データベース C：「馬・駒」の雪形（95 体）と関連する地域文化の考察に関するデータベース」にまとめる。その結果、3 項目・11 カテゴリーとした。

参考文献

- 1) 作田哲啓, 赤坂信: 吾妻小富士の雪形—地域限定・期間限定の自然風景—に関する一考察, ランドスケープ研究 Vol. 70, No. 4, pp. 312-319, 2007.
- 2) 宮腰和弘: 雪形の見える山の景観特性について—新潟県をケーススタディとして—, 都市計画論文集 Vol. 32, pp. 349-354, 1997.
- 3) 田淵行男: 山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 4) 岩科小一郎: 山の民俗, pp. 200-240, 岩崎美術社, 1968.
- 5) 環境省: 自然との触れ合い分野の環境影響評価技術検討会中間報告書.
- 6) 稲雄次: 雪形一覧, 北方風土: 北国の歴史民俗考古研究誌, Vol. 54, pp. 120-140, 2007.
- 7) 佐々木長生: 『会津農書』にみる麦の栽培と民俗: 非文字資料としての農書・風俗帳, pp. 35-63, 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター, 2019.
- 8) 加藤孝太郎, 田淵浩康: 農業に関する自然暦—風土適応・環境保全型の栽培技術を構築するための先人からの贈り物—, 農業および園芸 Vol. 91, No. 10, pp. 977-986, 2016.
- 9) 徳久球雄, 石井光造, 武内正編: 三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- 10) 斎藤義信: 図説雪形, 高志書院, 1997.
- 11) 農林水産省ホームページ: くらべてみよう昔といまのコメ作り.
(https://www.maff.go.jp/j/agri_school/a_kome/index.html)
- 12) 山崎進: 妙高山と南葉山の雪形, あしなか, Vol. 253, pp. 1-10, 1999.
- 13) 和泉薫: 全教育としての新潟“雪”物語, 気象利用研究, Vol. 13, pp. 51-54, 2009.
- 14) 小山茂喜: 伝統・文化に関する教育の充実に関する実践—雪形を扱った事例, 教職研究, Vol. 3, pp. 73-90, 2010.
- 15) 安曇野市公式ホームページ: 観光案内, 雪形.
(<https://www.city.azumino.ngano.jp/soshiki/32/10316.html>)
- 16) 福島市 HP: 観光 PR キャラクターももりん.
(<https://www.i-fukushima.jp/tokushu/archive/2015/19154/>)
- 17) 妙高市 HP: 新潟) 春告げる雪形「はね馬」妙高山にくっきり, 2007.
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/107.html>)
- 18) 文化庁文化庁記念物課監修: 日本の文化的景観—農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書—, pp. 78, pp. 80, 同成社, 2005.
- 19) 田中宣一: 年中行事の研究, pp. 76-101, 国学院大学, 1992.
- 20) 妙高市: 妙高市歴史文化基本構想, pp. 52, 60, 81, 82, 2018.
(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/rekishibunka/pdf/r1392234_115.pdf)

【表 3-2-1 データベース A に用いた文献】

- ・表 2-2-1 (第 2 章を参照) .
- ・国土地理院編: 国土地理院地図.
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- ・徳久球雄, 石井光造, 武内正編: 三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- ・山と溪谷社編: 日本の独立峰 45 選, 山と溪谷, Vol. 4, pp. 24-25, 2021.
- ・気象庁編: 日本活火山総覧(第 4 版), 2015.
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/menu_jma_hp.html)
- ・国土地理院編: 国土地理院電子地形図 20 万.
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)
- ・国土地理院編: 1. 地形分類, 2. 自然地域の名称.

(https://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atlas-d_j_02.pdf)

- ・各市町村史参照（表 2-2-4）.

【表 3-2-2 データベース B に用いた文献】

- ・表 2-2-1（第 2 章を参照）.
- ・国土地理院編：国土地理院地図。
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- ・徳久球雄，石井光造，武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版，三省堂，Vol. 3，2011.
- ・山と溪谷社編：日本の独立峰 45 選，山と溪谷，Vol. 4，pp. 24-25，2021.
- ・気象庁編：日本活火山総覧（第 4 版），2015。
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/menu_jma_hp.html)
- ・深田久弥『日本百名山』新潮文庫，新潮社，2003 年.
- ・「観光資源台帳」日本交通公社。
(<https://www.jtb.or.jp/page-search-tourism-resource/>（旧）)
(<https://www.jtb.or.jp/research/tourism-resource-list/>（新）)
- ・とよだ時：『日本百霊山伝承と神話でたどる日本人の心の山』ヤマケイ新書，山と溪谷社，2016 年.
- ・中島信典：『おらが富士 340 座—全国富士行脚 18 年の記録』Mybook，1993 年.
- ・国土地理院編：国土地理院電子地形図 20 万。
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)
- ・国土地理院編：1. 地形分類，2. 自然地域の名称。
(https://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atlas-d_j_02.pdf)
- ・各市町村史参照（表 7-2-4）.
- ・国土地理院編：基準点成果等閲覧サービス。
(<https://sokuseikagis1.gsi.go.jp/top.html>)

【表 3-2-1 データベース C に用いた文献】

- ・表 2-2-1（第 2 章を参照）.
- ・国土地理院編：国土地理院地図。
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- ・徳久球雄，石井光造，武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版，三省堂，Vol. 3，2011.
- ・国土地理院編：国土地理院電子地形図 20 万。
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)
- ・国土地理院編：基準点成果等閲覧サービス。
(<https://sokuseikagis1.gsi.go.jp/top.html>)
- ・各市町村史参照（表 2-2-4）.
- ・児玉幸多編：宿場（日本史小百科），東京堂，1997.
- ・五街道の旅：<http://home.b05.itscom.net/kaidou/index.html>
- ・NHK for School：五街道。
(https://www2.nhk.or.jp/school/watch/clip/?das_id=D0005310087_00000&p=box)
- ・中西僚太郎：明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について，歴史地理学，Vol. 169，pp. 2-22，1994.
- ・小佐々学：日本在来馬と西洋馬-獣医療の進展と日欧獣医学交流史-，日獣会誌，Vol. 64，pp. 419-426，2011.
- ・尾崎孝弘：日本在来馬の歴史的変遷と現状，鹿大史学 Vol. 59，pp. 15-28，2012.

第四章 全国における雪形（631 体）の景観特性に関する考察

1. 研究の枠組み

1.1. 背景と目的

雪形はかつて農事暦としての価値非常に価値があったものの、現在はその役割をほぼ失っている。今後、雪形を一種の文化的景観として保護・継承するためには、その景観・文化的価値を検討することは非常に重要である。本章では、データベース A の評価項目を用いて、全国における雪形の景観特性（631 体）に関する考察を通して、雪形の景観的価値について検討することを目的としている。

既往研究においては、雪形の景観特性については、作田、赤坂¹⁾による福島県吾妻小富士の雪形「兎の雪形」の単独の考察に留まっている。また、宮腰²⁾による新潟県における雪形の見える山と視点場の村落との距離、仰角、向きについての検討に留まっている。

しかしながら、雪形が出現する山岳はどのような地理的特性(独立峰か連峰か、標高など)を持つのか、雪形の伝承を有する地域はどのような立地特性(地形や立地条件など)が見られるのかなど、雪形の景観特性について総合的に検討した研究はまだない。そのため、雪形の景観特性を視対象である雪形が出現する山岳の標高、連峰か独立峰などの山岳の地理的特性、また望見地である里の地形などの立地特性など雪形の伝承を有する地域の空間特性を表した要素から全面的に論ずる必要があると思われる。

1.2. 研究の手法

本章では、全国の雪形の景観特性に関連する項目を Bellcurve 社^[注1]のエクセル統計の多変量解析の数量化Ⅲ類により分析し、次にクラスター分析により類型化した。

分析の項目としては、雪形が出現する山岳の地理的特性と望見地の立地特性など雪形の伝承を有する地域の空間の特性を表す項目を用いた。具体的には、データベース A により表 4-1-1 の山岳の地理的特性の標高、類型、望見地の立地特性の地形、位置づけを使用し、各カテゴリーの詳細に 1、0 データで表した。本来、雪形の景観特性を分析するには、雪形の出現する時間と時期、出現位置を変数に入れるべきであるが、文献上に記載されていないものが多く、本研究では除外とした。

分析の対象は、望見地が明確に記載されている 631 体の雪形とした。

表 4-1-1 地理・立地特性による全国における雪形（631 体）の景観特性の分析に使用した評価項目

項目	カテゴリー	詳細	調査手法
山岳の 地理的特性	標高	500m 以下(特 低), 500~1000m(低 1), 1000~1500m(低 2), 1500~2000m(中), 2000~2500 m(高 1), 2500~3000m(高 2), 3000m 以上(特高)	国土地理院地図 日本山名事典
	類型	独立峰, 連峰・山地 火山	日本山名事典 山と溪谷「日本の独立峰 45 選」 日本活火山総覧（第 4 版）
望見地の 立地特性	地形	平野, 丘陵, 盆地, 谷間, 高 原・高地	国土地理院 20 万分 1 地形 図 国土地理院編：地形分類 と自然地域の名称
	位置づけ	沿海地域, 中間地域, 内陸地 域	各市町村史

2. 数量化Ⅲ類により雪形の景観特性の分析

全国の雪形の景観特性を明確にするために、雪形が出現する山岳の地理的特性の標高（「特低」、「低 1」、「低 2」、「中」、「高 1」、「高 2」、「特高」）、類型（「独立峰」、「連峰・山地」、「火山」）、望見地の立地特徴の地形（「平野」、「丘陵」、「盆地」、「谷間」、「高原・高地」）、位置づけ（「沿海地域」、「中間地域」、「内陸地域」）の 18 個の詳細項目（表 4-1-1）を用いて、数量化Ⅲ類分析を行った。分析から導かれる軸は全国の雪形の景観特性に共通して作用する特徴を示すものである（図 4-2-1）。

第 1 軸の相関係数は 0.6997 であり、正の側に大きいものは「特高」、「独立峰」、「火山」であり、一方負の側に大きいものは「低 1」、「低 2」、「特低」である。このことから、第 1 軸は主に山岳の地理的特徴を示す軸であると判読できる。

第 2 軸の相関係数は 0.6055 であり、正の側に大きいものは「高 2」、「内陸地域」、「特高」、「盆地」であり、一方負の側に大きいものは「特低」、「低 1」、「平野」、「沿海地域」、「丘陵」である。このことから、第 2 軸は主に望見地の立地特徴を示す軸であると判読できる。

3. クラスタ分析により景観特性における雪形の類型化

631 サンプルの 2 軸までの固有値を用いてクラスタ分析を行い、今回はサンプル量が多いため、非階層分析「k-means 法」を適用した。クラスタ数はサンプルを詳細に検討し、6つを採用した。

第1、2軸に対するサンプル数量のプロットに各グループの結果を図4-3-1に表す。

全国における各類型の雪形の景観特性の特徴は表4-3-1、分布状況は図4-3-2に表す。

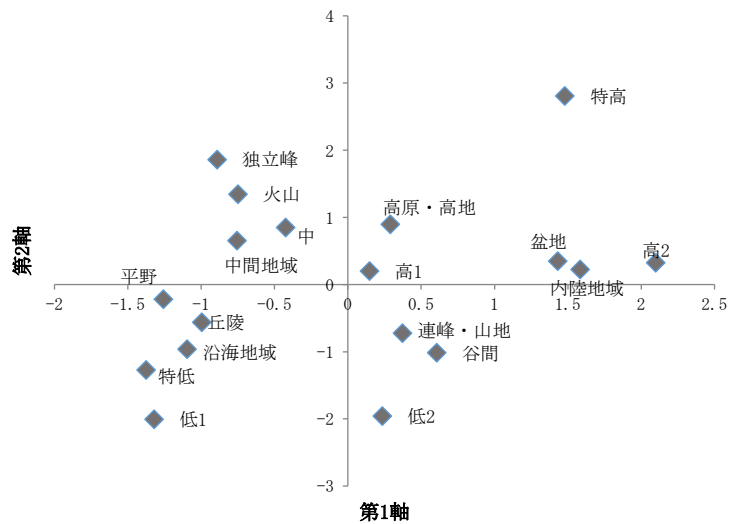


図4-2-1 地理・立地特性による全国における雪形（631体）の景観特性の特徴

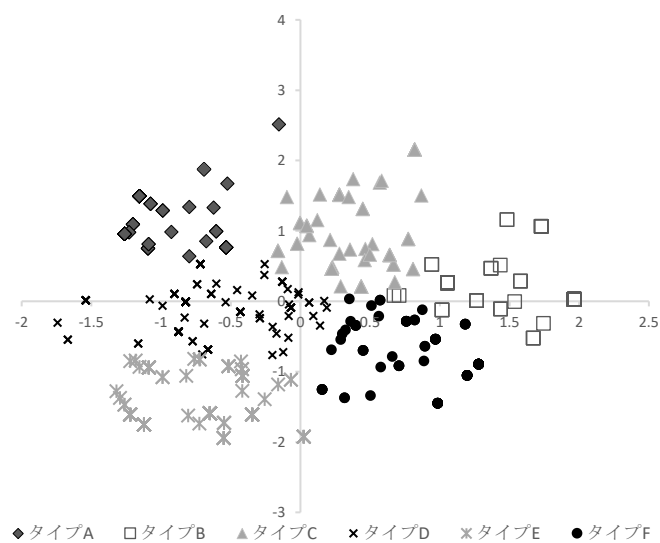
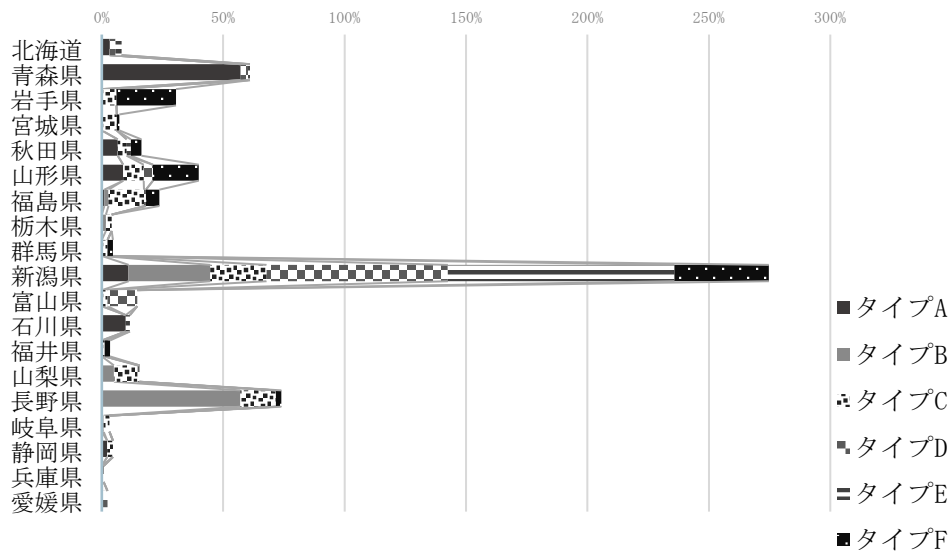


図4-3-1 地理・立地特性による全国における雪形（631体）の景観特性の類型化

表 4-3-1 地理・立地特性による全国における雪形（631 体）の景観特性の類型の特徴

項目	カテゴリー	詳細項目	タイプA	タイプB	タイプC	タイプD	タイプE	タイプF	
			(N=91)	(N=119)	(N=82)	(N=130)	(N=119)	(N=90)	
雪形の 景観特性	望見地の 立地特性	望見地の 地形	平野	85.7%	0%	3.7%	36.9%	63%	0%
			丘陵	8.8%	0%	4.9%	51.5%	29.4%	5.6%
			盆地	4.4%	90.8%	72%	11.5%	1.7%	52.2%
			谷間	0%	11.8%	18.3%	12.3%	24.4%	55.6%
			高原・高地	14.3%	10.1%	18.3%	3.8%	3.4%	6.7%
		望見地の 位置づけ	沿海地域	44%	0%	0%	70.8%	79%	4.4%
	山岳の 地理的特性	山の種類	中間地域	64.8%	0%	32.9%	30%	21.8%	13.3%
			内陸地域	0%	100%	69.5%	2.3%	0%	86.7%
			独立峰	98.9%	0%	52.4%	11.5%	0.8%	0%
		山の標高	連峰・山地	1.1%	100%	47.6%	88.5%	99.2%	100%
			火山	100%	2.5%	72%	50.8%	3.4%	6.7%
			500m以下（特低）	0%	0%	0%	1.5%	1.7%	0%
			500~1000m（低1）	0%	0%	0%	7.7%	41.2%	4.4%
			1000~1500m（低2）	0%	0%	2.4%	3.8%	57.1%	63.3%
			1500~2000m（中）	74.7%	37%	54.9%	70%	0%	10%
			2000~2500m（高1）	13.2%	2.5%	20.7%	16.2%	0%	22.2%
			2500~3000m（高2）	11%	53.8%	4.9%	0.8%	0%	0%
3000m以上（特高）	1.1%	6.7%	17.1%	0%	0%	0%			

注1：表中の母数（N）は各類型の数をを用いた。
 注2：「望見地の立地特性」には、新潟県八海山の「田かき馬」のように、南魚沼市六日町盆地方面の「盆地」地形と長岡市越後平野方面の「平野」地形に立地する両方の地域から見られるものがある。このような複数の立地地形から見られる場合は、それぞれの地形に「1」をつけることにした。また、新潟県妙高山「はね馬」のように、「中間地域」に分類された妙高市と「沿海地域」に分類された上越市の両方で望見される場合もあるので、同様に、それぞれの位置づけに「1」をつけることにした。
 注3：「産業文化」と「地域文化」の算出方は、表5の注2と注3を参照。



N：北海道 9, 青森県 57, 岩手県 27, 宮城県 6, 秋田県 15, 山形県 37, 福島県 21,
 栃木県 5, 群馬県 4, 新潟県 313, 富山県 18, 石川県 11, 福井県 3, 山梨県 14,
 長野県 81, 岐阜県 3, 静岡県 3, 兵庫県 1, 愛媛県 3

図 4-3-2 全国における各類型の雪形の分布状況

4. 地理・立地特性による全国における雪形の景観特性の各タイプの特徴

前節のクラスター分析により、地理・立地特性による全国における雪形の景観特性は6タイプに分類した。本節では、各タイプの特徴(表4-3-1)について考察し、また、各タイプについて命名を行った。命名するには、各類型の特徴が最も明らかな要素を用いた。さらに、各タイプの数が最も多い地域の中(図4-3-2)、景観特性が明らかな事例を使用した。

4.1. タイプA 高山独立峰型(91体)

本類型の望見地の地形は「平野」85.7%、「丘陵」8.8%、「盆地」4.4%、「高原・高地」14.3%である。望見地の位置づけは「沿海地域」44%、「中間地域」64.8%である。6類型の中に中間地域と平野地形の特性が最も顕著なタイプである。雪形が出現する山の類型は殆ど「独立峰」98.9%の火山である。標高は「1500m～2000m」74.7%、「2000～2500m」13.2%、「2500～3000m」11%、「3000m以上」1.1%であり、全ては平均標高以上の高山である。従って、この類型の雪形が出現する山は高山型の独立峰であり、他の山から離れて単独で聳えるため、識別されやすい。また、望見地は視線範囲が広い平野地形であるため、広い範囲から見られることが明らかになった。さらに、山裾が広いことから、山腹までにも様々な雪形が伝承されている場合もあることも明確になった。

青森県八甲田山(1585m)には、数多くの雪形の伝承が残されている。「種まき爺」、「蟹はさみ」、「牛クビ」などの雪形は、青森平野から遠望される。それらの雪形は広がる水田地帯から見られるため、かつては稲の種まきや田植えなどの目安として利用され、有名であった。海沿いの地域では「蟹はさみ」を漁業の目安として利用された。また、大岳は「駒形嶽」、外輪山の小岳は「鳶形岳」、硫黄岳は「松形山」と俗称され、雪形からの由来であったと言われている。さらに、標高が高く、且つ火山型の独立峰は、昔から文人墨客に親しまれていることが明らかになった。八甲田山の雪形は、江戸時代には、菅江真澄の『すみかの山』(1796)をはじめ、北村謙次『北行日録』(1773)、菅江真澄『おがらの滝』(1807)、『月のおろちね』(1812)など多数の古文献に記録されている³⁾。



図 4-4-1 タイプ A 岩木山の雪形⁴⁾

4.2. タイプB 高山連峰型(119体)

本類型の望見地の地形は「盆地」90.8%、「谷間」11.8%、「高原・高地」10.1%であり、6類型の中に「盆地」の特性が最も顕著なタイプである。望見地の位置づけは全て「内陸地域」を示している。山の種類は全て「連峰・山地」であり、殆どが非火山である。山の標高は「1500～2000m」37%、「2000～2500m」2.5%、「2500～3000m」53.8%、「3000m以上」6.7%であり、全てが平均標高以上の山であるため、高山の特性が顕著なタイプである。高山は山頂の融雪が遅速であるため、雪形の持続する時間が比較的長いことが特徴である²⁾。また、標高の高い連峰に出現し、広い盆地地形で望見されるため、この類型の雪形には特に強い景観特性見られることが明らかになった。春になるにつれて、連峰の雪が次々と融け、一つの望見地から壮麗なパノラマのような雪形の風景が眺望できるという特徴がある。

長野県安曇野地方から、4月上旬に入ると次々と連峰の各峰に雪形が現れる。標高の高い山には、爺ヶ岳(2670m)の「種まき爺さん」などの雪形は1ヶ月ほどに出現し、田畑仕事などの目安として多用されてきた。7月上旬でさえ見られる雪形もある。また、蝶ヶ岳(2677m)の「蝶」は4月下旬～6月初旬から2ヶ月ほどに出現し、安曇野市一帯で広域に見られることが明らかになった。「蝶」の形もはっきりしており、江戸時代の『信府統計』(1724)では「蝶ヶ岳ハ春季ニ至リ残雪漸ク消エル時、其形恰モ蝶ノ羽根ニ似タレバ、因テツケラレシモノナリ」と記述されている。さらに、蝶ヶ岳の「蝶」をはじめ、常念岳(2857m)の「常念坊」、五竜岳(2814m)の「御菱」など山名の由来になって現在まで知られている有名な雪形が多く見られることも明らかになった⁵⁾。



図4-4-2 タイプB 日本アルプスの雪形⁶⁾

4.3. タイプC 内陸高原・高地主要型(82体)

本類型の望見地の地形は「平野」3.7%、「丘陵」4.9%、「盆地」72%、「谷間」18.3%、「高原・高地」18.3%である。望見地の位置づけは「中間地域」32.9%、「内陸地域」69.5%である。山の種類は「独立峰」52.4%、「連峰・山地」47.6%、「火山」72%である。山の標高は「1000～1500m」2.4%、「1500m～2000m」54.9%、「2000～2500m」20.7%、「2500～3000m」4.9%、「3000m以上」17.1%である。6類型の中に「高原・高地」と3000m以上の「特高の山」の特性が最も顕著なタイプである。この類型の雪形は高山に出現し、また高原・高地などの高地で望見されることが特徴である。一部は山中に入って向こうの山を眺望する時のみ見られるものもあり、かなり限定的なものが含まれる。

長野県前穂高岳(3091 m)に出現する雪形「御幣」は、常念岳(2857m)・蝶ヶ岳(2664m)の稜線から見られる⁷⁾。望見地は低地の田畑などではないため、「御幣」は農事などの産業に関する記録はなかった。一方、前穂高岳の俗名の「御幣岳」は雪形「御幣」からの由来であったと言われている⁵⁾。「御幣」の雪形は、3000m以上の「特高の山」に出現し、また向こうの高山の稜線から望まれ、かなり限定なものとして認識され、山名の由来になったのではないかと思われる。

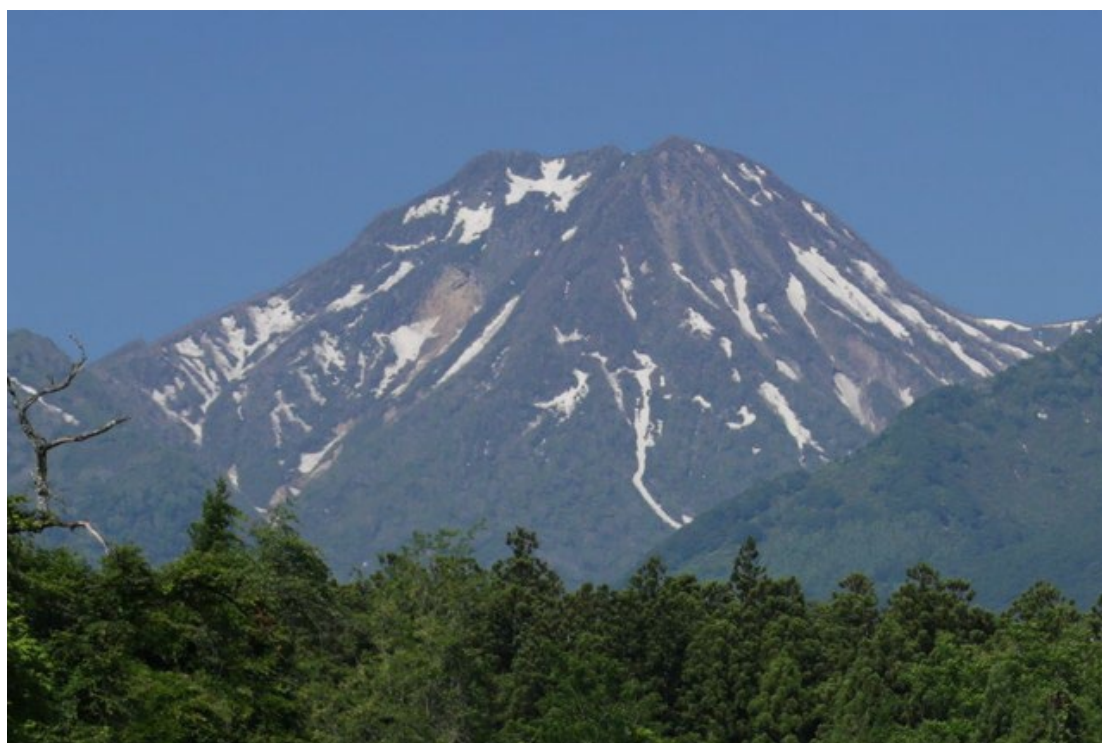


図4-4-3 タイプC 妙高山の「山の字」⁸⁾

4.4. タイプD 沿海丘陵主要型(130体)

本類型の望見地の地形は「平野」36.9%、「丘陵」51.5%、「盆地」11.5%、「谷間」12.3%、「高原・高地」3.8%であり、6 類型の中に「丘陵」の特性が最も顕著なタイプである。望見地の位置づけは「沿海地域」70.8%、「中間地域」30%、「内陸地域」2.3%である。山の種類は「独立峰」11.5%、「連峰・山地」88.5%であり、「火山」50.8%である。標高は「500m以下」1.5%、「500～1000m」7.7%、「1000～1500m」3.8%、「1500～2000m」70%、「2000～2500m」16.2%、「2500～3000m」0.8%である。望見地の殆どは沿海地域の丘陵地形であり、丘陵地帯には谷戸が多いため、村落と村落の間は低い山に隔てられ、山への見え方が異なることにより、同じ雪形が見えても、呼称や営みに関する産業行為の目安としての伝承が異なる場合が多いことも分かった。また、同じ山の雪形が複数の村落から認識され、伝承される場合も多いことが特徴である。

新潟県守門岳(1537m)の「釈迦の首」は、長岡市熊袋・ニッ郷屋などの丘陵地帯で、前山と後山の残雪の組み合わせによって認識されている(図 4-4-4)。田植えの目安として利用された。上樫出地方では、頭と胴体がすこし分離して、「釈迦の寝姿」と呼ばれ、種まきの目安であった。入塩川・上塩地方では、首のみが雪形として認識され、「三角ちまき」と呼ばれている。鱒捕りの目安として利用された⁹⁾。同様に、胴体のみが雪形として認識されている地域もある¹⁰⁾。

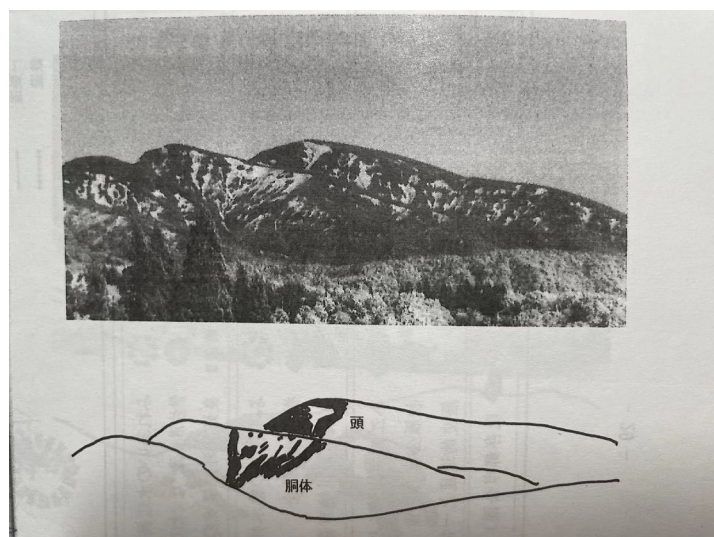


図 4-4-4 タイプD 守門岳「釈迦の首」⁹⁾

4.5. タイプE 沿海低山連峰型(119体)

本類型の望見地の地形は「平野」63%、「丘陵」29.4%、「盆地」1.7%、「谷間」24.4%、「高原・高地」3.4%である。望見地の位置づけは「沿海地域」79%、「中間地域」21.8%である。雪形が出現する山の種類は「独立峰」0.8%、「連峰・山地」99.2%であり、「火山」3.4%である。標高は「500m以下」1.7%、「500～1000m」41.2%、「1000～1500m」57.1%であり、6類型の中に低山型の連峰の特性が最も顕著なタイプである。

このタイプの雪形は新潟県で最も多く見られるが、北海道石狩市愛冠岬の「馬雪」は、愛冠海岸の標高(394m)の岬の麓に出現しており、山麓且つ岬に見られる雪形がかなり珍しいものであり雪形研究において貴重であると考え、事例として用いた。岬に出現するため、海上のみで望見される。漁民たちは「馬雪」を海水漁業の目安として使用されてきたことが明らかになった¹¹⁾。



図4-4-5 タイプE 愛冠岬「馬雪」¹²⁾

4.6. タイプF 内陸谷間主要型(90体)

本類型の望見地の地形は「丘陵」5.6%、「盆地」52.2%、「谷間」55.6%、「高原・高地」6.7%であり、6 類型の中に「谷間」の特性が最も顕著なタイプである。望見地の位置づけは「沿海地域」4.4%、「中間地域」13.3%、「内陸地域」86.7%である。山の種類は全て「連峰・山地」であり、「火山」6.7%である。標高は「500～1000m」4.4%、「1000～1500m」63.3%、「1500～2000m」10%、「2000～2500m」22.2%である。谷間地形で見られる雪形は、望見範囲がかなり限られていることが特徴である。

新潟県仙ノ倉山(2026m)の「三の字」は、湯沢町土樽地方から見られる。土樽地方は山林と河川に挟まれ、細長い谷状の地形である。谷間地形は山への意識が高い。山の標高が高いため融雪のスピードも遅く、雪形は5月～7月までの長い期間で農事の日安として使われている。「三の字」のように、「三の字で苗代、二の字で豆まき、一の字で田植えが行う」など⁹⁾、同じ雪形の変化を見ながら農事の手順を決めることが多いことが明らかになった。

5. まとめ

本章では、はじめに雪形の景観特性に直接影響する要因としての「雪形が出現する山岳の地理的特性」と「望見地の立地特性」など 4 カテゴリー・18 個の詳細項目を用いて数量化Ⅲ類により分析し、全国における雪形（631 体）の景観特性を明らかにした。

次に数量化Ⅲ類の結果を用いてクラスター分析（k-means 法）により全国の雪形を 6 つのタイプに分類し、「タイプ A 高山独立峰型」、「タイプ B 高山連峰型」、「タイプ C 内陸高原・高地主要型」、「タイプ D 沿海丘陵主要型」、「タイプ E 沿海低山連峰型」、「タイプ F 内陸谷間主要型」と命名した。

「タイプ A 高山独立峰型」、「タイプ B 高山連峰型」と「タイプ C 内陸高原・高地主要型」の殆どは、標高の高い山に出現し、望見範囲が広いことが特徴であることが明らかになった。「タイプ D 沿海丘陵主要型」、「タイプ E 低山連峰型」、「タイプ F 内陸谷間主要型」は標高や地形などにより、空間的に視野が限られていることもあることが明らかになった。

参考文献

- 1) 作田哲啓, 赤坂信: 吾妻小富士の雪形—地域限定・期間限定の自然風景—に関する一考察, ランドスケープ研究 Vol. 70, No. 4, pp. 312-319, 2007.
- 2) 宮腰和弘: 雪形の見える山の景観特性について—新潟県をケーススタディとして—, 都市計画論文集 Vol. 32, pp. 349-354, 1997.
- 3) 室谷洋司: 八甲田山の雪形, 青山県立郷土館土曜セミナー, 2011.
(<https://www.slideshare.net/aokyodokan/ss-8140393>)
- 4) ニッポン旅マガジン HP: 岩木山「黒うさぎ」(竜の子) 雪形.
(<https://tabi-mag.jp/yukigata-mtiwaki/>)
- 5) 田淵行男: 山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 6) 古道 塩の道 千国街道 HP: 塩の道 雪形ウォッチング.
(<https://fumoto.info/snow.html>)
- 7) 稲雄次: 雪形一覧, 北方風土: 北国の歴史民俗考古研究誌, Vol. 54, pp. 120-140, 2007.
- 8) 妙高市 HP: 妙高山と善光寺.
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/6709.html>)
- 9) 斎藤義信: 図説雪形, 高志書院, 1997.
- 10) 山崎進: 新潟県栃尾郷の雪形, pp. 93-118, 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 41, 2006.
- 11) 大越公平: 雪形伝承にみる自然観—自然との共生, 生活文化研究: 紀要, Vol. 9, pp. 187-200, 2002.
- 12) 石狩市 HP: 愛冠岬「馬雪」.
(<https://www.city.ishikari.hokkaido.jp/site/sightseeing-guide/15835.html>)

【表 4-4-1 データベース A に用いた文献】

- ・ 国土地理院編: 国土地理院地図.
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- ・ 徳久球雄, 石井光造, 武内正編: 三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- ・ 山と溪谷社編: 日本の独立峰 45 選, 山と溪谷, Vol. 4, pp. 24-25, 2021.
- ・ 気象庁編: 日本活火山総覧(第 4 版), 2015.
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/menu_jma_hp.html)
- ・ 国土地理院編: 国土地理院電子地形図 20 万.
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)
- ・ 国土地理院編: 1. 地形分類, 2. 自然地域の名称.
(https://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atlas-d_j_02.pdf)
- ・ 各市町村史参照 (表 2-2-4).

「注」

- 1) Bell Curve 社: 統計解析ソフトエクセル統計.
(<https://bellcurve.jp/ex/>)

第五章 全国における雪形（631 体）の産業・文化特性に関する考察

1. 研究の枠組み

1.1. 研究の背景と目的

序章の背景にすでに述べたように、雪形は、雪形のできる山の向きなどとその周囲の地形や、見られる範囲の里の集落の農業や定住状況などの多くの条件が揃わないと成立し得ないものである。具体的には、雪形は視対象である遠景の山岳の気象現象による風景として、視点場である近・中景の農地などの里から見られる風景として構成されたものであり、また雪形の形に、人物、生物、動物、農具など人間を含む地域の生物の営みの文化を用いて雪形の名称にして時代を経て受け継がれてきた点が特徴である。

既往文献においては、雪形の文化について言及したのは、岩科¹⁾、田淵²⁾などの民俗学者による民俗学の視点から、農事暦などの伝承などを収集した研究が殆どである。しかし、それらの種蒔きや田植えなどの営みに関する産業行為などの文化が、望見地である地域の地形や立地などの地域環境とどのような関係があるのかについて検討した研究がまだ見られない。このように、単独の雪形の文化的価値だけでなく、雪形の伝承が生まれる空間の環境などの特性とそこで生み出される文化とを結びつけることで、雪形を文化的景観としてさらに価値があるものとすることができると考えられる。

本章では、第4章の雪形の景観特性に関する考察の結果を踏まえて、全国における雪形(631体)の雪形の産業・文化特性について検討することを目的としている。

1.2. 研究の手法

分析には、第一に雪形の産業文化の全項目、第二に地域文化の全項目、第三に雪形の基本特徴の「色」と「形」を用いて、景観特性(山岳の地理的特性、望見地の立地特性)との関係について考察する(表5-1-1)。具体的には、以下の2つから検討を行う。

はじめに第4章の景観特性のクラスター分析結果を踏まえて、表5-1-1に示す雪形の基本特徴、産業文化と地域文化の詳細項目を加えてクロス集計で算出し、各類型の産業・文化特性を把握する(表5-1-2)。しかし、各タイプには多様な地理条件や立地条件に影響され、クラスター間では特徴が明確でない場合もある。

そのため、次に、その上で、雪形の産業・文化特性について総合的に考察するために、雪形の基本特徴、産業文化と地域文化の詳細項目の総数と景観特性(山岳の地理的特性、望見地の立地特性)の関係についてクロス集計で算出する。項目の詳細は、表3-2-3、表3-2-

4に示された通りである。

しかし、日本全国における雪形の景観特性を把握するために、「その他」も分析項目として入れたが、具体的な営みの文化ではないため、特徴の把握が難しいことから、本章の産業・文化特性の分析では除外することとした。

表 5-1-1 全国における雪形（631 体）の産業・文化特性の分析に使用した評価項目

項目	カテゴリー	詳細	調査手法
雪形の基本特徴	色	ポジ型, ネガ型	表 2-2-1
	形	人物, 動物, 鳥類, 魚類, 虫類・爬虫類, 植物, 道具, 文字・形, その他	表 2-2-1
雪形の文化的表現	産業文化	農, 漁, 蚕, 山, 占（産業）	表 2-2-1
	地域文化	山名の由来, 伝説の対象, 古文献・古絵図の記録, 季節の印	表 2-2-1
山岳の地理的特徴	標高	500m 以下(特低), 500~1000m(低1), 1000~1500m(低2), 1500~2000m(中), 2000~2500m(高1), 2500~3000m(高2), 3000m 以上(特高)	国土地理院地図 日本山名事典
	類型	独立峰, 連峰・山地 火山	日本山名事典 山と溪谷「日本の独立峰 45 選」 日本活火山総覧（第 4 版）
望見地の立地特徴	地形	平野, 丘陵, 盆地, 谷間, 高原・高地	国土地理院 20 万分 1 地形図 国土地理院編：地形分類と自然地域の名称
	位置づけ	沿海地域, 中間地域, 内陸地域	各市町村史

表 5-1-2 各タイプにおける全国における雪形（631 体）の景観特性と産業・文化特性の詳細

	項目	カテゴリー	詳細項目	タイプA (N=91)	タイプB (N=119)	タイプC (N=82)	タイプD (N=130)	タイプE (N=119)	タイプF (N=90)
雪形の 景観特性	望見地の 立地特性	望見地の 地形	平野	85.7%	0%	3.7%	36.9%	63%	0%
			丘陵	8.8%	0%	4.9%	51.5%	29.4%	5.6%
			盆地	4.4%	90.8%	72%	11.5%	1.7%	52.2%
			谷間	0%	11.8%	18.3%	12.3%	24.4%	55.6%
			高原・高地	14.3%	10.1%	18.3%	3.8%	3.4%	6.7%
		望見地の 位置づけ	沿海地域	44%	0%	0%	70.8%	79%	4.4%
			中間地域	64.8%	0%	32.9%	30%	21.8%	13.3%
			内陸地域	0%	100%	69.5%	2.3%	0%	86.7%
	山岳の 地理的特性	山の種類	独立峰	98.9%	0%	52.4%	11.5%	0.8%	0%
			連峰・山地	1.1%	100%	47.6%	88.5%	99.2%	100%
			火山	100%	2.5%	72%	50.8%	3.4%	6.7%
		山の標高	500m以下（特低）	0%	0%	0%	1.5%	1.7%	0%
			500~1000m（低1）	0%	0%	0%	7.7%	41.2%	4.4%
1000~1500m（低2）			0%	0%	2.4%	3.8%	57.1%	63.3%	
1500m~2000m（中）			74.7%	37%	54.9%	70%	0%	10%	
2000~2500m（高1）	13.2%		2.5%	20.7%	16.2%	0%	22.2%		
		2500~3000m（高2）	11%	53.8%	4.9%	0.8%	0%	0%	
		3000m以上（特高）	1.1%	6.7%	17.1%	0%	0%	0%	
雪形の 産業・文化特性	雪形の 基本特徴	色	ポジ（白）	47.3%	37%	59.8%	57.7%	73.9%	46.7%
			ネガ（黒）	19.8%	43.7%	11%	26.2%	17.6%	14.4%
		形	人物	27.5%	29.4%	22%	25.4%	16.8%	28%
			動物	33%	35.3%	37.8%	29.2%	22.7%	20.9%
			鳥類	7.7%	12.6%	6.1%	6.2%	10.1%	13.3%
			魚類	2.2%	0%	7.3%	6.9%	7.6%	2.2%
			虫類・爬虫類	0%	3.4%	3.7%	1.5%	0.8%	3.3%
			植物	4.4%	1.7%	1.2%	6.2%	5.9%	6.7%
	文字・形		5.5%	8.4%	8.5%	5.4%	5.9%	5.6%	
	道具		17.6%	9.2%	12.2%	17.7%	23.5%	14.4%	
	その他	2.2%	0%	1.2%	1.5%	6.7%	5.6%		
	雪形の 産業・文化特性	産業文化	農業	52.7%	46.2%	58.5%	61.5%	72.3%	57.8%
			（ア）田仕事	40.7%	27.7%	40.2%	38.5%	61.3%	37.8%
			（イ）畑仕事	12.1%	20.2%	19.5%	30%	17.6%	15.6%
			漁業	4.4%	0%	0%	9.2%	5.9%	0%
			養蚕業	0%	0%	4.9%	0%	3.4%	1.1%
			山仕事	3.3%	1.7%	2.4%	3.8%	8.4%	4.4%
			産業占い	14.3%	4.2%	8.5%	9.2%	5%	2.2%
		地域文化	山名の由来	5.5%	19.3%	15.9%	12.3%	7.6%	12.2%
			（ア）山名	0%	15.1%	11%	4.6%	4.2%	7.8%
（イ）俗名			5.5%	4.2%	4.9%	7.7%	3.4%	4.4%	
伝説の対象			1.1%	7.6%	7.3%	4.6%	1.7%	1.1%	
地誌・紀行文における記録			7.7%	7.6%	13.4%	2.3%	1.7%	7.8%	

注1：表中の母数（N）は各類型の数を用了。

注2：「望見地の立地特性」には、新潟県八海山の「田かき馬」のように、南魚沼市六日町盆地方面の「盆地」地形と長岡市越後平野方面の「平野」地形に立地する両方の地域から見られるものがある。このような複数の立地地形から見られる場合は、それぞれの地形に「1」をつけることにした。また、新潟県妙高山「はね馬」のように、「中間地域」に分類された妙高市と「沿海地域」に分類された上越市の両方で望見される場合もあるので、同様に、それぞれの位置づけに「1」をつけることにした。

2. 雪形に関する産業文化と景観特性の関係

2.1. 農業

農業には、田仕事の目安と畑仕事の目安となった雪形が確認された。

「田仕事」

田仕事の目安となった雪形(N=260)は全ての立地地形に伝承が多く残されており、普遍性が見られる。その中の約半数(48%)は沿海地域から見られることが明らかになった。また、(42%)は「500~1500m」の平均標高以下の山に出現しており、低山の特性が明らかである。そのため、標高の比較的に低い山に出現し、沿海地域の平野地形などで望み見られることから、タイプEには田仕事に関する雪形が最多であることが明らかになった。

「畑仕事」

畑仕事の目安となった雪形(N=125)の大部分(72%)は平均標高(1500m)以上の山に出現し、特に(30%)は2000m以上の高山に出現している。田仕事より高山の特性が顕著であることが明らかになった。また、畑作物の育成の目安になった雪形には、望見地の立地条件や山岳の地理条件によって作物の種類が異なることが明らかになった。特に内陸地域では顕著な特徴が見られる。内陸地域の特性が顕著なタイプB、タイプC、タイプFでは、豆や粟の種まきをはじめ、10種以上の作物の育成の目安が確認された。それらの雪形が出現する山岳の標高が高く、融雪時間が比較的に長いことから、多種の農事の目安として使用されてきたのではないかと考えられる。また、盆地や高原・高地、谷間などの地形は高山に囲まれ気温が低いことから、稗、そば、ジャガイモなど寒冷地に生育できる作物の育成の目安になった雪形も確認された。特に稗まきに関する雪形(N=11)の殆ど(82%)は2000m以上の高山に出現していることも明確になった。

2.2. 漁業

漁業には、海水漁業の目安と淡水漁業の目安となる雪形が確認された。

「海水漁業」

海水漁業に関する雪形(N=21)は、タイプ A、タイプ D、タイプ E で確認され、以下の特徴が見られる。望見地の位置づけは全て沿海地域であり、平野地形(71%)で多く見られることが明らかになった。また海水漁業に関する雪形は海上でも見られることが特徴的な景観特性である。さらに、「500m 以下」の平地の山から「1500~2000m」までの平均標高の山に見られる。その中で、約半数(48%)は平均標高(1500m)以下の山に出現し、低山の特性が明らかである。特に「500m 以下」の山に出現する雪形(N=4)は、形象のみ言及したもの 1 本を除き、海水漁業のみに使用されていたことが明らかになった。海水漁業に関する雪形は、江戸時代にすでに記録が残されていることが確認された。北海道写万部山(499m)に出現する「鱒雪」は、『菅江真澄遊覧記 2』で、「七日、たいそうよい風だとアキノがつるでとじあわせた舟をさしよせてくれたのでそれに乗り、すぐ前の小川から漕ぎだして、磯の方に見える山を眺めながら遠ざかった。この山の残雪の形は鱒に似ている。アイヌ語で鱒のことをシャメンベというが……云々」と記述された^{2), 3)}。

「淡水漁業」

淡水漁業に関する雪形(N=2)はタイプ A とタイプ D で確認され、全ては独立峰に出現していることが明らかになった。また、連峰に出現する雪形の数(482 体)は独立峰に出現する雪形の数(149 体)の約 3 倍はあることから、割合としてやや小さいものの、海水漁業を含め漁業に関する雪形(N=23)は独立峰での出現率(35%)が比較的に高いと言える。独立峰は他の山から離れて単独に聳えるため、海上のみならず、川付近からでも識別しやすく、漁業の時期の目安として多く使われていたのではないかと思われる。淡水漁業に関する古文献の記述はないが、鳥海山の雪形「御神酒スズ」は、庄内町では「首が切れたら最上川の漁を始める。」などの口伝承が残されていることが確認された²⁾。

2.3. 養蚕業

養蚕業に関する雪形(N=9)はタイプ C、タイプ E、タイプ F で確認され、以下の特徴が見られる。

養蚕業に関する雪形の半数以上は(56%)「500~1500m」の平均標高以下の山に出現し、低山の特性が明らかである。また、全ては盆地や丘陵、谷間など山に囲まれる地形から見られることが明らかになった。平野などの低地の湿地では桑の栽培には適しておらず、養蚕業に関する雪形は桑の栽培に向いている水はけのよい且つ基盤が安定した丘陵や谷間地形、或いは盆地の扇状地から多く見られるのではないかとされる⁴⁾。養蚕業に関する雪形について、江戸時代にはすでに吾妻小富士の「雪うさぎ」が養蚕の目安として記録されていた。『藤屋佐藤興惣左衛門家蚕養之事』『養蚕日記』(文化9年、1812)では、「壬申 養蚕之事 三月十四日 北風少シ雨 吾妻嶽兎形現れ」などの記述があることが確認された^{5)、6)}。

2.4. 山仕事

山仕事に関する雪形(N=26)は谷間地形(50%)から多く見られることが明らかになった。また、半数以上(58%)は「500~1500m」の平均標高以下の山に出現し、低山の特性が明らかである。

低山の方は山菜採りなどの山仕事に対して登りやすいことと、山に囲まれる谷間地形からは山への意識が高いことから、山仕事に関する雪形は多く見られるのではないかとと思われる。そのため、低山の特性が顕著なタイプ E では、山仕事に関する雪形が多く見られることが明らかになった。

2.5. 産業占い

産業占いに関する雪形(N=45)は沿海地域(51%)、平野地形(53%)から多く見られることが明らかになった。また、大部分(71%)は平均標高(1500m)以上の山、(51%)は独立峰、(56%)は火山に多く出現している。独立峰と火山の特性が極めて顕著であることが明らかになった。

そのため、独立峰の特性が顕著なタイプ A とタイプ C、また沿海地域の特性が顕著なタイプ D から多く見られることが明らかになった。望見地は火山からもたらした良質な土及

び稲作に必要な水源を有する地域であり、また、独立峰と火山には信仰の山が多く、それらの山に出現する雪形は、神聖視とされ、産物の豊凶や用水などの占いとして多く使用されてきたのではないかとと思われる。タイプ D の沿海地域では、豊漁占いに関する雪形も確認された。

3. 雪形に関する地域文化と景観特性の関係

山名の由来となった雪形、伝説の対象となった雪形、地誌・紀行文に記述されている雪形は全ての立地地形に見られるが、総合的に見ると、特徴が最も明らかなのはタイプ B とタイプ C である。

3.1. 山名の由来

山名の由来となった雪形、伝説の対象となった雪形、地誌・紀行文に記録されている雪形は全ての立地地形に見られるが、総合的に見ると、特徴が最も明らかなのはタイプ B とタイプ C である。

山名の由来となった雪形(N=77)は内陸地域(51%)、盆地地形(51%)から多く見られることが明らかになった。また、殆ど(84%)は連峰に出現している。さらに、平均標高(1500m)以上の山(77%)、特に 2000m 以上の高山(40%)に多く出現しており、高山の特性が明らかである。

また、山名の由来となった雪形には、現在まで山名として使われているもの(45 体)と山の俗名になったもの(32 体)が確認された。表-6 に示す通り、タイプ B とタイプ C では、雪形が山名の由来となったものの殆どは現在でも山名として使われていることが明らかになった。タイプ B の長野県白馬岳の「代馬」、蝶ヶ岳の「蝶」、五竜岳の「御菱」などが有名である²⁾。

3.2. 伝説の対象

伝説の対象となった雪形(N=25)は内陸地域(52%)、盆地地形(60%)から多く見られることが明らかになった。また、(80%)は連峰に出現している。さらに、大部分(80%)は平均標高(1500m)以上の山に出現しており、高山の特性が明らかである。特に 2000m 以上の高山(32%)での出現率も高いと言える。

3.3. 地誌・紀行文における記録

地誌・紀行文に記録されている雪形(N=39)は内陸地域(56%)、盆地地形(62%)から多く見られることが明らかになった。また、雪形出現の山岳は独立峰(36%)、連峰(64%)であり、火山(41%)である。独立峰及び火山での出現率も高いと言える。さらに、平均標高(1500m)以上の山(79%)、特に 2000m 以上の高山(38%)に多く出現しており、高山の特性が明らかである。

4. 雪形の基本特徴と景観特性の関係

4.1. 雪形の色と景観特性の関係

雪形の色について、「ポジ型」341体、「ネガ型」147体が調査より明らかになった。文献より雪形の色が記載されていないものはあるものの、色による特性が窺える。

「ポジ型」

「ポジ型」の雪形(N=341)の約半数(42%)は沿海地域から見られることが明らかになった。また、平均標高(1500m)以下の山(38%)と平均標高の「1500~2000m」の山(40%)に多く出現している。特に「500以下~1000m」など比較的到低い山に出現する雪形(N=67)の大部分(73%)は「ポジ型」であり、低山の特性が顕著である。

雪形に関する産業文化の中で、漁業と養蚕業は、「ポジ型」の雪形と明らかな相関性が見られる。漁業に関する雪形(N=23)の(86%)は「ポジ型」であることが明らかになった。特に、今確認された「500m以下」の平地の山に出現する雪形(N=3)は全て漁業に関わっているものであり、「ポジ型」であることが明らかになった。漁業に関する雪形には「ポジ型」が多く伝承されている原因について、海で作業する漁民たちが山を遠望する際、白い形のほうが識別しやすく、漁業開始と完了の信号として使われてきたのではないかと考えられる。

養蚕業に関する雪形(N=9)も全て「ポジ型」であり、白い形のほうが蚕や繭に連想しやすいため、繭づくりなどの養蚕の作業時期の目安として使われてきたのではないかと考えられる。

「ネガ型」

一方、「ネガ型」の雪形(N=147)は内陸地域(48%)から多く見られることが明らかになった。また、殆ど(82%)は連峰に出現している。宮腰¹²⁾は、新潟県の雪形についての調査において、「ネガ型」の雪形は殆ど標高1000m以上の山に出現すると指摘しているが、本研究では、全国における「ネガ型」の雪形は、特に2000m以上の高山と関係していることを補足したい。具体的には、「ネガ型」の雪形の大部分(77%)は平均標高(1500m)以上の山に出現しており、高山の特性が明らかである。特に約半数(46%)は2000m以上の高山に出現し、また「2500~3000m」の山(33%)に多く出現していることが明らかになった。その

ため、殆どのタイプは「ポジ型」の方が多いが、内陸地域の高山型の連峰の特性が最も顕著なタイプBでは、「ネガ型」の方が多く見られることが明らかになった。

また、山名の由来となった雪形(N=77)には、「ネガ型」が(35%)であり、伝説の対象となった雪形(N=25)と地誌・紀行文に記録されている雪形(N=39)には、「ネガ型」が(44%)ずつである。「ポジ型」の総数(341 体)は「ネガ型」の総数(147 体)の約 2 倍はあるが、総じて「ネガ型」の雪形は「ポジ型」より地域文化として多く認識されてきたことが明らかになった。「ネガ型」の雪形が出現する山岳は標高が高いため、融雪期間が長いことから雪形の持続時間も長い。また、望見範囲が広い盆地地形などから見られることを加えて、地元の人々に信仰の対象とされたり、或いは昔の文人墨客に奇観として親しまれていたと考えられる。

4.2. 雪形の形と景観特性の関係

雪形の形について、人物、動物（馬・駒）、魚類、道具、植物の 5 種類が景観特性と顕著な関係性が見られることが明らかになった。

「人物の形」

人物の形 (N=149) の大部分(79%)は平均標高(1500m)以上の山に出現している。特に 2000m 以上の高山(37%)から多く見られ、高山の特性が明らかである。また、約半数(43%)は火山に出現しており、火山での出現率も高いと言える。さらに、「2500～3000m」の高山(22%)での出現率が比較的に高いことと「ネガ型」と類似していることが明らかになった。そのため、殆どの形は「ネガ型」より「ポジ型」の方がはるかに多いが、人物の形は「ポジ型」(32%)より「ネガ型」(41%)の方が多く見られることが明らかになった。

また、人物の形の (70%) は農業の信号として使用されていることが明らかになった。

さらに、富山県僧ヶ岳の「虚無僧」や長野県常念岳の「常念坊」をはじめ、山名の由来などの地域文化や産業占いに関する雪形には、入道や小僧など信仰に関する人物の形が多く見られることが明らかになった。これは、占いが宗教に関連付けられやすく、またこれら人物が神聖視とされていることが、産物の豊凶や用水などの占いとして多く使用されており、また奇勝として認識されてきた理由ではないかと思われる。

「動物の形」

動物の形 (N=194) の中で、馬・駒の形は約半数(49%)を占めている。馬・駒の形 (N=95) の大部分(77%)は平均標高(1500m)以上の山に出現しており、特に 2000m 以上の高山(34%)から多く見られ、高山の特性が明らかである。また、馬・駒の形は、「ポジ型」(47%)、「ネガ型」(35%)であり、「ネガ型」も比較的に多いと言える。さらに、(21%)は山名の由来となっている。日本全国の駒ヶ岳の名称の殆どは雪形の「馬・駒」からの由来であったと言われている³³⁾。馬はかつて代掻きなどの農事に多く使われていたことから、農耕の信号となる雪形には馬・駒の形が多く認識されていたのではないかと考えられる。

「魚類の形」

魚類の形 (N=28) は、漁業に関する雪形と同様に、海水魚と淡水魚の形が見られる。また、

沿海地域(64%)、平野地形(46%)から多く見られることが明らかになった。さらに、平均標高(1500m)以下の山(39%)と平均標高の「1500～2000m」の山(54%)に多く出現しており、平均標高(1500m)以下の低山での出現率も高いと言える。また、魚類の形の(64%)はタイプA、タイプD、タイプEなど沿海地域の特性が顕著な類型で多く見られることが明らかになった。一方、タイプCとタイプFの内陸地域及び中間地域では魚類の形も見られるが、鯉や鮒などの淡水魚の形が主であることが明確になった。また、宮城県栗駒山の鮪形は、方言のシビガタと呼ばれ、干物の形として認識されているものもあることが確認された²⁾。

「道具の形」

道具の形について、タイプA、タイプD、タイプEの沿海地域では、農耕用の道具の他、「船」、「錨」、「魚釣針」など漁業に関わる道具の形が見られることが明らかになった。また、養蚕業に関する雪形(N=9)の約半数(44%)は、道具「ワラダ」の形がであることが明らかになった。「ワラダ」とは、藁で編んだ蚕を飼う円形の道具である⁷⁾。

「植物の形」

植物の形の中で、粟穂、苗、大根等の農作物の形をしている雪形は各立地と地形に分布しているが、杉や松、桑など樹木の形やクルミ雪、松茸雪などの山作物の形をしている雪形は、丘陵、谷間、高原・高地など山への意識の高い地形で見られることが明らかになった。

5. 十二支の形の雪形から見る産業・文化特徴

動物の形の雪形は種類が多いことから、多様な産業・地域文化に関連している。その中で特徴的なものの一つとしては、全国の雪形を集大成した田淵²⁾によると、雪形には十二支の形が見られることを指摘している。具体的には、「鼠」、「牛」、「虎」、「兎」、「竜（龍）」、「蛇」、「馬」、「羊」、「猿」、「鶏」、「犬」、「猪」の形である。本節では動物の雪形と十二支文化の関係について考察し、雪形の文化的価値をより深く掘り下げることを目指している。

干支文化は中国から日本に伝わってきたが、日本では独自の定義を継承・発展させ、人々に広く知られた文化になった。インドやタイランドにも干支文化はあるが、動物の数や順番、あるいは種類が中国の十二支と異なる場合が多い。日本は中国から伝わってきた十二支の順番や動物の種類、或いは持つ意味を殆ど保留し、その上で本国の文化を基に新たな意味を付け加えた⁸⁾。

ここではまず、十二支文化と暦法の関係について説明する必要がある。十二支文化は生まれてから中国の陰陽五行思想や風水に密接に関係している。八卦の干支は十二支を代表する動物を用いて命名され、さらに五行の意味が与えられた。具体的には、「亥（猪）」と「子（鼠）」は水を司る干支で、「寅（虎）」と「卯（兎）」は木を司る干支、「巳（蛇）」と「午（馬）」は火を司る干支、「申（猿）」、「酉（鶏）」は金を司る干支、「辰（龍）」、「戌（犬）」、「丑（牛）」、「未（羊）」は土を司る干支としている。中国古来の暦法（太陰暦、太陰太陽暦）では、年月日にも相応な十二支の名称と意味を持っている。日本では、明治時代以前には、『耕作晰』や『会津農書』などの農事暦は旧暦、つまり中国から伝わった太陰太陽暦を基に制定されたとされている。このことから、かつて農事暦として使用されていた雪形には十二支の形が見られるのは、十二支文化が暦法と密接な関係があることを示唆している。

十二支文化は中国では、祭りや飲食、文学、地名などの多方面に浸透しており、人々の衣食住行の文化に密接に関わる。また、古くから景観にも十二支文化の姿が見られる。中国浙江省杭州市に位置する呉山には「呉山十二峰」と呼ばれる十二の奇石があり、十二支の形に似ているため、地元の人に奇観として親しまれている。また、「兔儿蹦跳在前头、金鸡高唱羊低头。龙回头来马吃草、老虎上山猴紧跟。蛇缠猴儿回头看、水牛眠在黄泥坡。狗嘴骨头鼠乱钻、懒猪至露寿字头。」などの歌謡も伝承されている⁸⁾。このような口承文化は、景観と文化の結びつきに積極的な役割を果たしたことが明らかになった。

雪形もまた、「呉山十二峰」と同様に、自然風景でありながら、十二支の形が見られることから、かなり珍しいものであり、価値があると考えられる。

そこで、本節では、鳥類に分類された「鶏」の形を加えて十二支の形を持つ雪形の産業・文化特性について重点を置いて考察を行った。具体的には、十二支の形をしている雪形の形態特徴や、雪形に関連する産業・地域文化を把握し、十二支文化との関係性を明らかにした。

以下は、十二支の形をしている雪形の形態特徴や、雪形に関連する産業・地域文化と十二支文化の関係について考察した結果である（表 5-5-1）。

「鼠の形」

「鼠」の雪形は 4 本が確認され、その中で、形象のみが記述されている 2 本を除き、種蒔きや田植えなど農業の目安として利用されると同時に、全てが用水占いとして使われていることが明確になった。新潟県鋸山にする出現的「鼠雪」は、「頭のほうから消える一用水不足、尾から消える一用水が不十分。」のような伝承が残されており、同県白山の「鼠雪」でも、「頭から消えると水不足、尾から消えると水十分。」という類似な伝承が残されている⁹⁾。また、それらの雪形は、全てが「ポジ型」であることも明らかになった。

十二支文化の中で、「子（鼠）」は水を司る干支であり、また中国では、道教において白い鼠は災害を予知する能力があるとされ、未来を知る神獣であるともいわれている。さらに、水害や干ばつの前に、鼠は異常な動きをするため、洪水や飢饉の兆候として認識されていることが多い⁸⁾。これらのことから、「鼠」の雪形は、用水占い多くに使用されていることが、十二支の「子（鼠）」の持つ意義と密接に関わっていると考えられる。

「牛の形」

「牛」の雪形は 46 本が確認された。牛の形象には、「牛」、「牛首」など牛の形象のみとして認識されているものや、耕作の様子を表す「田搔き牛」などの形や、「寝牛」や「牛天神」など特殊な形も見られる²⁾。かつて農耕社会が主流であった日本では、牛は農耕や生活上などでは重要な役割を果たした。そのため、「牛」に関する雪形には、耕作の様子を表す「田搔き牛」などの形が殆どである。次いで、「寝牛」の形象も多く見られることが調査より明らかになった。また、日本における牛にまつわる伝説などの文化など

において、牛は天満天神様のお使いと言われている。太宰府天満宮をはじめ、多くの天満宮の境内には牛の像が祭られており、全国的に信仰されてきた。それらの牛の像は、伏せているような形が殆どである。天満天神と牛との関係について、様々な説がある。その中の一つとして、天満天神様の御祭神である菅原道真公は丑の年で生まれ、薨去されたのも丑の日と言われている。また、菅原道真公の墓所は、その御遺骸を載せた車を引く牛が動かなくなって倒れ込んだ場所であったと言われている。そのため、この説から「お使いである牛」は殆ど伏せている姿勢であり、「臥牛」と呼ばれる¹⁰⁾。また、天満天神は、農耕の神でもあると言われている¹¹⁾。以上のことから、「牛」の形の雪形は、農耕に関する形象だけでなく、伝説や信仰に関係のある形象も見られることが明らかになった。

「虎の形」

「寅（虎）」は干支の一つとして日本に伝来したが、虎は日本には生息していない生き物であるため、「虎」の雪形の数が少なく、2体のみであり、産業の目安としても使用されていないことが確認された。

「兎の形」

「兎」の雪形は13体であり、全てが白い形である。白兎は中国では古来より「月兎」として広く知られており、「嫦娥が月に飛ぶ」や「玉兎打薬」などの伝説が代表的なものである⁸⁾。日本でも「月兎」という表現があり、中国から伝わって来た伝説の上で、地元の文化を融合して独自の伝説などを創出した。

新潟県「光兔山」の山頂に鎮座する「光兔神社」の御祭神は日本神話に登場する月を司る神「月読尊」とそのお使いの兎から由来した「光兔大神」である¹²⁾¹³⁾。毎年春になると、新潟県「光兔山」には雪形「兎形」が出現し、神のお使いとして地元の人に親しまれてきた⁹⁾。

「竜／龍の形」

「竜／龍」の雪形は12体が確認された。龍は干支の中では唯一の仮想存在であり、中

国は古くから力や権利の象徴として龍を崇拝してきた。また、龍を代表する特性として、空に飛ぶ、降雨などがある。さらに、水の神として、龍が表す月と時間は暦の上でも降水量と密接な関係がある⁸⁾。

以上の龍に関する文化は、雪形にも反映された。まず、表 5-5-1 に示した「龍」の形をしている雪形には、空を飛ぶ「飛龍」の形が多く、また「水龍」や「火龍」も見られることが明らかになった。また、水を司る神として、「用水占い」として使われてきたものがあることも明らかになった⁹⁾。

「蛇の形」

「蛇」の雪形は 2 体であり、かなり少ない。へビは、小さな体にもかかわらず猛毒を持つなどの特性があるため、人々に恐れられてきた。また、その非常に細長い形状から、雪形としての識別が困難であることも原因として挙げられる。そのため、へビに関する雪形は非常に少ないと考えられる。

「馬の形」

「馬」の雪形は全ての産業に多用されていることが明らかになった。農業には、特に代掻きなどの田仕事に多く使用されていることが明らかになった。

馬は古くから農耕から軍事まで様々な民族に利用されてきた⁸⁾。日本各地にも馬にまつわる伝説や風習が多数に存在している。馬や牛は、かつて耕馬や耕牛として使用されていたため、広く認識されている。そのため、馬・駒は、かつて代掻きなどの農作業に多く使われていたため、農耕の信号として使用されてきた雪形には、馬・駒の形が多く認識されていたのではないかと考えられる。

また、馬は自由奔放なイメージを持つことから、古来より逞しさと幸運の象徴として親しまれてきた⁸⁾。このことから、馬形の雪形の中では、「代掻き馬」など耕作に関する形象の他、「はね馬」や「早馬」など躍動する形象が多く見られることが明らかになった。また、山名の由来となっているものが多いことも明確になった。

「羊の形」

「未（羊）」の雪形は3体であり、かなり少ない。干支の一つとしての羊は、中国と日本では発音が「祥」に似ていることから「縁起の良い」という意味があり、古くから人々に親しまれている⁸⁾。

中国では、羊は牛や馬と同様に家畜としての歴史が長いが、日本では、羊の在来種は存在しないことと、日本の気候風土が羊の飼育に適しいことから、日本人にとって羊は十二支の中最も馴染みの薄いものとなった¹⁶⁾。そのため、羊に関する雪形も非常に少なく、産業の目安としても使われてないことが明らかになった。

「猿の形」

「申（猿）」の雪形は10体である。猿の雪形は農業の目安のみに使われており、その中の殆どは種蒔きや田植えなどである。猿は人間に最も似た動物として、古くから人間の祖先として崇められてた。

雪形の中でも猿の形のみが「種をまく」、「拝み」、「猿たばこ」など、人間の行為をしている様子が見られる。

「鶏の形」

「酉（鶏）」の雪形は7体である。鶏の雪形には顕著な特徴がなく、農業の目安として使われていたことが明らかになった。

「犬の形」

「戌（犬）」の雪形は14体であり、全てが白い形である。犬の雪形は、農業、山仕事に使われていたことが明らかになった。犬は人間の最も忠実な伴侶として、古くから崇拝されてた。中国では、犬は十二干支の一つとして、悪霊を払い、富を引き寄せる意味を持っている。また、白い犬は生け贄として神に捧げたという記録も残されている⁸⁾。さらに、いずれ中国や日本では、白い犬は縁起の良い象徴である。そのため、犬に関する雪形は全て白であることが明らかになった。

日本にも様々な犬に関する神話や物語があり、その中で最も有名なのは「桃太郎」の

伝説である。また、日本では犬と猿は相性が悪いとされていることから、「犬猿の仲」という言葉があり、雪形の中でも、宮城県蔵王山では、「犬と猿」の雪形が共に出現する例も見られる²⁾。

さらに、犬の形をした雪形には、「狛犬 (アマイン・コマイン)」も見られる⁹⁾。狛犬は、神社やお寺の入り口の両側に置かれた、ライオンと犬に似た日本の幻想的な生き物である。古代インドでは、釈迦の両脇に獅子像が置かれ、守護獣として崇拝されていた。唐代に中国の獅子像と仏教が伝来したことから、これが狛犬の起源とされている。

「猪の形」

「猪」の雪形は1体のみである。中国では、干支の猪は飼い豚を示しているが、日本では、干支の猪はイノシシを指す。中国では、豚は頭や耳が大きいので、富など縁起のいい象徴とされている⁸⁾。日本では猪の意味は中国とは異なり、イノシシを形容する「猪突猛進」という言葉がある。干支の亥は日本でも中国でも豊作の意味を持っているが、実は日本ではかつての農耕社会から、イノシシの侵入による田畑や家屋などの深刻な被害を受けた。農民にとってイノシシは干支文化の亥の持つ意味のほど素晴らしいものではない。また、大島によると、「この猪という獣は、人の暮らしと関わり合いながら、一体どういうわけか、そのまま神として祀られることは少なく、また昔話などに語られることも少なかったのです。」という記述もある¹⁶⁾。以上のことから、猪の形をしている雪形の数は少なく、また農事暦として使用されない原因であると考えられる。

表 5-5-1 十二支の形の雪形に関する産業・文化の特徴

十二支	形象に関する描写	産業としての使用			
鼠(4)	鼠雪 上り鼠 下り鼠	用水占い	馬(95)	馬・駒 競馬 早馬 駆け登る馬 跳ね馬 上り馬,下り馬 田搔き馬	田搔き 稲の種蒔き 苗代つくり 田植え 豆蒔き 粟蒔き 作物の豊凶 占い
牛(46)	牛 牛首 牛の目 寝牛 田搔き牛	田植え 種蒔き 田搔き	羊(3)	山羊 羚羊	
虎(2)	虎 下り虎		猿(10)	猿 拝み猿 種蒔き猿	田搔き 田植え 田植え前の 畦塗り
兔(13)	兔雪 兔形 種蒔き兔	種蒔き	鶏(7)	鶏	豆蒔き スイカに二 番肥を施す
竜(11)	竜 飛龍 竜の子 上り竜 下り竜 水竜 火竜	用水占い 苗つくりか ら田植えの 準備 麦刈り	犬(14)	犬 斑犬 狒犬	稲の種蒔き 田植え 豆蒔き 麦刈り
蛇(2)	蛇雪	田おこし	猪(1)	猪	

6. まとめ

本章では、全国における雪形（631体）の産業文化・地域文化特性を明らかにした。

具体的には、①農業、漁業、山仕事、養蚕業、産業占いなどの産業文化、②山名の由来となった雪形、伝説の対象となった雪形、地誌・紀行文などの古文献に記述されている雪形などの地域文化、③雪形の色や形などの基本特徴と景観特性(山岳の地理的特性、望見地の立地特性)の関係について考察した。また、④雪形の形と十二支文化の関係について考察した。

その結果、雪形に関する産業文化・地域文化や形に対する認識などは、山岳の地理的特性、望見地の立地特性などに強く影響されると考えられる。

以上のことから、雪形には単に農事暦としての価値のみならず、漁業や養蚕業など古来伝承されてきた営みや、山名の由来や伝説、十二支文化など古くからの地域文化と密接に関わることから価値が見られる。また、それらの産業・地域文化は、雪形が出現する山岳の地理的特性及び望見地の立地特性などの環境に強く影響されることから、雪形は地域の暮らしに深く根付いた景観として価値も大きいと思われる。

参考文献

- 1) 岩科小一郎：山の民俗, pp. 200-240, 岩崎美術社, 1968.
- 2) 田淵行男：山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 3) 更科源蔵：北海道伝説集, pp. 10-11, 楡書房, 1955.
- 4) NHK for School ホームページ：群馬県の産業 養蚕。
(https://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005402167_00000)
- 5) 伊達町史編纂委員会編：伊達町史 第4巻(別巻1)(奥州蚕種本場養蚕日誌修正), pp. 311, 伊達町史編纂委員会, 1985.
- 6) 作田哲啓, 赤坂信：吾妻小富士の雪形一地域限定・期間限定の自然風景一に関する一考察, ランドスケープ研究 Vol. 70, No. 4, pp. 312-319, 2007.
- 7) 伊達市公式サイト：伊達地方の養蚕業。
(<https://www.city.fukushima-date.lg.jp/soshiki/87/144.html>)
- 8) 李世化：中华文化公开课：生肖文化十六讲, 当代世界出版社, 2019.
- 9) 斎藤義信：図説雪形, 高志書院, 1997.
- 10) 北野天満宮 HP：北野天満宮と牛。
(<https://kitanotenmangu.or.jp/story/%E5%8C%97%E9%87%8E%E5%A4%A9%E6%BA%80%E5%AE%AE%E3%81%A8%E7%89%9B/>)
- 11) 錦天満宮 HP：天満宮と牛。
(<https://nishikitenmangu.or.jp/grounds/>)
- 12) 新潟観光ナビ HP：来年の初詣はうさぎだらけの「光兔神社」がおすすめ！／関川村。
(<https://niigata-kankou.or.jp/blog/862>)
- 13) THINGS - NIIGATA LOCAL WEB MAGAZINE HP：うさぎ好きは要チェック！うさぎだらけの「光兔神社」が熱い。
(<https://things-niigata.jp/other/kosagijinja/>)
- 14) 中西僚太郎：明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について, 歴史地理学, Vol. 169, pp. 2-22, 1994.
- 15) 小佐々学：日本在来馬と西洋馬-獣医療の進展と日欧獣医学交流史-, 日獣会誌, Vol. 64, pp. 419-426, 2011.
- 16) 大島建彦：講演会「十二支と日本人」, pp. 1-19, 国立国会図書館国際子ども図書館, 2005.

【表 3-2-1 データベース A に用いた文献】

- ・表 2-2-1 (第 2 章を参照) .
- ・国土地理院編：国土地理院地図。
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- ・徳久球雄, 石井光造, 武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- ・山と溪谷社編：日本の独立峰 45 選, 山と溪谷, Vol. 4, pp. 24-25, 2021.
- ・気象庁編：日本活火山総覧(第 4 版), 2015。
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/menu_jma_hp.html)
- ・国土地理院編：国土地理院電子地形図 20 万。
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)
- ・国土地理院編：1. 地形分類, 2. 自然地域の名称。
(https://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atlas-d_j_02.pdf)

・各市町村史参照（表 2-2-4）.

第六章 「文化的価値を有する雪形」(150 体) の特
性に関する考察

1. 研究の枠組み

1.1. 研究の背景と目的

雪形は、現代では、農耕の進歩による農事開始時期と雪形の出現時期が一致しなくなったことにより、農事暦としての意味は失われつつある。今や雪形の伝承は非常に困難な状況となっている。

雪形に関する最近の動向については、文化庁による『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書』（2005）¹⁾で、福島県飯豊連峰、新潟県守門岳、富山県僧ヶ岳、岐阜県笠ヶ岳と乗鞍岳、岩手県岩手山の雪形が文化的景観候補として選定されているが、それらの雪形は既に農事暦として使用されていない為、文化的景観の条件としての「生業として営まれているもの」には適合しない等の条件から、認定するまでには至っていない。

一方、秋田谷²⁾は、『豪雪地帯対策特別措置法』の1991年改訂で「利雪」という言葉が法律用語として用いられたことから、雪形も「利雪」の一つの形態と考えられるとしている。同氏は農水省の『景観づくり、むらづくりー農村景観づくりの手引きー』（1994）の中で、「農村固有の景観を活用し、ふるさと体験や生涯学習に活用し、更に都市との交流を図る目的をしている」の項目に雪景色を意識したものが見られてないことを指摘し、雪に関する自然景観をこの中に含め、遠景に位置する雪形を多くの里の住民、特に子供に認識させることを提案した。

第2章～第5章の考察により、全国の雪形における691体の雪形を収集したが、その中に望見地が記載されていないものや形象のみ記述されているものが多く、実際に雪形として認識されにくい場合が多いことが明らかになった。また、雪形に関する呼称や形としての認識などは同じ村落でも統一できないことや、時代の変遷によって地域で注目されるものが異なることなどによって、すべての雪形を対象とした保存・継承することは極めて困難であることが明らかになった。今後雪形の保全・継承するには、どのような雪形は残す価値や可能性が見られることについて検討することが必要とされている。

一方、現在において、長野県安曇野市のホームページにて東天井岳の「白い仔犬」、蝶ヶ岳の「蝶」、常念岳の「常念坊」など日本アルプスに出現する一連の雪形が地域の景観として紹介されている³⁾。その他にも、雪形を地域の景観・観光資源として活用している市町村が出現している^{4),5)}。近年では、妙高高原等をはじめ、一部の自治体において、観光資源として活用されるべく、雪形に関する情報が発信されている事例が見られる。こ

ここで挙げたものの多くは山名の由来や伝説の対象、または地誌・紀行文等古くから記載があるものなど地域文化と深く結びついているものである。

本研究では、農事曆に使われるだけでなく、白馬岳の「代馬」や蝶ヶ岳の「蝶」等有名な雪形のように、山名になったり、地域の伝説や信仰に繋がったり、地誌・紀行文等の古文書に描かれたりして地域文化と深く結びついている雪形を特に「文化的価値を有する雪形」として抽出した結果、77 座の山で 105 体が抽出され、68 自治体が望見地であることが分かった。また、それらの縣市町村史に記載されているものと、第七章のアンケート・ヒアリング調査によって得られた情報により、現在まで伝承されてきたものも価値を有すると判断し、107 座の山で 150 体の雪形を補足した。最北端の北海道と最南端の愛媛県で見られる雪形も、この研究においても文化的価値のある対象としている。文化庁の報告書¹⁾で文化的景観候補として選定された雪形がすべてこの中に含まれる。

以上のことから、本章では、保全すべき「文化的価値」を有する雪形が古くからの古文書や縣市町村史などに多く記録が残されている理由や、また現在まで伝承されてきた理由について、それらの山岳特性、眺望特性からそれらの雪形の特性を明らかにし、今後、雪形を眺望景観として保護・継承するための取り組みに貢献することを目的としている。

1.2. 研究の方法

「文化的価値を有する雪形」の特性は、雪形の山岳特性、眺望特性を Bell Curve 社のエクセル統計^{註 1)}の多変量解析により数量化Ⅲ類で特徴を分析し、更にはユークリッド平方距離・ワード法で類型化を行う。

1.2.1. 「文化的価値を有する雪形」が出現する山の山岳特性

データベース B: 「文化的価値」を有する雪形 (150 体) の特性分析に関するデータベースから「山岳の地理的特性」の「種類」と「山岳の知名度」の全カテゴリーにより、山岳の特性に関連する項目を抽出し、2 項目・5 カテゴリー・7 つの詳細データとなった (表 6-1-1)。

また、各カテゴリーの詳細に 1、0 データで表した。

表 6-1-1 「文化的価値を有する雪形」(150 体) が出現する山の山岳特性に関する評価項目

項目	カテゴリー	詳細	調査手法
山岳の地理的特性	類型	独立峰、連峰・山地火山	日本山名事典 山と溪谷「日本の独立峰 45 選」 日本活火山総覧(第 4 版)
山岳の知名度	地域資源のランク	観光資源台帳ランク C 以上	「観光資源台帳」日本交通公社
	百名山	百名山である	日本百名山
	百霊山	百霊山である	日本百霊山伝承と神話でたどる日本人の心の山
	地方富士	地方富士である	おらが富士 340 座—全国富士行脚 18 年の記録

1.2.2. 「文化的価値を有する雪形」の眺望特性

次に、眺望特性と大きく関連がある「山岳の地理的特性」の「標高」、「望見地の立地特性」の「地形」、「眺望関係」の全カテゴリーを抽出し、3項目・4カテゴリー・11つの詳細データとなった（表6-1-2）。

表6-1-2 「文化的価値を有する雪形」（150体）の眺望特性に関する評価項目

項目	カテゴリー	詳細	調査手法
山岳の地理的特性	標高	平均標高以下, 平均標高以上	国土地理院地図 日本山名事典
望見地の立地特性	地形	平野,丘陵,盆地,谷間,高原・高地	国土地理院 20 万分 1 地形図 国土地理院編：地形分類と自然地域の名称 各市町村史
眺望関係	距離	平均距離以下	国土地理院 基準点成果等閲覧サービス
		平均距離以上	
	仰角	平均角度以下	算出
		平均角度以上	

2. 「文化的価値」を有する雪形(150 体)の特性分析

2.1. 山岳特性

「文化的価値を有する雪形」が出現する山岳の特性について、数量化Ⅲ類分析の結果、第1軸の相関係数は0.7736であり、I軸の正方向に大きいものは「地方富士」、負方向に大きいものは「百霊山」であり、山岳の知名度を示す軸であると考察できる。

第2軸の相関係数は0.5036であり、第Ⅱ軸の正方向に大きいものは「独立峰」、負方向に大きいものは「連峰・山地」であり、山岳の種類を示す軸であると考察される（図6-2-1）。

次に、107 サンプルの2軸までの固有値を用いてクラスター分析を行った。軸及びサンプルの特徴を読み取ると、「Ⅰ富士類似型」（31座）、「Ⅱ地方連峰型」（48座）、「Ⅲ盆地・高原高地主要型」（28座）の3つに分類された（図6-2-2）。

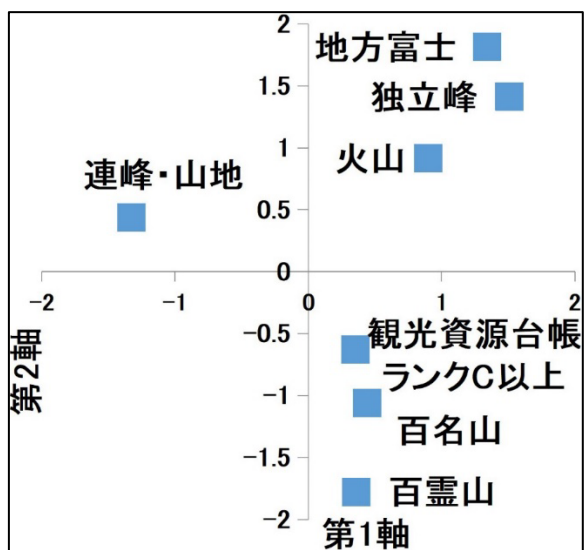


図 6-2-1 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) が出現する山岳の特性の特徴

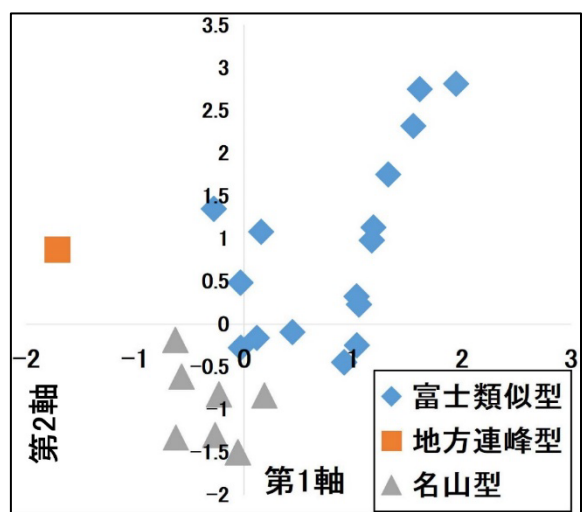


図 6-2-2 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) が出現する山岳特性の類型

2.2. 「文化的価値」を有する雪形が出現する山岳の各類型の特徴

以下は、「文化的価値を有する雪形」（150 体）が出現する山岳の特性の各類型の特徴に関する考察である（表 6-2-1）。

「Ⅰ 富士類似型」

「Ⅰ 富士類似型」には、独立峰・火山が多く含まれることが明らかになった。また、標高が高く、外観が富士と類似していることや、頂上が凸型で目立つものが多い。

「Ⅱ 地方連峰型」

「Ⅱ 地方連峰型」の山は、知名度が高くないものの、雪形が山名の由来や地元の伝説・信仰の対象となるものが見られる。

「Ⅲ 名山型」

「Ⅲ 名山型」は、知名度の高い連峰を示すタイプであり、「Ⅰ 富士類似型」と同様に名山や霊山が多く含まれ、雪形が山の奇勝として、古文献にも多く記録が残されていることが明確になった（表 6-2-1）。

表 6-2-1 「文化的価値を有する雪形」（150 体）が出現する山岳の各類型の特徴

項目	カテゴリ	詳細	I	II	III
③ 山岳の 地理的特性	種類	独立峰	65%	0%	0%
		連峰	35%	100%	100%
		火山	94%	0%	8%
④ 山岳の 知名度	観光資源	ランクC以上	77%	0%	85%
	百名山	百名山である	55%	0%	73%
	百霊山	百霊山である	32%	0%	50%
	地方富士	地方富士である	35%	0%	0%

2.3. 「文化的価値を有する雪形」の眺望特性

「文化的価値を有する雪形」の眺望特性について、数量化Ⅲ類分析の結果、第1軸の相関係数は0.5552であり、第2軸の相関係数は0.5049である。軸では特徴はそれ程明らかではないが、象限から見ると、第一象限は盆地、谷間、第二象限は丘陵、第三象限は平野、第四象限は高原・高地の場合の景観特性を示した（図6-2-3）。

次に、150サンプルの2軸までの固有値を用いてクラスター分析を行った。軸及びサンプルの特徴を読み取ると、「Ⅰ丘陵 主要型」（37体）、「Ⅱ平野主要型」（32体）、「Ⅲ盆地・高原高地主要型」（47体）、「Ⅳ盆地・谷間主要型」（34体）の4つに分類された（図6-2-4）。

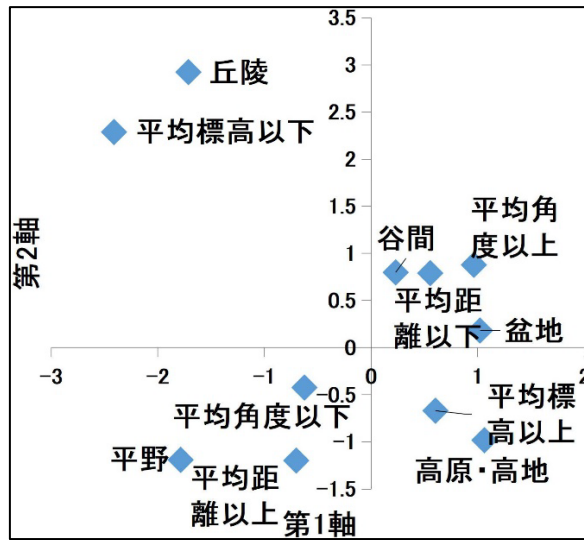


図 6-2-3 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) の眺望特性の特徴

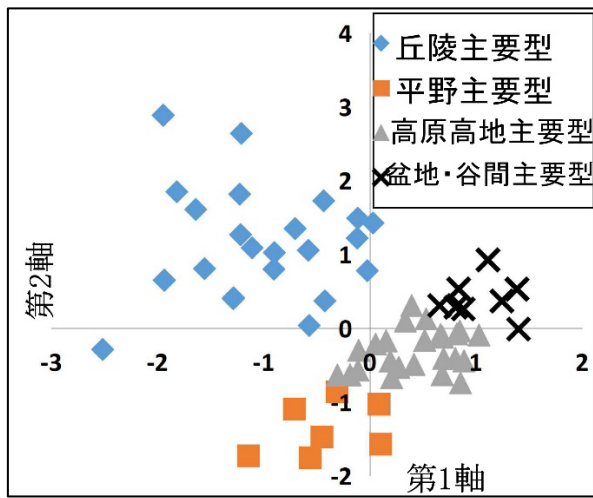


図 6-2-4 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) の眺望特性の類型

2.4. 「文化的価値を有する雪形」の眺望特性の各類型の特徴

以下は、「文化的価値を有する雪形」（150 体）の眺望特性の各類型の特徴に関する考察である（表 6-2-2）。仰角に関する分析は、樋口⁶⁾を参考にした。

「Ⅰ丘陵主要型」

「Ⅰ丘陵主要型」は、望見地が丘陵地帯の雪形のすべてがこのタイプとなり、平野と盆地も主要な望見地である。平均距離以下の近距離で見られるが、平均標高以下の低い山に出現するため、平均角度以下 7° ほどの適切な角度で見られることが明らかになった。また、「Ⅱ地方連峰型」の山に出現する雪形の殆どはこの類型に属することが明らかになった。

「Ⅱ平野主要型」

「Ⅱ平野主要型」に分類された雪形は、すべて高山に出現し、さらに遠距離から見られるため、その中の殆どは 5° 以下の仰角により容易に望見されることが明らかになった。広域で見られるため、古くから文人墨客に親しまれたものが多く、現代でもよく知られているものも含まれることが明確になった。

「Ⅲ盆地・高原高地主要型」

「Ⅲ盆地・高原高地主要型」には、盆地で眺望できる雪形その他、高原・高地地帯等の高所からのみ望める雪形が含まれることが明らかになった。それらの雪形はすべてが平均標高以上の高山に出現し、近距離から遠距離まで複数の村落に伝承されるものが見られることが特徴であることが明らかになった。

「Ⅳ盆地・谷間主要型」

「Ⅳ盆地・谷間主要型」には、望見地が山に囲まれている狭小地域が多く、「Ⅲ盆地・高原高地主要型」と同様に、かなり限定的な雪形が見られるタイプであると考察される。また、それらの雪形の殆どは平均距離以下の近距離から高山を眺望し、望見地が山に囲まれている狭小地域且つ 10° から 15° まで望みされ、作業行為から立位になり、視線が高くになる時に必ず見えるものであることが明らかになった。

表 6-2-2 「文化的価値を有する雪形」（150 体）の眺望特性の各類型の特徴

項目	カテゴリ	詳細	I	II	III	IV
③山岳の 地理的特性	標高	平均標高以下	84%	0%	0%	0%
		平均標高以上	16%	100%	100%	100%
⑤ 望見地の 立地特性	地形	平野	41%	68%	13%	0%
		丘陵	38%	0%	0%	0%
		盆地	32%	23%	72%	79%
		谷間	22%	0%	20%	33%
		高原・高地	5%	13%	28%	9%
⑥ 眺望関係	距離	平均距離以下	70%	10%	89%	100%
		平均距離以上	46%	100%	59%	3%
	仰角	平均角度以下	89%	100%	87%	15%
		平均角度以上	43%	0%	50%	100%

3. まとめ

本章では、「文化的価値を有する雪形」（150 体）の特性を山岳特性、眺望特性から考察し、以下のことが明らかになった。

「文化的価値を有する雪形」が出現する山の山岳特性は、「山岳の地理的特性」の「種類」と「山岳の知名度」の全カテゴリーにより、山岳の特性に関連する項目を抽出し、2 項目・5 カテゴリー・7 つの詳細データから分析を行った。その結果、「Ⅰ富士類似型」、「Ⅱ地方連峰型」、「Ⅲ名山型」の 3 つの類型に分類し、各類型の特徴を明らかにした。

「文化的価値を有する雪形」の眺望特性は、「山岳の地理的特性」の「標高」、「望見地の立地特性」の「地形」、「眺望関係」の全カテゴリーを抽出し、3 項目・4 カテゴリー・11 つの詳細データから分析を行った。その結果、「Ⅰ丘陵主要型」、「Ⅱ平野主要型」、「Ⅲ盆地・高原高地主要型」、「Ⅳ盆地・谷間主要型」の 4 つの類型に分類し、各類型の特徴を明らかにした。

参考文献

- 1) 文化庁文化庁記念物課監修：日本の文化的景観―農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書一, pp. 78, pp. 80, 同成社, 2005.
- 2) 秋田谷英次：雪形に期待する, 砂防と治水, Vol. 29, No. 5, pp. 4-6, 1996.
- 3) 安曇野市公式ホームページ：観光案内, 雪形.
(<https://www.city.azumino.ngano.jp/soshiki/32/10316.html>)
- 4) 福島市HP：観光PRキャラクターももりん.
(<https://www.i-fukushima.jp/tokushu/archive/2015/19154/>)
- 5) 妙高市HP：新潟春告げる雪形「はね馬」妙高山にくっきり, 2007.
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/107.html>)
- 6) 樋口忠彦：景観の構造 ―ランドスケープとしての日本の空間一, pp. 4-6, 技報堂出版, 1975.

【表 6-1-1 「文化的価値を有する雪形」が出現する山の山岳特性に関する評価項目に用いた文献】

- ・徳久球雄, 石井光造, 武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- ・山と溪谷社編：日本の独立峰 45 選, 山と溪谷, Vol. 4, pp. 24-25, 2021.
- ・気象庁編：日本活火山総覧(第 4 版), 2015.
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/menu_jma_hp.html)
- ・「観光資源台帳」日本交通公社.
(<https://www.jtb.or.jp/page-search-tourism-resource/> (旧))
(<https://www.jtb.or.jp/research/tourism-resource-list/> (新))
- ・深田久弥『日本百名山』新潮文庫, 新潮社, 2003 年.
- ・とよだ時：『日本百霊山伝承と神話でたどる日本人の心の山』ヤマケイ新書, 山と溪谷社, 2016 年.
- ・中島信典：『おらが富士 340 座―全国富士行脚 18 年の記録』Mybook, 1993 年.

【表 6-1-2 「文化的価値を有する雪形」(150 体) の眺望特性に関する評価項目に用いた文献】

- ・国土地理院編：国土地理院地図.
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- ・国土地理院編：国土地理院電子地形図 20 万.
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)
- ・徳久球雄, 石井光造, 武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- ・国土地理院編：国土地理院電子地形図 20 万.
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)
- ・国土地理院編：1. 地形分類, 2. 自然地域の名称.
(https://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atlas-d_j_02.pdf)
- ・各市町村史参照 (表 7-2-4) .
- ・国土地理院編：基準点成果等閲覧サービス.
(<https://sokuseikagisl.gsi.go.jp/top.html>)

【補注】

- 1) Bell Curve 社：統計解析ソフトエクセル統計.
(<https://bellcurve.jp/ex/>)

第七章 地方自治体における景観・文化資源としての
雪形への意識と利活用等の現状調査

1. 研究の枠組み

1.1. 研究の背景と目的

第 6 章の背景にはすでに述べたように、近年では、妙高市や安曇野市などをはじめ、一部の自治体において、観光資源として活用されるべく、雪形に関する情報が発信されている事例が見られる¹⁾²⁾³⁾。雪形は、地域の景観・文化資源として保護・継承するための契機が到来しているかもしれないと考えられる。

雪形の利活用に関しては、和泉、小山、山崎ら⁴⁾⁵⁾⁶⁾のような教育学の視点から雪形を教科書や授業に導入する実践についての研究と、作田ら⁷⁾による福島県吾妻小富士の「兎の雪形」に関する伝承の分布、現代社会における「兎の雪形」の捉え方を考察した研究などの地域研究はあるが、全国の雪形への意識・利活用の実態の全体像がまだ明確にされていない。

本章は、第 6 章で抽出された「文化的価値を有する雪形」(150 体)の望見地である 68 地方自治体に対する調査から現在において景観・文化資源として保護・継承の可能性を活用事例から検討し、その潜在的な価値を考察することを目的とする。

1.2. 研究の手法

①最初に県市町村史、郷土資料等自治体公式サイト、地域新聞等より雪形についての住民意識や観光資源等を把握する。

②それらをもとに、文化的価値を有する雪形の望見地である 68 自治体に対する雪形への住民意識と利活用の現状についてアンケート及びヒアリング調査を先行に実施した。アンケート調査は郵送及びメールにて質問し、ヒアリングは新型コロナウイルスの影響を考慮し、電話によって実施した。期間は、2021 年 7 月 20 日～8 月 20 日である。

③第 6 章における「文化的価値を有する雪形」の山岳特性及び眺望特性の分析結果から、現在において利活用されている雪形の特性を明らかにする。

2. 各自治体における景観・文化資源としての雪形への意識・活用実態の考察

「文化的価値を有する雪形」の望見地である 68 自治体に対する雪形への住民意識と利活用の現状についてアンケート及びヒアリング調査の結果、52 自治体から回答を得た(回答率 76%)。

2.1. 調査内容

アンケート・ヒアリング調査の質問事項は以下の通りである。

- (ア) 雪形の基本情報 (名称、色、形、農事暦などの産業に関する利用など)、
- (イ) 雪形の景観としての認識 (雪形出現の山岳及び山岳の種類、望見範囲、地域の景観資源としての認知度など)、
- (ウ) 雪形の地域文化としての認識 (雪形に関する資料記載、地域活動の開催など)

調査対象のうち、文化的景観指定の意向を持つ自治体は、1 市町村 (妙高市) のみであった。

3. 景観・文化資源としての雪形への意識と活用方法意識・活用方法

調査の結果、「1. 郷土資料や县市町村史等に雪形が取り上げられている。」は最多で、51自治体(75%)。次いで「5. 地域新聞・雑誌等に雪形の情報が紹介されている。」が 36自治体(53%)、「8. 県または市町村発信の公式サイトに雪形の情報が紹介されている。」が 25自治体(37%)となり、積極的な情報開示が少ないものの、「3. 雪形の名前を冠した山、地名、建物や橋等がある。」が 43自治体(63%)、「2. 雪形に関する伝説・民話・俳句等の地域の創作文学等がある。」が 24自治体(35%)となり、魅力発信や地域活性化等の文化資源として活用されていることが明らかになった(表 7-3-1)。

表 7-3-1 景観・文化資源としての雪形への意識と活用方法

1.郷土資料や县市町村史等に雪形が取り上げられている。	75%
2.雪形に関する伝説・民話・俳句等の地域の創作文学等がある。	35%
3.雪形の名前を冠した山、地名、建物や橋等がある。	63%
4.雪形に関する資料収蔵・展示物は市町村にある。	16%
5.地域新聞・雑誌等に雪形の情報が紹介されている。	53%
6.雪形に関する祭り、イベント等を企画・開催したことがある。	6%
7.雪形に関する勉強会、講座等を企画・開催したことがある。	22%
8.県または市町村発信の公式サイトに雪形の情報が紹介されている。 (县市町村HP、観光協会HP、公式ツイッター等)	37%
9.县市町村のPR資料に雪形に関する情報がある。 (パンフレット、地図等)	18%
10.景観・観光計画等に取り上げられている。	12%
11.雪形の名前や形を使った商品等がある。	16%
12.その他の利用方。	10%

4. 景観・文化資源としての雪形への意識と活用方法の特徴

各市町村における具体的な意識・活用方法は、表 7-4-1 の通りで、1～3 項目を挙げた自治体が大半で 38 自治体(56%)、3 項以上の自治体は、26 自治体(38%)で関心の程度は低いと言わざるを得ない。ただ 8 項目以上の 9 自治体は、多面的に雪形を意識し、活用していることが分かった。

また、表 7-4-2 の 8 自治体は雪形を景観・観光などの計画に取り上げられていることが明らかになった。

表 7-4-1 各自治体における景観・文化資源としての雪形への意識と活用方法の特徴

項目数	項目号	自治体名 *回答した自治体	自治体数	割合					
1項目	1のみ	むつ市,本宮市, 二本松市,甲府市, 信濃町*	10	15%	4項目	1235	魚沼市, 南砺市*	9	13%
	2のみ	富士市*				1238	雫石町		
	3のみ	能代市, 立山町*				1278	柏崎市*		
	5のみ	庄内町, 遊佐町*				1357	富山市*		
2項目	1,3	七戸町*,十和田市, 秋田市*,朝日町*,檜 枝岐村,胎内市*,甲 斐市*	14	21%	5項目	1358	糸魚川市*, 伊那市*	5	7%
	1,5	富士吉田市				4578	加賀市		
	1,12	富士河口湖町*				13811	関川村*		
	3,4	長野市*				12357	南魚沼市*		
	3,5	白石市*				12359	五泉市*		
	4,5	にかほ市*				123510	白馬村*		
5,8	小松市*, 白山市*	123811	仙北市*						
3項目	123	長万部町,金ヶ崎町, 新発田市*	14	21%	7項目	12357811	長岡市*	3	4%
	127	十日町市*				12345812	宮田村*		
	135	蔵王町*,喜多方市*, 小国町*				12358910	黒部市*		
	157	青森市*, 弘前市*			8項目	123578911	栗原市*	3	4%
	158	高山市*				1235891011	福島市*		
	178	飯島町*				134578910	勝山市*		
	1810	飯綱町			9項目	12345891012	魚津市*	2	3%
	237	阿賀野市				1345678911	駒ヶ根市*		
3511	盛岡市*	10項目	123457891112	安曇野市*	1	1%			
項目の詳細は表6を参照					11項目	12345689101112	妙高市*	3	4%
藤崎町*,小谷村*,新潟市*,三条市*では雪形 に関する情報は確認できなかった。						12345689101112	上越市*		
						1234567891112	大町市*		

表 7-4-2 各種計画に取り上げられている雪形

県名	市町村名	計画名	山名	雪形名
石川県	勝山市	・勝山市景観計画 ⁸⁾ ・勝山市エコミュージアム推進計画 ⁹⁾	大日山	鶴
福島県	福島市	・福島市景観形成基本計画 ¹⁰⁾ ・福島市中心市街地活性化基本計画 ¹¹⁾	吾妻小富士	雪うさぎ
長野県	白馬村	・白馬村観光地経営計画 ¹²⁾	白馬岳	代かき馬
	飯綱町	・飯綱町景観計画 ¹³⁾	飯縄山	未記載
新潟県	妙高市	・妙高市歴史文化基本構想 ¹⁴⁾	妙高山	山の字 はね馬
	上越市	・上越市景観計画 ¹⁵⁾	妙高山 南葉山	はね馬 大男
富山県	黒部市	・黒部市観光振興計画 ¹⁶⁾ ・黒部市都市計画マスタープラン ¹⁷⁾	僧ヶ岳	虚無僧
	魚津市	・第4次魚津市総合計画 ¹⁸⁾ ・生物多様性うおづ戦略 ¹⁹⁾	僧ヶ岳	虚無僧

5. 景観・文化資源としての雪形への意識と活用方法の特徴的な活用事例

以下では、9自治体での具体的な雪形の活用方法を示しその価値認識を考察した。

5.1. 栗原市

栗駒山（1627m）は岩手県一関市と宮城県栗原市の境に位置し、コニーデ型の活火山である。また、岩手県、宮城県、秋田県から望見される。岩手県では「須川岳・酢川岳」、秋田県では「大日岳」と別称され、「駒ヶ岳」とも呼ばれていた²⁰⁾。第6章における「文化的価値を有する雪形」が出現する山の山岳特性についての考察では、栗駒山は「Ⅰ富士類似型」に属していることが明らかになった。栗駒山独立峰であり、また古くから「霊峰栗駒山」として崇められていることも明確になった²⁰⁾。

栗駒山に出現する雪形「駒形」は、明治時代以前の地誌などにおいて、『封内風土記』（1772、安永1年）や『宮城県名所旧跡案内』（1894、明治27年）に記録されていることが明確になった²¹⁾。

また、雪形「駒形」は、「往昔山頂に神馬がおり死して峰頂に葬り祠を立て神馬社という。晩夏雪なお消えずその雪の形奔馬の形となり、首尾たてがみ脚踏をそなえている。」という伝説が残されている²²⁾。

栗原市に対するアンケート・ヒアリング調査によると、栗駒山の雪形「駒形」は、現在地元では「駒姿」と呼ばれていることが明らかになった。雪形「駒姿」は、栗駒山の山名由来や栗原市合併前の旧栗駒町の町名に使用され、市民の認知度も高いことが明確になった。また、栗駒山麓ジオパークのサイトとして「雪形と高山植物」という位置づけをしており、栗駒山麓ジオパークビジターセンターの映像や『栗駒山麓ジオパークガイドブック』でも紹介される等の積極的な情報発信もされている。さらに、栗駒山麓ジオパークのロゴ・マークは、「駒姿」が使われており、絵本等出版物にも活用されていることから、雪形「駒姿」は地域の自然資源として現在も認識されていると考察できる²³⁾。

栗駒山の「駒姿」は、第6章における「文化的価値を有する雪形」の眺望特性についての考察では、「Ⅲ盆地・高原高地主要型」に属することが明らかになった。「駒姿」は、出現する山岳の標高が高く、また平均角度以下の角度で容易に望見されることが特徴とされている。さらに、栗原市のみではなく、秋田県まで広く望見されることが明らかになった²⁴⁾。



図 7-5-1 栗駒山麓ジオパークガイドブック ²³⁾

5.2. 福島市

吾妻小富士(1707m)は、福島市の西部から山形市の南部にかけて連なる大火山帯の吾妻連峰の一つの峰であり、福島県福島市側に立地している成層火山である²⁰⁾。第6章における「文化的価値を有する雪形」が出現する山の山岳特性についての考察では、吾妻小富士は連峰の一峰であるが、独立に見えるため古くから地方富士として認識され、「I富士類似型」に属していることが明らかになった。

吾妻小富士の雪形の「雪うさぎ」(図-7-5-2)は、約260年前の『寓意草』、『藤屋佐藤興惣左衛門家養蚕記』(1812)等の文献に記述される等の歴史があり、信仰の対象としても、『ふくしまの民話』(2007)にも掲載されている。養蚕業に関する雪形について、江戸時代にはすでに吾妻小富士の「雪うさぎ」が養蚕の目安として記録されていた。『藤屋佐藤興惣左衛門家蚕養之事』「養蚕日記」(文化9年、1812)では、「壬申 養蚕之事 三月十四日 北風少シ雨 吾妻嶽兎形現れ」などの記述があることが確認された²⁵⁾²⁶⁾。また、「雪うさぎ」は地方により「種まきうさぎ」とも呼ばれている。「雪うさぎ」にまつわる伝承については、1997年、作田らによる福島県吾妻小富士の「兎の雪形」の伝承の分布についての考察では、「雪うさぎ」は地域ではうさぎ信仰にも関わっており、地名「兎田」の由来でもあったと指摘している²⁵⁾。

さらに、福島市へのアンケート・ヒアリング調査によると、現代社会において、「雪うさぎ」はキャンプ場「兎平」の名の由来として有名である。さらには、観光バス「吾妻の雪うさぎ号」、1996年に選定された「雪うさぎ」の観光PRキャラクター「ももりん」(図-7-5-3)等、雪形を起源とした名称や形として使用されているものの、雪形そのものをアピールできるものとはなっていない。

しかしながら、各種グッズやイベントの宣伝等により知名度と愛着が高まり、結果として『福島市景観形成基本計画』(2018)では、「市民にとって愛着や誇りのある景観」になる等の成果も既に出ている¹⁰⁾。



図 7-5-2 吾妻小富士雪形「雪うさぎ」¹⁰⁾

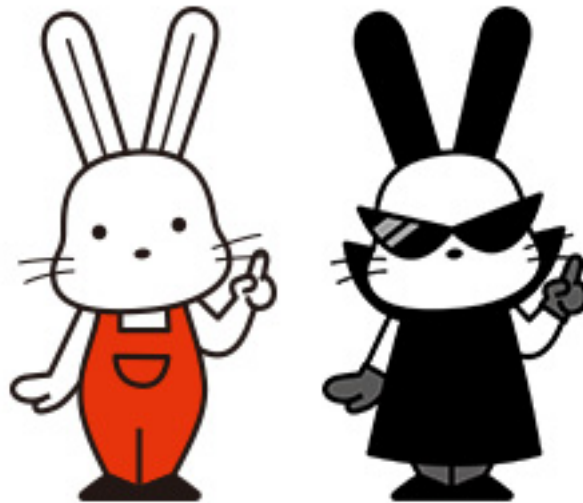


図 7-5-3 福島市観光 PR キャラクター「ももりん」²⁷⁾

5.3. 勝山市

大日山（1320m）は福井県勝山市および石川県加賀市と小松市に跨り、両白山地に属する火山である。かつては「越前甲」とも呼ばれていた²⁰⁾。

勝山市の雪形は、幕末から明治にかけ、勝山八景の一つとして「鶴峯の残雪」の「2つの鶴」の雪形（図 7-5-4）²⁸⁾が選定され、大野郡誌（1912、明治 45 年）には越前大日山名を「鶴が嶽」と記載されており、雪形が山名となっていることが明らかになった。具体的には、大野郡誌では、「鶴峯の残雪 鶴が嶽は、町の北方約一里、荒土村後一帯の峯なり、暮春、全峰翠滴らんとする時間に消残れる白雪の形、恰も鶴に似たるを以て喧傳せらる。」と鶴峯の「鶴」が描写されていた²⁹⁾。勝山市史によると、「鶴が嶽は町北約四キロ、荒土村一帯の背後にある山である。」と記述されている³⁰⁾。

また、「鶴峯の残雪」は『勝山市エコミュージアム推進計画』⁹⁾（2002）、『勝山市景観計画』⁸⁾（2013）に取り上げられ、現在でも頻繁に新聞で報道されており、景観文化としての認識が高い。

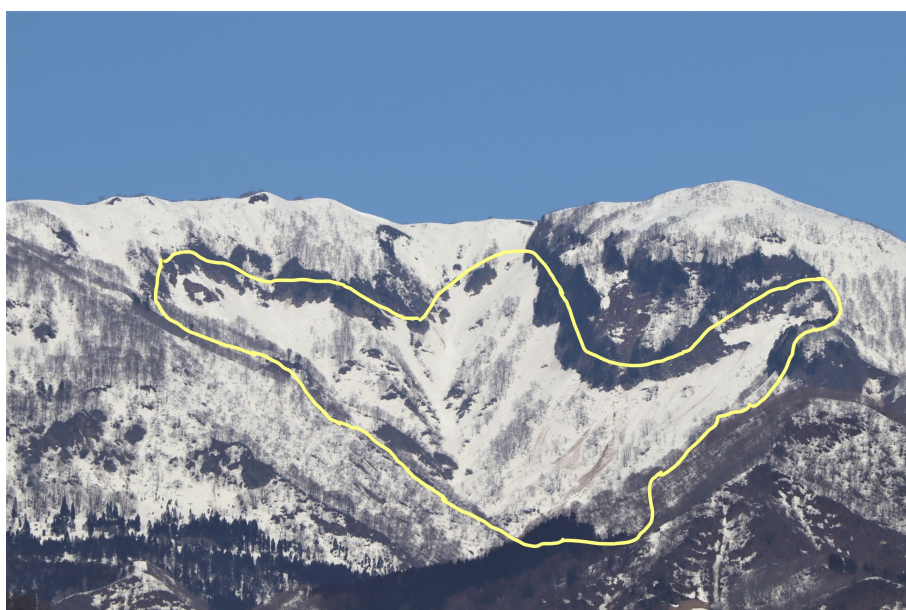


図 7-5-4 大日山「鶴峯の残雪」²⁸⁾

(勝山市役所PR室 Facebook, 2021. 03, 勝山市へのヒアリングより入手)

5.4. 魚津市と黒部市

僧ヶ岳（1855m）は、飛騨山脈立川連峰の一つの峯であり、富山県魚津市と黒部市の境の立地している²⁰⁾。第6章における「文化的価値を有する雪形」が出現する山の山岳特性についての考察では、僧ヶ岳は「Ⅱ地域連峰型」に属することが明らかになった。春になると、頂上近くに黒衣の僧の頭陀袋をさげ手を拱いて立つ姿があらわれる（図 7-5-5）²¹⁾³¹⁾。山麓の人々はこれを見て「僧ヶ岳へ坊様がござった、麦の秋となったぞい」という。雪形は土用になると姿を消す²¹⁾。また、「虚無僧」の隣に、「馬」の雪形も見られると言われている。

また、僧ヶ岳の「僧」、「馬」等の雪形は『千網集』（1704、元禄時代）、『魚津市史』に記載されておられる。僧ヶ岳はかつて地元では「僧馬岳」とも呼ばれており、雪形が山名の由来にもなっている。また、民謡「布施谷節」にも、僧ヶ岳の雪形が唄われていることが明らかになった。

具体的には、『魚津市史』³²⁾では、「僧ヶ岳の雪が消えかかることは、田植えの盛りである。虚無僧姿は四月の中旬ごろでもあろうか。三月彼岸過ぎになると、田植え準備にはまだ少し早く、かといって、田にも畑にも雪はなし、月の夜など若者を外へと誘い出す。彼らは目出度節を吹きながら（尺八、胡弓）田植えを待ったのである。」とある。「布施谷節」には、「嫁にゆくなら小川村へ 村は三ヶ寺後生どころ、三十三たちや小川の開帳 鐘や太鼓でなりわたる、泣くななげくな僧まの鳥よ 待てば氷もとけていく、いつか春風より吹けば 山の虚無僧も腰あげる」とある³³⁾。また、地元では「馬を引いて魚津の町を歩いていた坊さんがものすごい風で吹き飛ばされ、馬と一緒に僧ヶ岳にたたきつけられて貼り付けられた。」という話もあり、地域の伝説として取り上げられたことも明らかになった³³⁾。

現在において、僧ヶ岳の雪形は両市の公式サイト³⁴⁾³⁵⁾、魚津市観光協会 HP³⁶⁾、市発行の「魚津市観光 MAP UO!NAVI」『魚津市発地型観光パンフレット』³⁷⁾にも多言語で取り上げられているなど国際的なアピールも行っている。

また、『生物多様性うおづ戦略(素案)』¹⁹⁾（2014）で僧ヶ岳を扱っており、『魚津市観光振興計画』³⁸⁾（2012）では、雪形を「認知は低いに興味は高い、PR すべき資源」と記述する等、市の政策の中に位置づけられている。

黒部市では『黒部市観光振興計画』¹⁶⁾（2007）では、観光評価「強み」の項目に位置づけられているが魚津市に比較すると認識は弱いと言える。

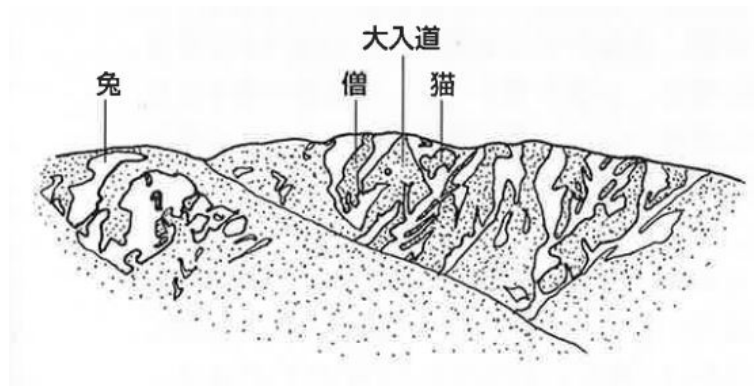


图 7-5-5 僧ヶ岳「大入道、僧（虚無僧）、兔、猫」³¹⁾

5.5. 妙高市・上越市

妙高山（2446m）は、妙高連峰の主峰であり、活火山である。神奈山・大倉山・赤倉山などが外輪山である。また、新潟県妙高市と長野県信濃町の境に位置しており、妙高市、上越市、信濃町などで望まれる。妙高山は、独立峰として認識されることが多く、古来より信仰の山として認識され、「越後富士」とも呼ばれている³⁹⁾。第6章における「文化的価値を有する雪形」が出現する山の山岳特性に関する考察では、「I富士類似型」に属していることが明らかになった。

妙高市と上越市の両市では、妙高山外輪山の神奈山の「跳ね馬」、「農牛（馬形）」（図7-5-6）³⁹⁾、妙高市では妙高山本峰の「山の字」、上越市では南葉山の「種蒔き男（大男）」など、多数の雪形が見られ、『越後頸城郡誌稿』（1901、明治34年）、『温古の栞』（1890、明治24年）など古文獻にも多数記述されている他、各地で文学・絵画にも描写されている。また、妙高村関川付近では、「農牛（馬形）」の出現する場所は「マガタ」や「馬形の沢」と呼ばれることもある⁴⁰⁾。

妙高市教育委員会、上越地方の雪形に詳しい記者である川村康宏氏、童話作家杉みきこへのヒアリング調査により、以下の情報が明らかになった。信越五岳の一つである妙高山は、阿弥陀信仰の山であり、善光寺から由来であったと言われている⁴¹⁾。5月下旬から6月上旬にかけて妙高山の本峰に「山の字」という雪形が現れ、妙高市に隣接する長野県信濃町方面から見られると言われている。江戸時代には、浄土真宗の僧了貞著の『二十四輩巡拝図会 第五巻 信濃之部』（1803、享和2年）によれば、「此山の字を顕せる處 往還の旅人眺めて殊に奇とせり」と「山の字」が記述され、絵も載せられている（図7-5-7）⁴²⁾。江戸時代末期、信濃方面の地誌『信濃奇勝録 第二巻』（明治20年、1887）には、「四山一望」の項目で妙高山の「山の字」が紹介され、絵とともに「五月中雪消テ山字ノコル」と記録されている（図7-5-8）⁴³⁾。

また、江戸時代の終わりまで、善光寺の本尊と同じ姿をした阿弥陀如来の三尊像が妙高山山頂にあったため、旧暦6月23日には毎年登拝行事が行われ、参拝者には妙高山如来の御影札が配布された。この御影札には、雪形「山の字」が阿弥陀如来三尊像と共に描かれている（図7-5-9）⁴¹⁾。明治時代以降には、観光案内図『燕鉞泉全図』にも、「山の字」が描かれている（図7-5-10）⁴⁴⁾。妙高山の山頂付近に現われる雪形「山の字」は、阿弥陀三尊の象徴として広く知られていたとされていることが明らかになった。

さらに、妙高村では「木曾義仲が山の字を彫らせた」、「元は妙高山という字だったが、噴火で吹き飛ばされて山だけになった」などの伝承が残されている⁴⁵⁾。

現代において、両市の雪形に関する利活用については、2015年には、直江津から妙高

高原の間の在来線は、「はねうまライン」と命名された他、橋梁、体育館、公園名等にも、「跳ね馬」が施設名称として使用されている。妙高市矢代川にかかる橋梁「はねうま大橋」、介護施設「はねうまの里」、飲食店「レストランはねうま」、体育館「はねうまアリーナ」、公園「はねうまグリーンパーク」などがある。

妙高市では、「跳ね馬」を模した菓子「はね駒の里」、名入りの地酒とお茶も販売されていることや、2018年国体の名称に「にいがた妙高はね馬国体」とされる等、「はね馬」が多用されている。また、妙高市の観光PRキャラクターのデザインにも「跳ね馬」と「山の字」の絵が採用されてる(図7-5-11)⁴⁶⁾。さらに、妙高市新井出身の大相撲力士霜鳥関の化粧まわし、妙高山麓の神社の絵馬に「跳ね馬」を描いたものもあったそうである⁴⁷⁾。

一方、『上越市景観計画』¹⁵⁾(2009)では、神奈山「跳ね馬」や、南葉山「種蒔き男」を景観資産の候補に取り上げており、景観価値の認識が強い。妙高市でも『妙高市歴史文化基本構想』(2018)で「山の字」と「跳ね馬」を景観・文化資産として位置づける等景観的価値づけも実施されている。

以上のことから、かつて主峰に出現する「山の字」の方は有名であったが、現在外輪山に出現する「はね馬」の方が多く活用されていることが明らかになった。新潟県の雪形をまとめて調査・収集した民俗学者山崎⁴⁸⁾は、「同じ山の雪形の中で、時代によって注目されるものが変わる場合がある。」と指摘している。主峰に出現する「山の字」はかつて妙高信仰とともに旅人や信仰者にとって有名であったが、現在では山岳信仰が薄れつつあるため、外輪山神奈山に出現する「はね馬」の方がより認知度が高くなっている。この「はね馬」は、跳ねている姿をしており、縁起のいいものとされている。また、「山の字」と比較して「はね馬」の方は望見範囲が広いこともあって、現在では「はね馬」がより注目を集めている。また、「はね馬」の呼称が統一的なものとして地域に広まったきっかけは児童文学作家杉みき子の作品『朝やけまつり』(1975)^{注1)}であることがヒアリング調査より明らかになった。



図 7-5-6 妙高山「はね馬」³⁹⁾

(著者撮影、2019. 05)

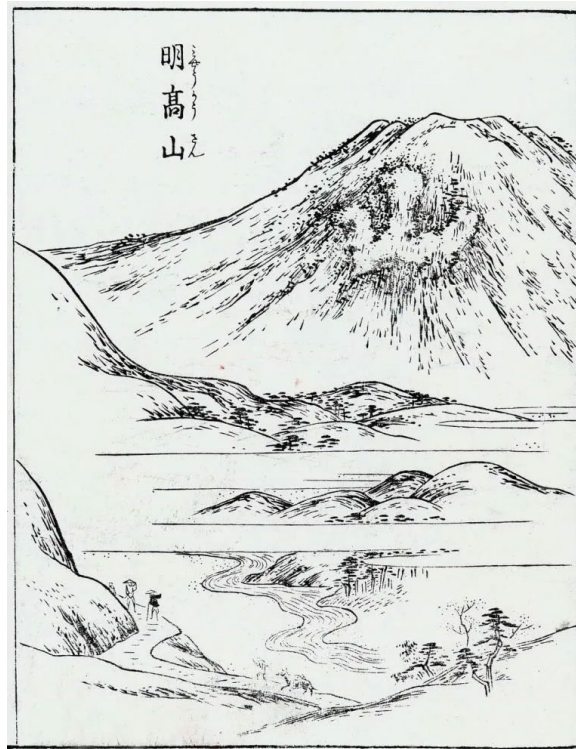


図 7-5-7 妙高山「山の字」『二十四輩巡拝図会』(1803)⁴²⁾

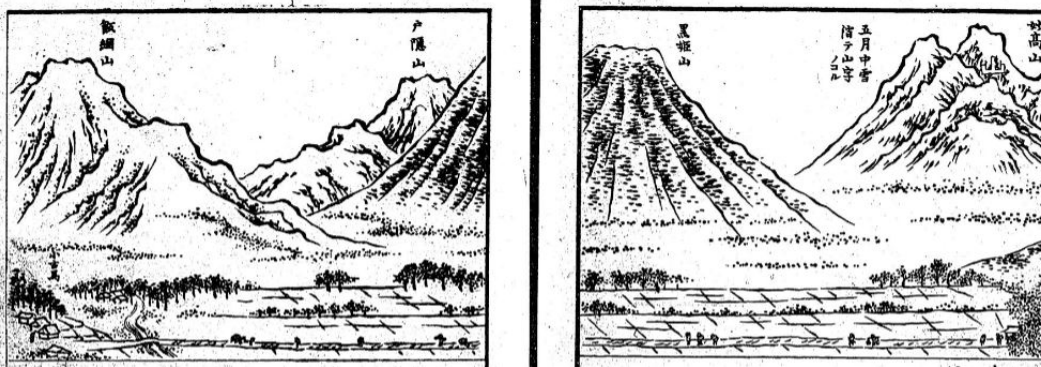


図 7-5-8 四山一望『信濃奇勝録』(1887)⁴³⁾

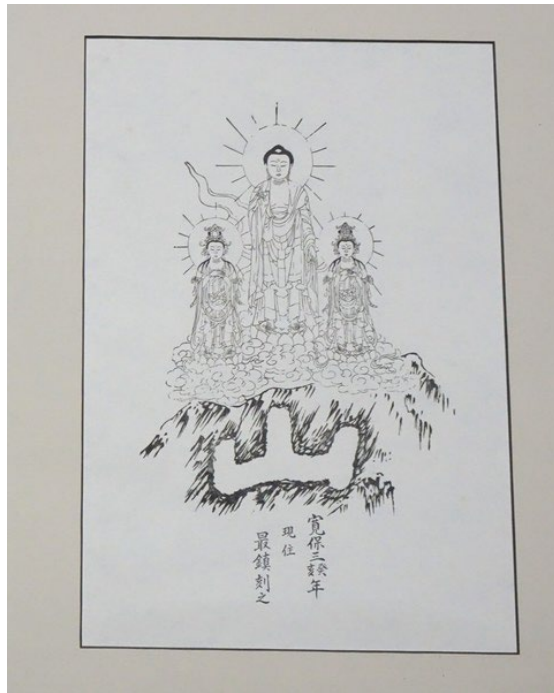


図 7-5-9 妙高山如来の御影札と「山の字」⁴⁾



図 7-5-10 燕鉞泉全図と「山の字」⁴⁾



図 7-5-11 観光 PR キャラクター「ミヨーコーさん」⁴⁶⁾



図 7-5-12 妙高高原ビール「ハネウマ IPA」と妙高山の「跳ね馬」^{48) 49)}

5.6. 駒ヶ根市・安曇野市・大町市

長野県では、一つの望見地で複数且つ連続的な雪形が見られ、主に白馬岳の「代馬」や蝶ヶ岳の「蝶」など有名な雪形により、「信州の雪形」の代表として広く知られている。それらの雪形が出現する山の殆どが高い連山であるため、『信府統計』(1724)、『木下蔭』(1779)、『登駒嶽記』(1784)、をはじめ、多くの古文献にも記述されている。木曾駒ヶ岳の「駒」、爺ヶ岳の「種蒔き爺」、常念岳の「常念坊」、蝶ヶ岳の「蝶」等、山の名や俗名になる雪形が多い²⁴⁾。

また、市町村へのアンケート調査によると、以下の情報が明らかになった。それらの自治体の公式サイトや観光協会 HP^{1) 50) 51) 52)}、また、『信州の雪形』、『駒ヶ根観光ミニ辞典』、『国定公園中央アルプス』等の冊子にも雪形が取り上げられている(図 7-5-13)⁵³⁾。信州の雪形は、毎年地元紙の記事となり(図 7-5-14)⁵⁴⁾⁵⁵⁾、大町市の「北アルプス雪形まつり」等、雪形の見える時期の展示・イベントも多い。また、駒ヶ根市立博物館や安曇野市田淵記念館では雪形写真展の開催をはじめ、『雪形マップ』を販売している。養命酒製造の飛龍のマークは、田切岳に現れる雪形「飛龍」と酷似していることが明らかになった。養命酒の飛龍は、徳川幕府より賜った400年以上の歴史のあるものであると言われている(図 7-5-15)⁵⁶⁾。その他に、宝剣岳島田頭の「島田娘」の名称を使った化粧水も販売している(図 7-5-16)⁵⁷⁾。さらに、それらの自治体では雪形観察会を開催する等積極的な雪形の観察を市民に促しており、雪形に対する継承意欲が高いと言える。



図 7-5-13 パンフレット『国定公園中央アルプス』に取り上げられている雪形⁵³⁾



図 7-5-14 地域新聞に報道されている「島田娘」⁵⁴⁾⁵⁵⁾

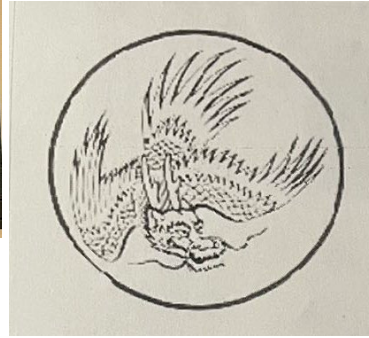
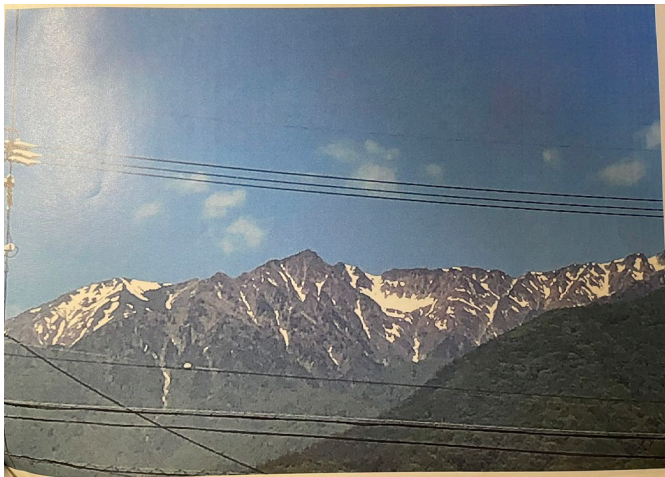


図 7-5-15 田切岳の雪形「飛龍」と養命酒の飛龍マーク⁵⁶⁾



図 7-5-16 雪形「島田娘」の名称を使用した化粧水⁵⁷⁾

6. まとめ

本章では、地方自治体における景観・文化資源としての雪形への意識・活用実態に関する調査を通して、雪形が地域の景観・文化資源の一つとして保護・継承すべき価値があることが明らかになった。栗原市、福島市、勝山市、魚津市、駒ヶ根市、安曇野市、妙高市、上越市の9自治体は、多面的に雪形を意識・活用していることが明らかになった。

それらの自治体では、雪形を有用な資源として活用していることから、雪形の地域の景観・文化としての価値づけには、農事暦としての機能を失っても地域の営みを支える存在となりえる資源であると考えられる。

また、多面的に意識・活用されている雪形の代表事例の殆どは、「Ⅰ富士類似型」、「Ⅲ名山型」など、名山に出現していることが明らかになった。それらの雪形の眺望特性については、盆地地形など近距離から遠距離までの広い範囲で望見できることが明らかになった。

さらに、長野県安曇野市や大町市に見られる北アルプスの一連の雪形や、新潟県妙高市と上越市から見られる妙高山の「山の字」をはじめ、古来より地誌や文人墨客による紀行文などの古文獻に奇観として記録されており、現在でも地域の一種の文化として県市町村に記録されているものが多い。加えて、それらの地域では研究者や記者などによる雪形に関する調査研究が積極的に展開されており、郷土資料や地域新聞などの文献が多く残されていることが明らかになった。また、それらの雪形は山容が大きい独立峰または標高が高い連峰に出現するため、複数な自治体から見ることができるという顕著な特徴がある。それらの自治体では、雪形観察会や講座など連携の宣伝や活動を積極的に行い、市民に対して雪形の観察を促しており、雪形を保護・継承する意欲が高いと言える。

加えて、それらの雪形は、「馬」、「兎」、「蝶」、「山の字」など、動物や昆虫、或いは人など、身近なものの形態で誰にでも分かる形として名称もつけられているものが多いことが明らかになった。

最後に、それらの雪形のすべては民話、歌謡などとして残されていることが明らかになった。中には吾妻小富士の「雪うさぎ」や僧ヶ岳の「虚無僧」など古来からの伝説が残っているものや、妙高山の「はね馬」のように、現代の創作民話などによって知名度が高まるものがある。また、多面的に活用されている代表事例ではないが、富士市への

アンケート・ヒアリング調査によると、富士山の雪形「かぐや姫」⁵⁸⁾は、地域の景観・文化資源として取り上げられた事例も出始めている。かぐや姫は、日本における熟知されている伝説の人物であり、その形は日本の象徴である富士山の雪形として現れ、地元の人々に親しまれ、地域の新聞などで情報発信されている。調査によると、市町村史に取り上げられる可能性があるとされている。このように、民話には、この土地に生息している人々の思いや文化が込められており、雪形が農事暦としての機能を失くしても、妙高山の「はね馬」や富士山の「かぐや姫」のように、地域の民話など身近な文化に繋がる景観として残っていく可能性が高いと考えられる。

そのため、今後より多くの地域で地域に伝わる雪形の変遷や歴史、伝承、民話などを通じて、地域のアイデンティティとして、次世代に継承していく必要があると思われる。

しかし、現状では、雪形に関する位置づけは、最後に具体的に例示したように、公共においては、「景観計画」等に掲示されるにとどまっており、むしろ、観光資源として、雪形の名称や形態のみが一人歩きする傾向が高い。また、雪形については、見ることができる時期や場所が限定されていること等により全国の人々の認知度はそれ程高くない。

これらのことから、今後はより多くの人々に地域の産業と共に受け継がれてきた歴史を、新たな地域資源として継承していく為には事例のように実在する雪形を見る機会を促し、その価値を多くの若年層に伝達していく仕組みが必要とされる。

参考文献

- 1) 安曇野市公式ホームページ：観光案内, 雪形.
(<https://www.city.azumino.ngano.jp/soshiki/32/10316.html>)
- 2) 福島市HP：観光PRキャラクターももりん.
(<https://www.i-fukushima.jp/tokushu/archive/2015/19154/>)
- 3) 妙高市HP：妙高市観光PRキャラクター「ミョーコーさん」.
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/107.html>)
- 4) 和泉薫：全教育としての新潟“雪”物語, 気象利用研究, Vol. 13, pp. 51-54, 2009.
- 5) 小山茂喜：伝統・文化に関する教育の充実に関する実践—雪形を扱った事例, 教職研究, Vol. 3, pp. 73-90, 2010.
- 6) 山崎英二：農事暦をテーマとした昔話について, 越谷保育専門学校研究紀要 Vol. 4, pp. 12-18, 2015.
- 7) 作田哲啓, 赤坂信：吾妻小富士の雪形—地域限定・期間限定の自然風景—に関する一考察, ランドスケープ研究 Vol. 70, No. 4, pp. 312-319, 2007.
- 8) 勝山市：勝山市観光計画, pp. 15, 2011.
- 9) 勝山市：勝山市エコミュージアム推進計画, 2002.
- 10) 福島市：福島市景観形成基本計画, pp. 1, 2018.
- 11) 福島市：福島市中心市街地活性化基本計画 pp. 4, 2021.
- 12) 白馬村：白馬村観光地経営計画, pp. 42, 45, 58, 2016.
- 13) 飯綱町：飯綱町景観計画, pp. 3, 2021.
- 14) 妙高市：妙高市歴史文化基本構想, pp. 52, 60, 81, 82, 2018.
- 15) 上越市：上越市景観計画, pp. 15, 26.
- 16) 黒部市：黒部市観光振興計画, pp. 59, 74, 101, 2007.
- 17) 黒部市：黒部市都市計画マスタープラン, pp. 134, 2010.
- 18) 魚津市：第4次魚津市総合計画, pp. 182, 2011.
- 19) 魚津市：生物多様性うおづ戦略, pp. 24, 2014.
- 20) 徳久球雄, 石井光造, 武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- 21) 岩科小一郎：山の民俗, pp. 200-240, 岩崎美術社, 1968.
- 22) 編纂委員会編：全国駒・馬の雪形, 編纂委員会, 2009.
- 23) 栗駒山麓ジオパークHP：雪形「駒姿」.
(<https://www.kuriharacity.jp/geopark/index.html>)
- 24) 田淵行男：山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 25) 作田哲啓, 赤坂信：吾妻小富士の雪形—地域限定・期間限定の自然風景—に関する一考察, ランドスケープ研究 Vol. 70, No. 4, pp. 312-319, 2007.
- 26) 伊達町史編纂委員会編：伊達町史 第4巻(別巻1)(奥州蚕種本場養蚕日誌修正), pp. 311, 伊達町史編纂委員会, 1985.
- 27) 福島市HP：福島市観光PRキャラクター「ももりん」.
(<https://www.city.fukushima.fukushima.jp/suidou/?p=49562>)
- 28) 勝山市役所PR室：勝山に春を告げる「鶴峯の残雪」。(勝山市へのヒアリングにより入手.)
(<https://www.facebook.com/ktSAGICHO/posts/5147442881994151/>)
- 29) 福井県大野郡教育会 編：大野郡誌「鶴峯の残雪」, pp. 426, 1912.
- 30) 勝山市：勝山市史第1巻 風土と歴史「勝山八景」, pp. 312, 1974.
- 31) 魚津埋没林博物館 編：魚津埋没博物館広報誌 うもれ木 NO. 11, pp. 1, 1999.
- 32) 魚津市史編纂委員会 編：魚津市史 上巻, pp. 888-891, 1968.
- 33) 長井真隆：第1回「富山の雪形とその伝承」, 日本海学講座, pp. 1, 2000.
- 34) 魚津市HP：魚津の四季.

- (<https://www.city.uozu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=2253>)
- 35) 黒部市 HP：僧ヶ岳の雪絵。
(<https://www.city.kurobe.toyama.jp/attach/EDIT/017/017731.pdf>)
 - 36) 魚津市観光協会 HP：僧ヶ岳の雪絵 季節を告げる風物詩。
(<https://uozu-kanko.jp/library/sougadake-yukie/>)
 - 37) 魚津市：「魚津市観光 MAP UO!NAVI」『魚津市発地型観光パンフレット』。
(<https://www.city.uozu.toyama.jp/attach/EDIT/052/052582.pdf>)
 - 38) 魚津市：魚津市観光振興計画（案），pp. 18, 2012.
 - 39) 著者撮影：妙高山「はね馬」、「山の字」、南葉山「大男」.
 - 40) 山崎進：妙高山と南葉山の雪形，あしなか，Vol. 253， pp. 1-10, 1999.
 - 41) 妙高市 HP：妙高山と善光寺。
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/6709.html>)
 - 42) 了貞：二十四輩巡拝図会，第五巻，1803.
 - 43) 井出道貞，他：信濃奇勝録 巻之 2， pp. 228-229, 1887.
 - 44) 上越タウンジャーナル：妙高山に「山」の字の雪形 江戸時代は「跳ね馬」より有名だった？，2018.
(<https://www.joetsuj.com/articles/11183955>)
 - 45) 上越タウンジャーナル：妙高に「山の字」，駒ヶ岳に「いの字」，2010.
(<https://www.joetsuj.com/articles/744001503>)
 - 46) 妙高市 HP：妙高市観光 PR キャラクター「ミヨーコーさん」。
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/107.html>)
 - 47) 小島 正巳：続・妙高火山の文化史， pp. 81-84， 2016.
 - 48) 上越妙高タウン情報：妙高の「はね馬」モチーフ 新地ビール発売中。
(<https://www.joetsu.ne.jp/36348>)
 - 49) 朝日新聞デジタル：新潟 春告げる雪形「はね馬」妙高山にくっきり，2007.
(<https://www.asahi.com/articles/ASK4S3SD3K4SU0HB002.html>)
 - 50) 駒ヶ根市 HP：中央アルプスの魅力再発見。
(<https://www.city.komagane.nagano.jp/soshikiichiran/syoukoukankouka/kankogakari/tozanjyohou/6776.html>)
 - 51) 大町市 HP：おおまちの春夏秋冬。
(<https://www.city.omachi.nagano.jp/00014000/00014100/00014160/00014192.html>)
 - 52) 大町市 公式観光サイト HP：雪形。
(<https://kanko-omachi.gr.jp/spot/yukigata/>)
 - 53) 中央アルプス山岳観光協会：パンフレット 国定公園中央アルプス。（駒ヶ根市へのアンケート調査により入手）
 - 54) 信濃毎日新聞：せっかち 島田娘，2021。（駒ヶ根市へのアンケート調査により入手）
 - 55) 長野日報：早くも「嫁さま」島田娘，2021。（駒ヶ根市へのアンケート調査により入手）
 - 56) 日本家庭薬協会：養命酒製造株式会社 看板・マークの由来。（駒ヶ根市へのアンケート調査により入手）
(<https://www.hmaj.com/mark/youmei/>)
 - 57) 化粧水 島田娘（駒ヶ根市へのアンケート調査により入手）
 - 58) 富士じかん：富士山に浮き出るかぐや姫。
(<https://www.city.fuji.shizuoka.jp/fujijikan/fujipedia/kb719c000000095i.html>)

第八章 「馬・駒」の雪形と関連する地域文化に関する調査

1. 研究の枠組み

1.1. 研究の背景と目的

第3章では、雪形の種類の中で、動物の形 (N=198) が最も多く見られ、その中でも馬・駒の形は約半数 (N=95) を占めていることが明らかになった。日本にある「馬・駒」が山名になった山の多数は、「馬・駒」の雪形からの由来と言われており¹⁾、現在国土地理院地図²⁾で登録された18座の駒ヶ岳の中で、12座が「馬・駒」の雪形の伝承を有することが明らかになった。さらに、長野県木曾駒ヶ岳の「風馬」や富山県越中駒ヶ岳の「鼻取り駒」など、「馬・駒」の雪形は、江戸時代の地誌などの古文獻や文人墨客による紀行文などにも多数描写され、昔から山の奇勝として有名であったことが明確になった¹⁾³⁾⁴⁾。加えて、第5章では、雪形と十二支文化の関係についての考察から、馬が自由奔放なイメージを持つことから、古くから十二支の「午」として逞しさと幸運の象徴とされてきたことが明確になった。そのため、「馬・駒」の雪形の中には、耕作に関する形象だけでなく、「はね馬」や「早馬」など、躍動感のある且つ縁起のよい形象が多く見られることが明らかになった。第6章では、地方自治体において、雪形を景観・文化資源として意識・活用する例を調査した結果、多くの代表事例が「馬・駒」の雪形を利用していることが明らかになった。最後に、第7章では、雪形を意識・活用している代表事例の殆どは雪形を民話、歌謡などに取り上げられたことが明らかになった。その中で、古来より伝説が残されているものと、妙高山の「はね馬」のように、現代の創作民話などにより知名度が高まるものがある。雪形が農事暦としての機能を失くしても、妙高山の「はね馬」のように、民話など身近な文化と結び付ける景観として残っていく可能性が高いことが明らかになった。

以上のことから、「馬・駒」は文化的な意味としては意義深く、また価値認識されていることが明らかになった。今後、農事暦の役割をほぼ失くした雪形を一種の景観・文化として保全・継承するには、「馬・駒」の雪形が残っていく可能性が非常に高いと考えられる。また、駒ヶ岳ファンクラブにより日本全国の「馬・駒」の雪形をまとめて収集・調査した『全国駒・馬の雪形』一書¹⁾では、「余談であるが駒ヶ岳は東日本のみで西日本になり、日本列島で一番西の駒ヶ岳は福井県と滋賀県の県境の若狭駒ヶ岳である。駒ヶ岳の名称の由来は雪形、駒(二歳馬)、駒麗(高句麗の古名)、伝承・信仰(駒形神)の4要素に収斂する、西日本に駒ヶ岳がないのは特に雪形に深く係わりがありそうが」とされ、駒ヶ岳の分布や関連する文化は雪形に深く係わることを提示している。

そこで、本章では、既往研究¹⁾を踏まえて、「馬・駒」の雪形を例として、身近な文化

と結びつけることを通して、その景観・文化的意義を新たな視点から探ることを目的としている。

1.2. 研究手法

「馬・駒」の雪形に関する地域文化をより詳細に把握するには、形の原型である「馬」に関連する文化することが重要である。まず、日本における耕馬の分布、馬の流通関係、馬の利用から派生した馬の信仰や馬にまつわる民話など各種の地域文化を文献より全面的に調査し、「馬・駒」の雪形の分布との関係について検討した。具体的には、表 8-1-1 「データベース C (95 体) : 「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベース」に示した「山岳の地理的特性」の「山系の主峰・最高峰」、「地域の最高峰」、「信仰の山」、「望見地における馬に関する文化」の「街道文化」、「耕馬文化」、「馬産地」、「馬に関する信仰」について検討を行った。

表 8-1-1 データベース C (95 体) :
「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベース

項目	カテゴリー	詳細	調査手法
雪形の基本特徴	色	ポジ型,ネガ型	表 2-2-1
	形	動物(馬・駒)	
雪形の文化的表現	産業文化	農,漁,蚕,山,占(産業)	表 2-2-1
	地域文化	山名の由来,伝説の対象,古文獻・古絵図の記録,その他	
	山系の主峰	主峰である	国土地理院地区 日本山名事典
	地域の最高峰	最高峰である	国土地理院 20 万分 1 地形図 国土地理院 基準点成果等閲覧サービス 各市町村史
望見地における馬に関する文化	所在地	県,市町村	表 2-2-1
	信仰の山	山頂に神社がある, 地域における信仰の山である, 馬の関する信仰がある	国土地理院地区 各縣市町村史 日本山名事典 その他文献調査
	街道文化	街道・宿場	文献調査
	耕馬文化		文献調査
	馬産地		文献調査

2. 「馬・駒」の雪形が出現する山岳の特性についての総合考察

第3章では、雪形の形と景観特性の関係についての考察から、「馬・駒」の形には顕著な景観特性が見られることが明らかになった。具体的には、「馬・駒」の雪形 (N=95) の (77%) が平均標高 (1500m) 以上の山、 (34%) が 2000m 以上の高山 (34%) に出現し、高山の特性が明らかであることが明らかになった。山岳の種類について、 (22%) が独立峰、 (78%) が連峰・山地である。また、火山での出現率 (29%) も高いと言えることが明確になった。

本章では、「データベース C」の「山岳の地理的特性」の「山系の主峰・最高峰」、「地域の最高峰」、「信仰の山」の項目を用いて、さらに「馬・駒」の雪形が出現する山岳の特性について詳細に検討し、以下の結論を得た。

全国における「馬・駒」の雪形は 57 座の山岳から見られることが調査により明らかになった。その中で、 (28%) が望見地である「市町村の最高峰」であり、 (46%) が「山系の主峰・最高峰」であることが明らかになった。さらに、 (61%) が信仰の山であることが明らかになった。

以上のことから、総合的にみると、「馬・駒」の雪形は、「連峰」、「火山」、「高山」、「山地の主峰・最高峰」と「信仰の山」に多く出現していることが明らかになった。

3. 「馬・駒」の雪形にまつわる伝説

3.1. 「馬・駒」にまつわる民話や伝説

背景にも述べたように、第七章では、雪形を意識・活用している代表事例の殆どは雪形を民話、歌謡などに取り上げられたことが明らかになった。その中で古来より伝説が残されているものと、妙高山の「はね馬」のように、現代の創作民話などにより知名度が高まるものがある。民話にはこの土地に生息している人々の思いや文化が込められており、雪形が農事暦としての機能を失くしても、妙高山の「はね馬」のように、民話など身近な文化と結び付けることにより残っていく可能性が高いことが明らかになった。

本節では、文献調査やアンケート・ヒアリング調査に得られた情報により、「馬・駒」の雪形に関する民話などの伝説や地誌などの古文献における記録をまとめた。具体的には、以下に示す通りである。

既往研究¹⁾³⁾⁴⁾においては、秋田駒ヶ岳(1637m)、栗駒山(1627m)、焼石駒ヶ岳(1130m)⁸⁾、木曾駒ヶ岳(2956m)などの山には、「馬・駒」の雪形に関する伝説や古文献の記載が確認され、以下は、第7章のアンケート・ヒアリング調査により補足した内容である。

「八海山」

八海山(1775m)は新潟県南魚沼郡に立地している。八海山の雪形について、十日町市へのアンケート・ヒアリング調査によると、以下の伝承が残されていることが明らかになった。

八海山の雪形「放れ駒」について、「雪解け頃に八海[山]に現れる残[雪] 松之山に住む 与作は、節句に働かない掟を破って、[馬]を使って苗代かきをした 働かされた馬は怒って、与作共々空高く舞い上がり、八海山を駆けめぐって死んでしまった この馬が死んだ場所に残雪が出来ると言われる。」とあった⁹⁾。

「妙高山」と「木曾駒ヶ岳」

妙高山(2446m)は、新潟県妙高市と長野県信濃町の境に位置し、妙高連峰の主峰であり、活火山である。妙高山には、日本岩ノ傍ニ、二、三十坪程ノ画然タル窪ミアリ、木曾義仲駒繫場ト称ス、尚富士ノ頂上、聖徳太子銅馬縁起ノ類カ」という木曾義仲の馬伝説がある¹⁰⁾¹¹⁾。妙高山麓の神社に、「雪形のはねうま」を描いた絵馬があったと言われている¹⁰⁾。

また、木曾駒ヶ岳(2956m)は長野県上伊那郡宮田村と木曾郡上松町・木曾町の境に立地しており、木曾山脈の最高峰であり、山に出現する「駒」の雪形も有名である。また、

木曾駒、西駒ヶ岳とも別称されており、雪形「駒形」からの由来とされている。駒ヶ岳山頂には駒ヶ岳神社があり、木曾高原周辺には木曾駒高原付近には駒ノ湯もある。その地域は、木曾義仲にまつわる多くの伝説が残されている場所として知られている⁵⁾。木曾義仲によって、木曾馬の飼育が始められ、馬産地としての発展が促されたと言われている。また、木曾義仲が京都攻略のために挙兵した際には、木曾馬が戦馬の主力として集められたとされている¹²⁾。

「日本在来馬」とは、古くから日本で飼育されている馬で、また「日本和種」とも呼ばれている。この馬の主要な産地は、中央アルプスの山岳地帯である長野県開田高原を中心としている。開田地域では、約900年前から馬を飼育し、馬の糞を利用して作物を育て、そして馬を売ることによって生計を立ててきた。そのため、馬との関係が深く、開田地域の文化や風習にも大きな影響を与えている¹³⁾。

妙高山や木曾駒ヶ岳に「馬・駒」の形の雪形が見られるのは、木曾義仲に関する文化にも関係がある可能性があると考えられる。

4. 「馬・駒」の雪形の分布と日本における馬の文化の関係について

雪形が伝承されるには、望見地の里の文化にも深く関係していると考えられる。本節では、「馬・駒」の雪形の分布と日本における馬の文化の関係に着眼し、考察を行った。全国における馬の産地や分布については、中西¹⁴⁾によると、①馬の飼育は火山灰性の土壌が適している、②産地の位置とその流通範囲にも大きな関係があると指摘されている。本研究はそれに従い、馬の分布、馬の流通関係、馬の利用から派生した馬の信仰などから全面的に調査し、「馬・駒」の雪形の分布との関係を検討した。

具体的には、「雪形の望見地における馬に関する文化」の「耕馬文化」、「街道文化」、「馬産地」、「馬に関する信仰」について検討を行った。

4.1. 「馬・駒」の雪形の分布と耕馬文化の関係

「馬・駒」の雪形の半数以上 62%は、田の仕事の目安として使用されており、そのうち、50%が田の代掻きの目安として多用されていることが明らかになった。

日本における馬の利用について、最初に軍事用のために持ち込まれたとされている。その後、耕馬に発展し、馬は家畜として飼育されてきた。農家の人々は平時に馬を農耕用・運搬、耕耘、堆肥生産などに使役し、馬が暮らしの中で重要な役割を果たしていた。また、作業能率の面から、耕作規模が大きい場合には、牛より馬が耕作に適しているとされている¹⁴⁾¹⁵⁾。このことから、農耕の目安となる雪形には牛の形(46体)より馬の形(95体)の方が多く理由であると考えられる。

「馬・駒」の雪形が出現する山岳の分布図は、**図 8-4-1**に示す通りである。

明治前期における耕馬の分布は、**図 8-4-2**¹⁴⁾に示す。耕馬は東日本に多く分布しているが、耕牛は端的に西日本に広く分布していることが明らかであった。また、日本における最大の馬産地は、阿武隈、北上山地をはじめとする北関東を含む東北地方の火山が多い山間地帯であるとされている¹⁴⁾。第3章の考察により、「馬・駒」の雪形は火山での出現率(29%)も高いことが明確になり、そのため、**図 8-4-3**¹⁶⁾に示された全国の火山の分布地域は、耕馬の分布とほぼ一致していることが明らかになった。

以上より、「馬・駒」の雪形が出現する山岳は、阿武隈や北上山地など、馬の主要な産地であった東日本の山岳地帯に多く分布していることが明らかになった。「馬・駒」の雪形の分布は、火山の分布や耕馬の分布地域にも関係していることが明らかになった。



図 8-4-1 「馬・駒」の雪形が出現する山岳の分布図
(国土地理院白地図より作成²⁾)

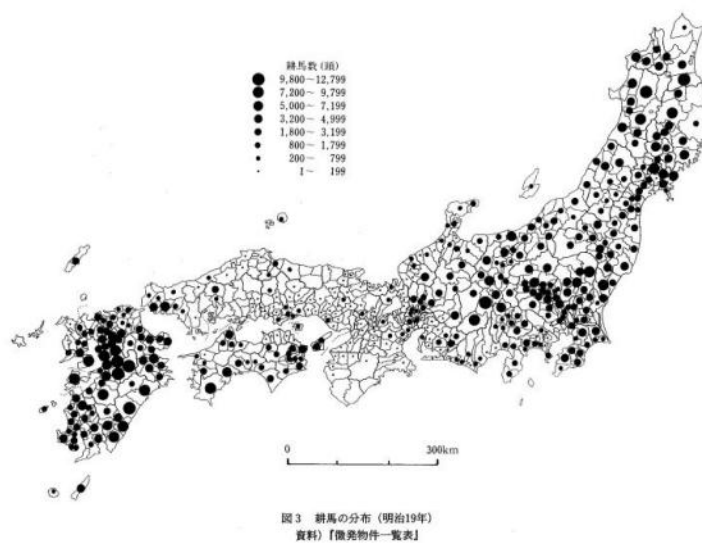


図 8-4-2 明治前期における耕馬の分布¹⁴⁾

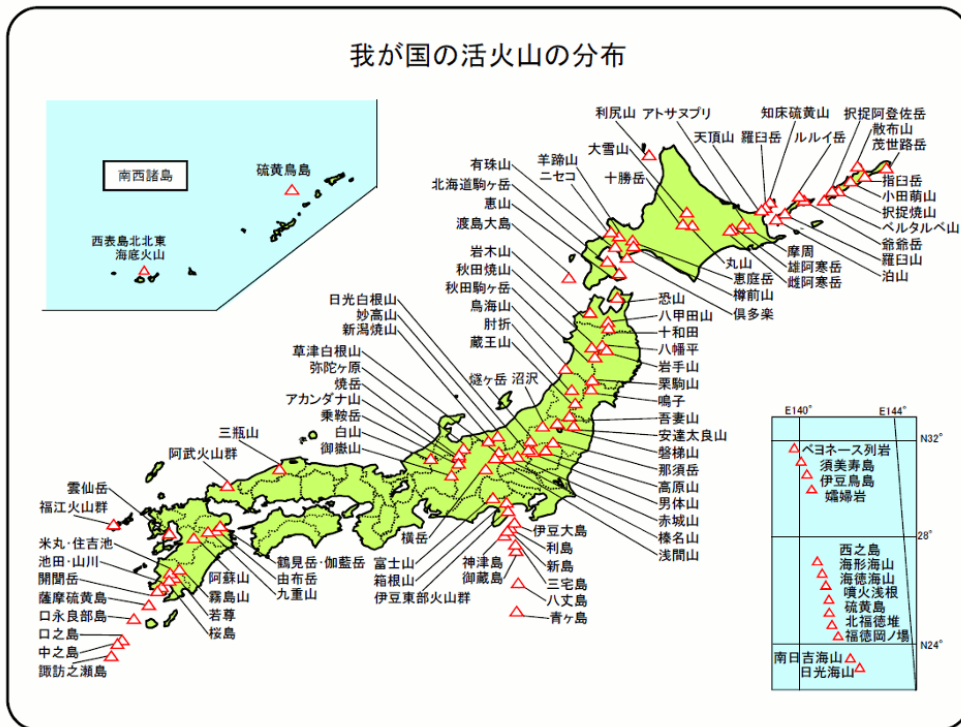


図 8-4-3 日本全国における火山の分布¹⁶⁾

4.2. 「馬・駒」の雪形の分布と馬の流通関係について

本節では、「馬・駒」の雪形の分布と馬の流通に関する文化の関係について考察を行った。

中西¹⁴⁾によると、日本で最大の馬産地は東北であるが、そこからの馬の供給範囲は関東地方及び新潟県にほぼ限られていた。中部地方には馬の産地が木曾馬をはじめとする長野県に存在することである。

また、馬の流通に関しては、室町時代から始まった交通制度で伝馬が整備された。そして、戦国時代には物流の中継地である宿場町が発展し、荷物の運搬や幕府公用の書状を運ぶために、一定数の人馬が用意された。江戸時代において、江戸と全国を結ぶ道路網の整備により、日本橋を起点とした東海道、中山道、甲州道中、日光道中、奥州道中の5街道が整備された¹⁷⁾¹⁸⁾¹⁹⁾。馬は耕作のみではなく、交通上でも流通の重要な道具として使われてきたことが明らかになった。

図 8-5-1 に示すように、「馬・駒」の雪形の望見地の多くは、五街道の奥州街道、木曾街道などの本街道と主要な脇街道の羽州街道、北国街道、三国街道、会津街道などが経由された地域であることが明らかになった。

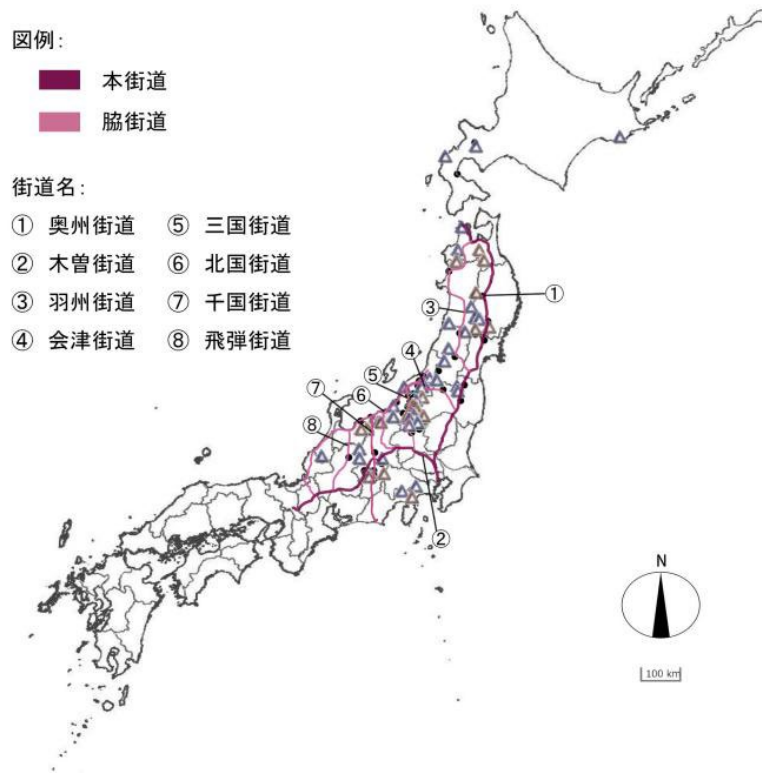


図8-5-1 「馬・駒」の雪形望見地と経由された街道
 (国土地理院白地図より作成²⁾)

4.3. 「馬・駒」の雪形の分布と馬の信仰について

本節では、「馬・駒」の雪形の分布と馬の信仰文化の関係について考察を行った。

馬の産地であった東日本では、馬に関する信仰が盛んでおり、特に駒形神社が祀られている地域が多い。駒形神社は1500年ほど前、焼石連峰の駒ヶ岳山頂に祀られた。祭神の駒形神は馬の守護神とされ、東日本の各地に勧請され信仰されている²⁰⁾。

本章の第3節では、秋田駒ヶ岳(1637m)、栗駒山(1627m)、焼石駒ヶ岳(1130m)、木曾駒ヶ岳(2956m)など、民話の対象となった「馬・駒」の雪形が出現する山岳の多くは、駒形神社や駒ヶ岳神社が祀られていることが明らかになった。特に岩手県をはじめとする馬の主要な産地である東北地方では、「馬・駒」の雪形から名付けられた栗駒山、東稻山(駒形山)、秋田駒ヶ岳や会津駒ヶ岳などには駒形神社が祀られていることが分かった³⁾⁴²⁾。

馬に関する信仰については、日本では最も熟知されているのは「おしらさま」である。かつて馬の産地であった東北地方では「おしらさま(農耕・養蚕・馬の神様)」が祀られている地域が多い²¹⁾。「おしらさま」の原型である「蚕馬」は養蚕の神とされており、中国からの由来と言われている。また、馬娘婚姻譚を研究した樋口、陶²³⁾の訳文を引用すると、中国では戦国時代に荀況が記した『荀子 賦篇』には、蚕の身体は柔軟で頭は馬に似ていると記されている。『搜神記・女化蚕』では、「むかし、ある大官が遠方に出征し、娘がひとり家に残された。家には、牡馬がいて、娘は大切に世話していたが、父親が恋しくて、馬にむかって戯れにいった。「お父様を連れて帰ったら、お嫁さんになるよ」馬は、この言葉を聞くと、手綱を引きちぎり、父親のところに行った。父親は驚き喜んだが、馬の悲しそうな鳴き声を聞き、「家に異変がおこたのではないか」と急いで馬を走らせて帰った。そして畜生の身ではあるが、たいした真心だと関心して、秣をあたえたが馬は見向きもしない。ただ、娘を見ては、喜んだり怒ったりして身をふるわせ、足を踏み鳴らす。これがいつまでも続くので、不審に思った父親が尋ねると、娘は馬との約束を打ち明けた。父親は「家門の恥になる」といい、馬を射殺して、皮をはぎ、庭に干した。ある日、娘が庭で「畜生の分際で人間を嫁にしようなどとするから、皮をはがれるのだ」と、ふざけて馬の皮を足でふむと、馬の皮は立ち上がり、娘を包んで天に飛び去った。数日後、庭の大木の枝に娘と馬の皮が発見された。おいずれも蚕と化して、糸をはいていた。その作る繭は普通の蚕とは違って糸の捲き方が厚く大きく、隣の女房が枝からおろして育てたところ、通常の繭の数倍も糸が取れたという。そこで、その木は「喪」と同じ音をもつ「桑」となづけられた。その後、人々は競ってこれを育て、いまに至っている。」という記述がある。

また、『太平広記』では、『搜神記』とやや異なるが、類似な蚕馬の伝説も記述されている。

日本において、岩手県立博物館学芸員の近藤によると、「馬は家畜として重要な存在で、曲がり屋で一つ屋根の下に人間と馬が暮らしたように大切に育てられてきました。蚕もまた、人間が飼いならした虫で、家畜のように一頭、二頭と数え大事に育てたそうです。蚕の背の模様は半月紋と呼びますが、見ようによっては馬の蹄にも見えるので馬蹄紋と呼ぶこともあります。蚕は脱皮を4回繰り返して繭を作り始める頃になると、胴体上部を持ち上げて静止し、糸を吐く準備を始めます。この時の様子が馬の姿形に似ていることから、身近な存在である馬が蚕と結びついたのであるとも言われています。」とされている²⁴⁾。また、民俗学者柳田国男の著作『遠野物語・六十九話』の中で、『搜神記』と類似な伝説が記述されている。具体的には、「昔ある処に貧しき娘あり。妻はなくて美しき娘あり。また一匹の馬を養ふ。娘この馬を愛して夜になれば厩舎に行きて寝ね、ついに馬と夫婦に成れり。ある夜父此事を知りて、其次の日娘に知らせず、馬を連れ出して桑の木につり下げて殺したり。その夜娘は馬の居らぬより父にたずねてこの事をしり、驚き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首にすがりて泣きみたしを、父は之を悪みて斧を以て馬の首を切り落せしに、忽ち娘はその首に乗りたるまま天に昇りて去れり。オシラサマと云うはこの時より成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の枝にてその神の像をつくる。」である²⁵⁾。東北地方は馬の産地として知られ、その地域で古くから伝わるオシラサマ信仰は、『遠野物語』によって広く世に知られるようになったと言われている。かつて絹産地であった山形県鶴岡市では、月山の「馬雪」が見られ、養蚕業の目安として使われていた^{7) 26)}。

また、青森県では、「戸」が付けられた地名は昔から馬の産地であった。七戸町から望める八甲田山の外輪山の小岳も昔から「駒ヶ岳」と俗称され、白い馬の雪形からの由来であるとされている²⁷⁾。それらの馬の産地である地域は、馬に対する意識が強いことから、山に現れる「馬・駒」の雪形は信仰の対象になったり、神聖視とされていたのではないかと考えられる。

5. まとめ

本章では、「馬・駒」の雪形と日本における馬の文化の関係について考察した。

以上のことから、「馬・駒」の雪形の分布は、望見地である地域における馬の文化と大きく関係があったことが明らかになった。馬の耕作や馬産業、宿場文化が盛んであった地域では、馬は生活と交通用具として利用され、地域産業と深く結びついた。また、日常生活で常に馬を目にすることから、馬への意識も高く、信仰の対象にもなっていた。山岳信仰が盛んな日本人にとって、身近な山岳に現れる「馬・駒」の形の雪形も、農耕の神の化身として崇められたのではないかと考えられる。

「馬・駒」の雪形は、多様の文化的価値が見られることと、縁起がいいという認識が広まっていることから、今後は雪形の保護・継承において、全国の「馬・駒」が先行する可能性があると考えられる。

参考文献

「参考文献」

- 1) 編纂委員会編：全国駒・馬の雪形, 編纂委員会, 2009.
- 2) 国土地理院編：国土地理院地図.
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 3) 岩科小一郎：山の民俗, pp. 200-240, 岩崎美術社, 1968.
- 4) 田淵行男：山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 5) 徳久球雄, 石井光造, 武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- 6) 岩科小一郎：山の民俗, pp. 200-240, 岩崎美術社, 1968.
- 7) 田淵行男：山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 8) 奥州市埋蔵文化財センターHP：雪形と駒形神社
(http://www.oshu-bunka.or.jp/maibun/publics/index/117/detail=1/b_id=653/r_id=197/)
- 9) 小山直嗣, 村山富士子：日本の伝説 41 越後の伝説, pp. 5, 角川書店, 1979.
- 10) 小島正巳：続・妙高火山の文化史, pp. 81-84, 2016.
- 11) 大平晟：妙高紀行, 山岳 Vol. 1, No. 1, pp. 101-114,
- 12) 高校農業 木曾馬の飼育と活用HP：木曾馬の歴史.
(https://gakuen.gifu-net.ed.jp/~contents/kou_nougyou/kiso/1_1.html)
- 13) 日本遺産 木曾路HP：構成文化財 木曾馬.
(<http://www.kisoji-isan.com/heritage/11.html>)
- 14) 中西僚太郎：明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について, 歴史地理学, pp. 2-22, Vol. 169, 1994.
- 15) 小佐々学：日本在来馬と西洋馬-獣医療の進展と日欧獣医学交流史-, 日獣会誌, pp. 419-426, Vol. 64, 2011.
- 16) 気象庁HP：活火山とは.
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/katsukazan_toha/katsukazan_toha.html)
- 17) 尾崎孝弘：日本在来馬の歴史の変遷と現状, 鹿大史学 Vol. 59, pp. 15-28, 2012.
- 18) NHK for School：五街道.
(https://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005310087_00000)
- 19) 国土交通省 HP：道の歴史, 近世の道 五街道—諸道の性格.
(<https://www.mlit.go.jp/road/michi-re/3-3.htm>)
- 20) JapanKnowledge 電子版：駒形神社, 日本大百科全書, 小学館.
(<https://japanknowledge.com>)
- 21) 各市町村史 (表 2-2-4) .
- 22) 日本伝承大鑑：遠野伝承園 御蚕神堂.
(<https://japanmystery.com/iwate/osirasama.html>)
- 23) 樋口淳, 陶雪迎：馬娘婚姻譚の日中比較, 専修大学人文科学研究所月報, pp. 1-18, Vol. 196, 2001.
- 24) 近藤良子：蚕と猫と馬～養蚕をめぐる動物たち～岩手県立博物館だより, pp. 6-7, No. 153, 2017.
- 25) 柳田国男：遠野物語, pp. 54-56, 1910.
- 26) 日本遺産：サムライゆかりのシルク.
(<https://samurai-yukarino-silk.jp/>)
- 27) 室谷洋司：八甲田山の雪形, 青山県立郷土館土曜セミナー, 2011.
(<https://www.slideshare.net/aokyodokan/ss-8140393>)

【表 3-2-1 データベース C に用いた文献】

- 表 2-2-1 (第 2 章を参照) .
- 国土地理院編：国土地理院地図.
(<https://maps.gsi.go.jp/>).
- 徳久球雄, 石井光造, 武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- 国土地理院編：国土地理院電子地形図 20 万.
([https:// www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html](https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html))
- 国土地理院編： 基準点成果等閲覧サービス.
(<https://sokuseikagis1.gsi.go.jp/top.html>)
- 各市町村史参照 (表 2-2-4).
- 児玉幸多編：宿場 (日本史小百科), 東京堂, 1997.
- 五街道の旅：(<http://home.b05.itscom.net/kaidou/index.html>)
- NHK for School：五街道.
(https://www2.nhk.or.jp/school/watch/clip/?das_id=D0005310087_00000&p=box)
- 中西僚太郎：明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について, 歴史地理学, pp. 2-22, Vol. 169, 1994.
- 小佐々学：日本在来馬と西洋馬-獣医療の進展と日欧獣医学交流史-, 日獣会誌, pp. 419-426, Vol. 64, 2011.
- 尾崎孝弘：日本在来馬の歴史的変遷と現状, 鹿大史学 Vol. 59, pp. 15-28, 2012.

第九章 雪形に関する価値認識に関する総合考察

1. 研究成果の概要

本研究では、雪形の特性ともいべき民族性をデータベースとして構成し、地理的分析と現代における保護・継承の可能性を活用事例についての検討を通して、かつては農事暦との関係性を強く言われてきた雪形の価値について改めて検討し、日本特有の風致景観及び地域文化としての特性と今後保全・継承の価値づけについて試みた。

以下では、本研究で得られた知見を総括する。研究成果の詳細については、各章によるものとする。

まず、第1章では、「雪形」の定義とかつて農事暦としての利用の歴史、現代における現状や課題、保存・継承の必要性などを背景として、研究の目的を提示した。

「日本全国の雪形とその分布の特徴の把握(第2章)」

第2章と第3章では、雪形の諸特徴について調査・整理した。

第2章では、雪形に関する記載がある図書9冊、報告・記事25報の資料を整理し、雪形の諸特徴を把握するための基礎的資料を作成した。また、それらの資料に記述された雪形全てを対象とした全国の雪形とその分布の特徴を明らかにした。その結果、全国における計202座の山、691体の雪形を抽出し、計20県、134自治体が望見地であることが明らかになった。

また、雪形の分布の特徴は、①地理関係、②気候関係、③山岳関係から考察し、雪形の分布図を作成した。その結果、雪形の望見地の殆どは日本海沿岸の特別豪雪地帯の農耕文化が盛んであった地域に位置しており、広域性と普遍性が見られることが明らかになった。

「日本全国を対象とした雪形の諸特徴についての調査及びデータベースの構築(第3章)」

第3章では、雪形の景観・産業・文化特性を系統的について考察するため、異なる視点から雪形の諸特徴に関する評価項目を設定し、3つのデータベースを構築した。

①データベースA：全国における雪形(631体)の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベース

データベースAは、第4章と第5章における全国の雪形の景観特性及び産業・文化特性を考察し、さらにその間の相関性を明らかにするため、雪形の伝承を有する地域の地形条件、地理条件、また人の産業行為など雪形の伝承を有する地域の空間の特性を表す全ての要素に着眼したものである。対象は、第2章で抽出された691体の雪形の中で、望見

地が明確に記載されている 631 体の雪形である。内容として、はじめに雪形の色、形などの「基本特徴」や営みに関する産業行為の目安としての利用などの産業文化、山名や伝説の由来、地誌・紀行文における記録などの地域文化などの「文化的表現」、次に雪形の景観特性に直接影響する要因としての視対象である雪形が出現する山の類型、標高などの山岳の「地理的特性」、雪形の望見地である地域の地形、位置づけなどの望見地の里の「立地特性」などの項目を用いて雪形データベースを構築した。その結果、データベース A は、4 項目・13 カテゴリーとなった。

②データベース B：「文化的価値」を有する雪形の特性分析に関するデータベース (150 体)

データベース B は、第 6 章と第 7 章における「文化的価値」を有する 150 体の雪形の特性と現在の活用について考察するための評価項目として位置づけた。評価項目として、かつて雪形が認識されるには信仰の山など霊山や名山に関連しており、またこれからの保全・継承に関しては、知名度の高い山に出現する雪形は識別されやすく価値が見られると考えたため、「山岳の知名度」を評価項目として設定した。またそれらの雪形の眺望特性に影響する要素として、望見地の地形の他、山岳への眺望関係にも大きく影響されると考えたため、「雪形と望見地の距離」や「雪形の望見地の仰角」も評価項目とした。その結果、データベース B は、6 項目・17 カテゴリーにまとめた。

③データベース C：「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベース (95 体)

第 4 章～第 7 章における調査により、全国の雪形の中では、「馬・駒」の雪形は数が多いことと、山名になったもの、現在まで認識・活用されているものには「馬・駒」の形が多いことと、さらに観光・景観など各種計画に取り上げられているものの殆どが「馬・駒」であることから、文化的な意味としては意義深いことが明らかになった。今後、雪形文化を保全・継承するには、「馬・駒」の雪形が残っていく可能性が非常に高いと考えたため、データベース C は、「馬・駒」の雪形と関連する地域文化について検討するための評価項目として位置づけた。「馬・駒」の雪形と馬に関する文化との関係は、評価項目として、主に「望見地における馬に関する文化」の「街道文化」、「耕馬文化」、「馬産地」、「馬に関する信仰」に着目した。その結果、データベース C は、4 項目・15 カテゴリーとなった。

「データベース A:全国における雪形(631 体)の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベースに関する考察(第 4 章、第 5 章)」

第 4 章～第 5 章は、データベース A の評価項目による全国における雪形 (631 体) の景観・産業・文化特性に関する考察である。

第 4 章では、はじめに全国の雪形 (631 体) の景観特性を明確にするために、雪形が出現する山岳の地理的特性の標高、類型、望見地の立地特性の地形、位置づけの 4 カテゴリー・18 個の詳細項目を用いて数量化Ⅲ類により分析し、雪形の景観特性を明らかにした。次に数量化Ⅲ類の結果を用いて「k-means」法により全国の雪形を 6 つのタイプに分類した。

各タイプの特徴に関する考察については、「タイプ A 高山独立峰型」は高山型の独立峰に多く出現し、独立峰は単独で聳えるため、雪形が識別されやすく、平野地形から広域で見られることが明確になった。「タイプ B 高山連峰型」は高山型の連峰に多く出現し、内陸地域の盆地地形から見られ、パノラマのような雪形の風景が望見できることが特徴である。「タイプ C 内陸高原・高地主要型」は 6 型の中で高原・高地と 3000m 以上の特高の山の特性が最も顕著な類型であり、一部は山の稜線から向こうの山を眺望する時のみ望まれるものもあり、奇観として記録されているものが多いことが明らかになった。「タイプ D 沿海丘陵主要型」は沿海地域の丘陵地形から見られ、丘陵地帯では同じ雪形が見えても、村落間では雪形が見える角度が異なることにより、形としての認識、呼称や産業行為の目安としての伝承が異なる場合が多いことが特徴である。「タイプ E 低山連峰型」は沿海地域の低山型の連峰に多く出現し、持続時間が比較的短いことが明らかになった。「タイプ F 内陸谷間主要型」は内陸地域の谷間地形から見られ、望見範囲がかなり限られ、また殆どが高山に囲まれている谷間地形では温度が低く、雪形の持続時間は比較的長いから、同じ山の雪形を見ながら農事の手順を決めることが多いことが明らかになった。

第 5 章では、以下の内容と景観特性(山岳の地理的特性、望見地の立地特性)の関係を考察し、全国における雪形 (631 体) の産業・文化特性を明らかにした。具体的には、①「農業」、「漁業」、「山仕事」、「養蚕業」、「産業占い」などの産業文化、②「山名の由来」、「伝説の対象」、「地誌・紀行文における記録」などの地域文化、③雪形の「色」、「形」である。さらに④雪形の「形」と十二支文化の関係を明らかにした。手法として、はじめに第 4 章の考察結果を踏まえて、雪形の基本特徴、産業文化と地域文化の詳細項目を加えてクロス集計で算出し、各類型の産業・文化特性を把握した。次

に、雪形の基本特徴、産業文化と地域文化の詳細項目の総数と景観特性(山岳の地理的特性、望見地の立地特性)の関係についてクロス集計で算出し、雪形の産業・文化特性について総合的に考察を行った。

第4章と第5章の考察を通して、本研究で得た新しい知見は以下のようである。

a. 産業・地域文化と景観特性(山岳の地理的特性、望見地の立地特性)の関係

「農業」

最初は農業との関係については、田仕事に関するものと畑仕事に関するものを分けて特性について考察したものはなかった。今回の研究では、田仕事に関する雪形と畑仕事に関する雪形は山岳の標高や望見地の位置づけによって特徴が見られることが明らかになった。田仕事の目安となった雪形は、標高の比較的に低い山に出現し、沿海地域の平野地形などで多く望見されることが明らかになった。一方、畑仕事に関する雪形は田仕事より高山に見られ、また雪形の持続時間が長いため、多種の作物の目安が確認された。特に内陸地域では畑仕事に関する雪形の特徴が顕著であり、10種以上の作物の育成の目安として利用されていることが明らかになった。

「漁業」

雪形には農事暦のみならず、海水漁業や淡水漁業と関係があることと、されにそれらの雪形には顕著な景観特性が見られることが明らかになった。海水漁業に関する雪形は海上から望めるものが多いことと500m以下の山に出現する雪形のすべてが海水漁業に関するものであることが明らかになった。また、岬から見られる雪形はかなり珍しいであり、雪形研究では貴重であることが明らかになった。さらに、淡水漁業に関する雪形は特に稀少であり、すべて独立峰に出現していることが明らかになった。漁業に関する雪形は独立峰に多く見られることも特徴的な景観特性であることも明確になった。

「養蚕業」

養蚕業に関する雪形はすべて桑の栽培に適している水はけのよい且つ基盤が安定した盆地や丘陵、谷間など山に囲まれる地形から見られることが明らかになった。

「山仕事」

山仕事に関する雪形は山への意識が高い谷間地形から多く見られ、また、山菜採りなどの山仕事をしやすい低山に多く出現することが明らかになった。

「産業占い」

産業占いに関する雪形は独立峰と火山に多く出現していることが明らかになった。ま

た、沿海地域では豊漁占いに関する雪形も確認された。

「地域文化」

山名の由来、伝説の対象、地誌・紀行文に記録されている雪形の景観特性については、内陸地域、特に「2000m」以上の高山と関係していることが明らかになった。

b. 雪形の基本特徴(色、形)と景観特性(山岳の地理的特性、望見地の立地特性)の関係

「色」

「ポジ型」については、沿海地域、「500～1000m」などの比較的到低い山に関係していることが明確になった。また、漁業と養蚕業は、「ポジ型」の雪形と明らかな相関性が見られることが明らかになった。

「ネガ型」については、内陸地域、「2000m以上」の高山型連峰に関係していることが明らかになった。また、高山は融雪時間が遅いため雪形が見られる時間が長く、「山名の由来」、「伝説の対象」、「地誌・紀行文に記載されている」など地域文化として伝承されてきた雪形には「ネガ型」の方が多いたことが明らかになった。さらに、人物に関する雪形は「ポジ型」より「ネガ型」が多いことが明らかになった。

「形」

雪形の形について、人物、動物(馬)、魚類、道具の4種類が景観特性と顕著な関係性が見られることが明らかになった。

人物の形は平均標高(1500m)以上の山に出現し、特に「2500～3000m」の高山での出現率が比較的高いことと「ネガ型」と類似していることが明らかになった。そのため、殆どの形は「ネガ型」より「ポジ型」の方がはるかに多いが、人物の形は「ポジ型」より「ネガ型」の方が多く見られることが明らかになった。その中で、「僧」や「入道」など信仰に関する人物の形の多くは「ネガ型」であることが明らかになった。また、産業占いに関する人物は僧、釈迦など信仰の形が多いことが明確になった。また、富山県僧ヶ岳の「虚無僧」や長野県常念岳の「常念坊」をはじめ、山名の由来や伝説の対象、または古文献に記述されているなど地域文化に関する雪形には入道、小僧など信仰に関する人物の形が多く見られることも明らかになった。

馬・駒の形の大部分は平均標高(1500m)以上の山に出現しており、特に2000m以上の高山から多く見られることが明らかである。

魚類の形は、漁業に関する雪形の特性と類似しており、沿海地域と平野地形から多く見られることが明らかになった。また、低山での出現率も高いと言える。さらに、沿海

地域では、「タツノオトシゴ」、「ヨツリバリエキ（魚釣針雪）」など海水魚や漁業に関する珍しい形が雪形になっていることが明らかになった。中間地域と内陸地域など海から離れている地域では、淡水魚などの形が主であることも明確になった。

道具の形について、沿海地域では、農耕用の道具の他、「船」、「錨」、「魚釣針」など漁業に関わる道具の形が見られることが明らかになった。

c. 動物の形と十二支文化の関係

雪形の形の中で、動物の形は、十二支文化と関係していることが明らかになった。

十二支文化の中で、「子（鼠）」は水を司る干支であり、また、龍は水の神として、「鼠」と「龍」の形が用水占いと関係していることが明確になった。

また、「牛」と「犬」の形の中では、日本独自の伝説などの文化などに関する形が見られることも明確になった。「牛」の形の雪形には、「寝牛」や「牛天神」など特殊な形が確認され、それらの雪形は牛と天満天神の伝説などの文化と関係していることが推測される。「犬」の形の中では、十二支文化だけでなく、日本の幻想的な生物「狛犬（アマイン・コマイン）」と関係している形があることが明確になった。

「虎」、「羊」、「猪」の雪形は数が非常に少なく、また産業の目安として使われてなかったことが明確になった。その原因について、「虎」、「羊」はかつて日本に存在しない生物であり、日本人にとって馴染みの薄いものであったことではないかと思われる。また、干支の猪はかつての農耕社会から、イノシシの侵入による田畑や家屋などの深刻な被害を受け、農民にとってイノシシは干支文化の亥の持つ意味のほど素晴らしいものではないことから、猪の形をしている雪形の数は少なく、また農事暦として使用されない原因であると考えられる。

「データベース B：「文化的価値」を有する雪形の特性分析に関するデータベース（150 体）に関する考察(第 6 章、第 7 章)」

第 6 章では、「文化的価値を有する雪形」として判断された 107 座の山で 150 体の雪形は古文書や市町村史に多く記録が残されている原因と、現在まで伝承されてきた原因について、雪形の特性について考察した。分析には、まず数量化Ⅲ類により「文化的価値を有する雪形」（150 体）が出現する山岳の特性と眺望特性を分析し、次に数量化Ⅲ類の結果を用いて階層分析「ユークリッド・ワード法」により類型化した。

その結果、「文化的価値を有する雪形」（150 体）が出現する山岳の特性は、「I 富士類

似型」、「Ⅱ地方連峰型」、「Ⅲ 盆地・高原高地主要型」、の3つのタイプに分類した。

次に、「文化的価値を有する雪形」(150 体)の眺望特性は、「Ⅰ丘陵主要型」、「Ⅱ平野主要型」、「Ⅲ盆地・高原高地主要型」、「Ⅳ 盆地・谷間主要型」、の4つのタイプに分類した。

第7章では、「文化的価値を有する雪形」(150 体)の望見地である地方自治体に対する調査から景観・文化資源としての雪形の可能性を文献調査のもとに、それらの雪形の望見地である68自治体に対する雪形への住民意識と利活用の現状についてアンケート及びヒアリング調査を実施した。その結果、52自治体から回答を得た(回答率76%)。

アンケート・ヒアリング調査から、文化的景観指定の意向を持つ自治体は、1市町村(妙高市)のみであったことが明らかになった。妙高市は『妙高市歴史文化基本構想』(2018)で「山の字」と「跳ね馬」を市の文化財として位置づける等景観的価値づけが実施されていることが明らかになった。また、景観や観光など各種計画に雪形が取り上げられているのは8自治体であることも明確になった。さらに、栗原市、福島市、勝山市、魚津市、妙高市、上越市、駒ヶ根市、安曇野市、大町市の9自治体は、多面的に雪形を意識し、活用していることが分かった。それらの代表事例の殆どは、「Ⅰ富士類似型」や「Ⅲ盆地・高原高地主要型」など知名度の高い山に出現し、「Ⅲ盆地・高原高地主要型」など盆地など望見範囲が広い地形で見られ、古くから知られている雪形に限られることが明らかになった。それらの自治体では雪形に対するイベントの開催や地域新聞の紹介など積極的な情報発信などがあり、景観価値の認識が強いことも明らかになった。

「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の関係の把握(第8章)

第4章と第5章における考察では、「馬・駒」の雪形は数が多く、山名の由来になっているものが多いことが明らかになった。また、第6章と第7章における考察では、「馬・駒」の雪形は各種計画に反映されているものが多いことと、現代まで認識されているものが多いことから、価値認識がされていることが明らかになった。第8章では、既往研究を踏まえて、データベースに関する考察により、「馬・駒」の雪形の分布は、耕馬に限らず、馬産地、馬の流通、また「おしらさま」や「駒形信仰」などの馬に関する信仰にも関係があることが明らかになった。以上の分析結果から、「馬・駒」の雪形がより価値のあるものであることが明確になった。

2. 総合考察

各章の考察により、雪形に関する価値認識は以下のようにまとめた。

第2章の考察では、雪形は、豪雪地帯共通な文化であり、広域性が見られることから、桜の開花のように、季節を告げる信号として伝承される可能性が高いと思われる。

第4章と第5章の考察では、雪形には農事暦としての価値のみならず、海水漁業を含め淡水漁業などの漁業や養蚕業など古来伝承されてきた営みや、山名の由来や伝説など古くからの地域文化と密接に関わることが調査より明らかになり、価値が高まったと思われる。また、漁業と養蚕業に関する雪形は古文献に記述されているものと伝説や信仰に関わるものが見られることから、農事暦として伝承されてきた雪形と同様に重要性が見られることが明らかになった。

また、雪形には広域性がある一方、それぞれの雪形の形が唯一無二であることや、山の地理条件や地域の立地条件によって見られる雪形とその伝承が異なることにより、地域の独自の景観・文化を形成しているという価値も見られる。雪形が農事暦として利用されるようになった背景には、科学的な見解から見ると、雪形の融雪状況が農業用水量と一致していることとして認識されている。一方、雪形が農事暦として利用されるようになる以前から、山麓に定住している農民たちは、雪山に出現するこの図形に最初に美を感じて、さらに山の神様からの伝言としての農耕の信号の意義を与えて、さらに長い冬がようやく終わる喜びを家族や村落間で伝承してきたのではないかと考えられる。北海道など漁業が主産業である沿海地域では、魚の形の雪形が多く見られることや、標高の高い山からは僧や入道など人物の形が多く見られることなど、雪形の形に対する認識は眺望する主体の感受や地域の文化によって捉え方が異なることが明らかになった。雪形は、山をキャンバスにして、この土地における独自の地形や立地によって作り出した空間の中での日常の風景が浮世絵のように捉えられたものであり、農耕時代の知恵だけでなく、まさに地域の農民や漁民、その他の営みを従事する人が創出する芸術と言える。このような身近なものの図形を使って自然に反映したアートは、地域住民にとっては親しみやすいものである。また、地域独自の文化や風景として、広く知ってもらうことや地域活性化につながる可能性も見られる。

さらに、雪形は一種の自然風景として、山の地形や気候が変わらないうちに毎年必ず出現する自然現象であるが、その景観に与える文化的意味も時代に応じて眺望する主体の人の思いや見方による変えてゆくものであると考えられる。人力による農業や漁業、

養蚕業など古くから伝承されてきた営みは機械や人工知能の発展などにより消失する可能性があるが、寒冷地にしか生育できない作物の育成に関する雪形も見られることなど、雪形は人類が自然を克服し利用し、この土地の産業に関する歴史を後世に伝える語り手として価値があると考えられる。雪形は、自然と人間が協調して作り出される美しい風景であり、日本の豊かな文化の一部として、後世に伝えるべき価値があることが明確になった。

第6章と第7章の考察では、多面的に活用されている雪形は文献等が多いこと、それらの雪形はすべて民話、歌謡などが残っていることが明らかになった。さらには「見える」ということが、季節感や美しさ、不思議さ、感動などを住民や来訪者に与え、結果として、その地域の雪形が、多くの世代、多くの人々に愛される存在になっていると思われる。雪形を意識・活用している9自治体では、雪形を有用な資源として活用していることから、妙高山の「はね馬」のように、地域の民話など身近な文化として、または地域の営みを支える存在となりえる資源として残っていく価値があると思われる。今後は、妙高山の雪形「はね馬」や「山の字」のように、より多くの雪形を市の文化的景観として位置づけられることが求められている。また、京都五山の送り火のように、季節の風物詩として、地域の文化や伝統を伝える貴重な文化遺産として、さらに地域のアイデンティティとして活用される可能性が高いと思われる。

また、かつての農耕社会では、雪形を眺望する人は営みを従事する農民や漁民などであったが、現代においては町の住民、登山者、観光客などが雪形を眺めようになり、主体が変わっていくことが明らかになった。かつては農作業に欠かせない気温や水源を測るための農事暦として、雪形に意義があった。しかし、現代においては自然風景としての意義が高くなっており、今後は雪形の「自然美」を重視する必要であると考えられる。しかし、雪形に関する文献中では、「種蒔き爺さん」、「馬鋤」など現代に存在しないものや、現在の若い人にとって馴染みのない形や形として識別されにくいものが多く記載されている。調査によれば、一部の地域では「雪形探し」などの民間の活動が行われており、地域において古くから伝承される雪形を識別するだけでなく、分かりやすい形を持つ「新雪形」を創り出すこともある。今後、地域の産業とともに受け継がれてきた歴史を、新たな地域資源として継承していくためには、事例のように実際に雪形を見る機会を増やし、その価値を多くの若年層に伝えていく仕組みが必要とされている。

第5章で述べられているように、十二支は中国起源の干支の一つで、日本でも古くから使われており、その文化は雪形の形状にも反映されていることが明らかになった。第8

章では、馬は日本の営みや交通などの歴史・文化において重要な存在であり、馬に関する文化は「馬・駒」の雪形の分布と関係していることが明らかになった。そのため、地域の雪形を観察することで、その地域の文化や生活に触れることができるという点も、その価値を高める一因となっている。雪形は地域の文化と深く結びついている景観や文化資源として、その価値が大きいと考えられる。

上記のように、雪形は季節によって姿が変わっていく現象であり、豪雪地帯のみで発生する風景であることが明らかになった。また、雪形は地域特有の景観であり、地域の気候や地形、生活様式などとも密接に関係しており、その地域に根ざした文化でもあることが明らかになった。これから雪形を理解することが単なる農事暦の役割などの懐古主義にこだわらずに、自然環境や地域文化、景観美の重要性を認識することに繋がる可能性が示唆されている。これは、雪形が持つ多面的な価値を強調するとともに、景観資源、観光デザイン、地域創生などなどに役立つ可能性があると考えられる。今後は、景観資源としての持続可能性にも配慮することが必要であり、雪形の価値を反映した政策が実現されることが望ましい。

加えて、世界中には雪山が多数存在しており、また一部の国や研究者は雪形を注目し始めることもあり、日本を中心として、雪形の景観美やこれまでとこれからの伝承を世界中に伝達する必要があると思われる。

3. 今後の課題と展望

雪形は本来、営みと密接に繋がる自然風景であり、農事暦の役割を無くした現代社会において、伝承が急速に減少し、文献に記録されているものでも確認できない場合が多い。また、気候変動による出現時期が文献に記載されている時期と一致しないことが多くなっている。

また、第7章における日本特有の農耕などの営みの知恵である雪形を今後、望見地である各市町村における雪形を地域の風致景観・文化資源としての認識及び活用に関する意識調査においては、雪形に関する位置づけは、公共においては、「景観計画」等に掲示されるにとどまっておき、むしろ、観光資源として、雪形の名称や形態のみが一人歩きする傾向が高いことと、雪形を見ることができる時期や場所が限定されていることなどにより全国の人々の認知度はそれ程高くないことが現状である。さらに、前節の総合考察に述べたように、雪形には、「種蒔き爺さん」、「馬鋤」など現代に存在しないものや、現在の若い人にとって馴染みのない形や形として識別されにくいものが多い。雪形には多面的な価値が見られるが、上記の要因により、雪形の保護・継承については現段階ではまだ困難とされている。

そこで、本研究の成果を踏まえ、今後雪形を保護・継承するための提言をいくつか行う。

例えば、雪形の出現時期をライブカメラ等により定期・定点に観測し、全国の雪形の適期を知らせる雪形前線マップを作成する。

雪形観察会などの地域活動を通して、古くから伝承されてきた雪形を識別する他、地元の人にとって「美を感じる雪形」、「形が面白い雪形」、「思い出に残る雪形」など「新雪形」を創出する。

雪形が最多数である新潟県を中心に、昔の農耕風景及び各地の美しい春景色と共に映している雪形の写真を山岳家や写真家、地域の住民等により収集し、定期的に雪形巡回写真展などを開催する。

全国範囲で雪形に関する創作作品や宣伝物を集める雪形フェアを定期的に開催する。

京都五山の送り火のように、「雪形景観」を鑑賞するための視点場を整備する。

雪形が最多数である新潟県を中心に、棚田のような全国の雪形のある自治体のネットワークを形成し、互いの取組を学び、伝承していくための取組を進める。また、地域住民や関係者との連携やコミュニケーションも不可欠である。

雪形に関する情報は観光課・生涯学習課・地方博物館等の組織に整えられてないことから、これから情報発信の体制を整える。

これらのことから、これから雪形に関して正確な知見を把握し、それらを踏まえた地域学習などを通じて、新たな価値づけを行い、日本の地形と気象条件から北海道から四国までの広範囲でかつて見られた雪形について、より多くの地域で伝承される一助にこの研究がなれば幸いである。

付録

参考文献

第一章

- 1) 新村出編：広辞苑 第三版, pp. 2441, 岩波書店, 1982.
- 2) 作田哲啓, 赤坂信：吾妻小富士の雪形—地域限定・期間限定の自然風景—に関する一考察, ランドスケープ研究 Vol. 70, No. 4, pp. 312-319, 2007.
- 3) 安曇野市 HP：観光案内 雪形.
(<https://www.city.azumino.ngano.jp/soshiki/32/10316.html>)
- 4) 宮野典夫：「代かきのころ」, 「雪形—山麓の民俗—」, 山と博物館 Vol. 53, No. 3, 市立大町山岳博物館, 2008.
- 5) 室谷洋司：ふるさと雪形探訪Ⅲ 日本—雪形の棲む岩木山, やぶなべ会報, pp. 42-47, 2006.
- 6) JapanKnowledge 電子版：日本大百科全書, 小学館.
(<https://japanknowledge.com/introduction/writer1.html>)
- 7) 秋山高志, 北見俊夫, 前村松夫, 若尾俊平編：図録・農民生活史事典, pp. 230-234, 柏書房, 1991.
- 8) 佐々木長生：『会津農書』にみる麦の栽培と民俗：非文字資料としての農書・風俗帳, pp. 35-63, 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター, 2019.
- 9) 佐瀬与次右衛門：会津農書, 伊藤書店, 1994.
- 10) 川口孫治郎：自然暦 新装版, pp. 43, 八坂書房, 2013.
- 11) 岩科小一郎：山の民俗, pp. 200-240, 岩崎美術社, 1968.
- 12) 田淵行男：山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 13) 小山茂喜：伝統・文化に関する教育の充実に関する実践—雪形を扱った事例, 教職研究, Vol. 3, pp. 73-90, 2010.
- 14) 永楽屋東四郎編：富岳百景 3 編 三, 葛飾北斎画, 1834-1835.
- 15) 納口恭明, 河島克久：特別寄稿 気象センサーとしての雪形の生滅, 気象利用研究, Vol. 12, pp. 34-37, 1999.
- 16) 日本地誌研究所編：日本地誌 第1巻 (日本総論), pp. 203-204, 二宮書店, 1980.
- 17) 文化庁文化部記念物課監修：日本の文化的景観—農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書一, pp. 78, pp. 80, 同成社, 2005.
- 18) 国土交通省：ガイドブック『雪に学び, 雪を楽しむ』.
- 19) 農林水産省：ガイドブック『農と食のサイエンス 2014』.
- 20) 農林水産省：教材『教育ファーム大作戦』.
- 21) 林野庁 HP：(<https://www.rinya.maff.go.jp/index.html>)
- 22) NHK：岩手県岩手山「鷲」の雪形.
(https://www.nhk.or.jp/morioka/oosumi_blog/4gatu/article/220419/index.html)
- 23) 国土交通省：景観三緑法.
(<https://www.mlit.go.jp/crd/townscape/keikan/index.htm>)
- 24) 京都市：京の景観ガイドライン.
(<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000281294.html>)
- 25) 京都五山送り火連合会.
(<https://gozan-okuribi.com/2022/ja/top.html>)
- 26) 妙高市：歴史文化基本構想.
(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/rekishibunka/pdf/r1392234_115.pdf)
- 27) 上越市：上越市景観計画.
(<https://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/toshiseibi/keikan-keikan-keikaku.html>)
- 28) 納口恭明：「山岳文化都市宣言記念事業in大町 第2回北アルプス雪形まつり北アルプス雪形フォーラム 雪形の魅力と可能性 (後)」山と博物館, Vol. 49, No. 6, 市立大町山岳博物館, 2004.

- 29) 納口恭明：雪形って知っていますか？（山と気象），国立公園，Vol. 764， pp. 11-14， 2018.
- 30) 宮腰和弘：雪形の見える山の景観特性について—新潟県をケーススタディとして—， pp. 349-354， 都市計画論文集 Vol.32， 1997.
- 31) 秋田谷英次：雪形に期待する，砂防と治水，Vol. 29， No. 5， pp. 4-6， 1996.
- 32) 大越公平：雪形伝承にみる自然観—自然との共生，生活文化研究：紀要，Vol. 9， pp. 187-200， 2002.
- 33) 稲雄次：雪形一覧，北方風土：北国の歴史民俗考古研究誌，Vol. 54， pp. 120-140， 2007.
- 34) 国土地理院編：国土地理院地図。
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 35) 佐久間惇一：越後・雪形資料，あしなか，Vol. 133， pp. 1-7， 1972.
- 36) 斎藤義信：図説雪形，高志書院，1997.
- 37) 山崎進：妙高山と南葉山の雪形，あしなか，Vol. 253， pp. 1-10， 1999.
- 38) 山崎進：新潟県魚沼地方の雪形(1)，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 253， pp. 77-96， 2000.
- 39) 山崎進：佐渡の雪形，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 38， pp. 33-54， 2003.
- 40) 山崎進：新潟県魚沼地方の雪形(2)，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 38， pp. 67-90， 2004.
- 41) 山崎進：新潟県栃尾郷の雪形，長岡市立科学博物館研究報告，Vol. 41， pp. 93-118， 2006.
- 42) 高橋裕一，川村宏，大西拓也，松澤茂，小畑征二郎，川島茂人，井上聡，小野瀬浩司：気象衛星 NOAA の画像からの雪形を用いたスギ花粉飛散ステージの予測，日本花粉学会会誌，Vol. 46， No. 2， pp. 93-101， 2000.
- 43) 山崎英二：農事暦をテーマとした昔話について，越谷保育専門学校研究紀要 Vol. 4， pp. 12-18， 2015.
- 44) 和泉薫：全教育としての新潟“雪”物語，気象利用研究，Vol. 13， pp. 51-54， 2009.
- 45) UNESCO World Heritage Centre： Cultural Landscapes.
(<https://whc.unesco.org/en/culturallandscape/>)
- 46) 岡田哲也，篠原修：「文化的景観」の成立過程と成果・課題に関する考察，土木学会景観・デザイン研究講演集，NO. 4， pp. 11-18， 2008.
- 47) 文化庁：文化財保護法の一部を改正する法律等について，2004。
(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyousei/shokan_horei/bunkazai/hogoho_kaisei.html)
- 48) 文化庁：文化的景観。
(<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/keikan/>)
- 49) 柳田国男編：山村語彙，大日本山林会，1932.
- 50) 中山太郎：日本民俗学論考， pp. 105， 一誠社， 1933.
- 51) 小野和英：田淵行男と民俗学者らとの交流：雪形をめぐって，長野県立歴史館研究紀要，Vol. 25， pp. 69-85， 2019.
- 52) 岩木町史編集委員会編：新編弘前市史 通史編 岩木地区， pp. 24-26， 2011.
- 53) 山折哲雄：日本のこころ，日本人のこころ， pp. 19-21， 日本放送出版協会， 2004.
- 54) 小宮豊隆編：『寺田寅彦随筆集 第5巻』， pp. 237， 岩波書店， 1963.
- 55) BellCurve 社：エクセル統計。
(<https://bellcurve.jp/ex/>)
- 56) 農村景観計画研究会：景観づくり・むらづくり—農村景観づくりの手引き，ぎょうせい， 1994.
- 57) 山田高嗣：雪形という視点から見たスキー場の景観，日本スキー学会誌 Vol. 9， No. 1， p. 267~277， 1999.
- 58) 国土交通省：豪雪地帯対策特別措置法。
(https://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/chisei/crd_chisei_tk_000010.html)

第二章

- 1) 柳田国男編：山村語彙，大日本山林会，1932.
- 2) 岩科小一郎：山の民俗， pp. 200-240， 岩崎美術社， 1968.
- 3) 田淵行男：山の紋章・雪形，学習研究社，1981.

- 4) 佐久間惇一：越後・雪形資料, あしなか, Vol. 133, pp. 1-7, 1972.
- 5) 斎藤義信：図説雪形, 高志書院, 1997.
- 6) 山崎進：妙高山と南葉山の雪形, あしなか, Vol. 253, pp. 1-10, 1999.
- 7) 山崎進：新潟県魚沼地方の雪形(1), 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 253, pp. 77-96, 2000.
- 8) 山崎進：佐渡の雪形, 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 38, pp. 33-54, 2003.
- 9) 山崎進：新潟県魚沼地方の雪形(2), 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 38, pp. 67-90, 2004.
- 10) 山崎進：新潟県栃尾郷の雪形, 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 41, pp. 93-118, 2006.
- 11) 室谷洋司：八甲田山の雪形, 青山県立郷土館土曜セミナー, 2011.
(<https://www.slideshare.net/aokyodokan/ss-8140393>)
- 12) 小川弘司, 納口恭明, 神田健三, 和泉薫：白山の雪形, 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 34, pp. 45-53, 2007.
- 13) 稲雄次：雪形一覧, 北方風土：北国の歴史民俗考古研究誌, Vol. 54, pp. 120-140, 2007.
- 14) 国土地理院編：国土地理院地図.
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 15) 豪雪地帯及び特別豪雪地帯指定図.
(<http://www.sekkankyo.org/zenkoku.htm>)
- 16) 編纂委員会編：全国駒・馬の雪形, 編纂委員会, 2009.
- 17) 土橋里木：農牛と農鳥, 甲斐の民話, pp. 76-77, 未来社, 1959.
- 18) 小野洸：月山と朝日の雪形, あしなか, Vol. 80, pp. 4-5, 1962.
- 19) 向山雅重：山村雑記(5)残雪絵考=雪形と農耕について, 岳人, Vol. 262, pp. 130-134, 1969.
- 20) 長沢武：特集 それゆけ！北アルプス 随想 アルプスの雪形伝承, 岳人, Vol. 359, pp. 96-97, 1977.
- 21) 富山地学会編：豪雪:五六豪雪と三八豪雪, pp. 231-238, 古今書院, 1982.
- 22) 山下喜一郎：農事暦になった蝶や羚羊, 黒馬の雪形 春の大糸線車窓にみる北アルプスの山肌, Vol. 431, pp. 154-155, 1983.
- 23) 広瀬誠：立山黒部奥山の歴史と伝承, pp. 490-500, 桂書房, 1984.
- 24) NHK 編集センター編：NHK 関東甲信越小さな旅 4, pp. 35-62, 学陽書房, 1985.
- 25) 市川健夫：地理歳時記 気象のバロメーター・雪形, 地理, Vol. 33, No. 5, pp. 68-69, 1988.
- 26) 駒形駈先生退職記念事業の会：新潟県の歴史と民俗, pp. 285-294, 1988.
- 27) 田中宣一：年中行事の研究, pp. 76-101, 国学院大学, 1992.
- 28) 雪形に期待する, 砂防と治水, Vol. 29, No. 5, pp. 4-6, 1996.
- 29) 青木忠：加越の雪形と信州・安曇野の小さな記念館, 気象, Vol. 505, pp. 16032-16036, 1999.
- 30) 小平裕子：雪形から新緑へ, かびれ, Vol. 70, No. 5-823, pp. 24-25, 1999.
- 31) 大越公平：雪形伝承にみる自然観—自然との共生, 生活文化研究：紀要, Vol. 9, pp. 187-200, 2002.
- 32) 南雲道雄：雪形祭・節句・獅子舞(特集 風土と慣習), 公評, Vol. 45, No. 6, pp. 28-35, 2008.
- 33) 信清由美子：甲斐の野男—富士の雪形考, 甲斐, Vol. 121, pp. 181-183, 2010.
- 34) 大越公平：残雪に龍を見る—雪形(雪絵)の伝承, 関東学院大学部紀要, Vol. 120・121, pp. 295-307, 2010.
- 35) 脇田雅彦：飛騨の雪形—農事暦の饗宴, 民具マンスリー, Vol. 44, No. 4-520, pp. 10681-10696,

2011.

- 36) 納口恭明：雪形って知っていますか？（山と気象），国立公園，Vol. 764，pp. 11-14，2018.
- 37) 小野和英：田淵行男と民俗学者らとの交流：雪形をめぐる，長野県立歴史館研究紀要，Vol. 25，pp. 69-85，2019.

第三章

- 1) 作田哲啓，赤坂信：吾妻小富士の雪形—地域限定・期間限定の自然風景—に関する一考察，ランドスケープ研究 Vol. 70，No. 4，pp. 312-319，2007.
- 2) 宮腰和弘：雪形の見える山の景観特性について—新潟県をケーススタディとして—，都市計画論文集 Vol. 32，pp. 349-354，1997.
- 3) 田淵行男：山の紋章・雪形，学習研究社，1981.
- 4) 岩科小一郎：山の民俗，pp. 200-240，岩崎美術社，1968.
- 5) 環境省：自然との触れ合い分野の環境影響評価技術検討会中間報告書.
- 6) 稲雄次：雪形一覧，北方風土：北国の歴史民俗考古研究誌，Vol. 54，pp. 120-140，2007.
- 7) 佐々木長生：『会津農書』にみる麦の栽培と民俗：非文字資料としての農書・民俗帳，pp. 35-63，神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター，2019.
- 8) 加藤孝太郎，田淵浩康：農業に関する自然暦-風土適応・環境保全型の栽培技術を構築するための先人からの贈り物-，農業および園芸 Vol. 91，No. 10，pp. 977-986，2016.
- 9) 徳久球雄，石井光造，武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版，三省堂，Vol. 3，2011.
- 10) 斎藤義信：図説雪形，高志書院，1997.
- 11) 農林水産省ホームページ：くらべてみよう昔といまのコメ作り。
(https://www.maff.go.jp/j/agri_school/a_kome/index.html)
- 12) 山崎進：妙高山と南葉山の雪形，あしなか，Vol. 253，pp. 1-10，1999.
- 13) 和泉薫：全教育としての新潟“雪”物語，気象利用研究，Vol. 13，pp. 51-54，2009.
- 14) 小山茂喜：伝統・文化に関する教育の充実に関する実践—雪形を扱った事例，教職研究，Vol. 3，pp. 73-90，2010.
- 15) 安曇野市公式ホームページ：観光案内，雪形。
(<https://www.city.azumino.nagano.jp/soshiki/32/10316.html>)
- 16) 福島市HP：観光PRキャラクターももりん。
(<https://www.i-fukushima.jp/tokushu/archive/2015/19154/>)
- 17) 妙高市HP：新潟春告げる雪形「はね馬」妙高山にくっきり，2007。
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/107.html>)
- 18) 文化庁文化庁記念物課監修：日本の文化的景観—農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書—，pp. 78，pp. 80，同成社，2005.
- 19) 田中宣一：年中行事の研究，pp. 76-101，国学院大学，1992.
- 20) 妙高市：妙高市歴史文化基本構想，pp. 52，60，81，82，2018。
(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/rekishibunka/pdf/r1392234_115.pdf)
- 21) 表 2-2-1（第 2 章を参照）。
- 22) 国土地理院編：国土地理院地図。
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 23) 山と溪谷社編：日本の独立峰 45 選，山と溪谷，Vol. 4，pp. 24-25，2021.
- 24) 気象庁編：日本活火山総覧（第 4 版），2015。
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/menu_jma_hp.html)
- 25) 国土地理院編：国土地理院電子地形図 20 万。
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)

- 26) 国土地理院編：1. 地形分類, 2. 自然地域の名称.
(https://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atlas-d_j_02.pdf)
- 27) 深田久弥『日本百名山』新潮文庫, 新潮社, 2003年.
- 28) 「観光資源台帳」日本交通公社.
(<https://www.jtb.or.jp/page-search-tourism-resource/> (旧))
(<https://www.jtb.or.jp/research/tourism-resource-list/> (新))
- 29) とよだ時：『日本百霊山伝承と神話でたどる日本人の心の山』ヤマケイ新書, 山と溪谷社, 2016年.
- 30) 中島信典：『おらが富士340座—全国富士行脚18年の記録』Mybook, 1993年.
- 31) 国土地理院編：基準点成果等閲覧サービス.
(<https://sokuseikagis1.gsi.go.jp/top.html>)
- 32) 佐野浩祥, 渡辺貴介, 羽生冬佳：全国地方富士の特性とその成立に関する研究, 都市計画論文集 Vol. 4, pp. 1093-1098, 2000.
- 33) 児玉幸多編：宿場 (日本史小百科), 東京堂, 1997.
- 34) 五街道の旅 HP : (<http://home.b05.itscom.net/kaidou/index.html>)
- 35) NHK for School : 五街道.
(https://www2.nhk.or.jp/school/watch/clip/?das_id=D0005310087_00000&p=box)
- 36) 中西僚太郎：明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について, 歴史地理学, Vol. 169, pp. 2-22, 1994.
- 37) 小佐々学：日本在来馬と西洋馬—獣医療の進展と日欧獣医学交流史—, 日獣会誌, Vol. 64, pp. 419-426, 2011.
- 38) 尾崎孝弘：日本在来馬の歴史の変遷と現状, 鹿大史学 Vol. 59, pp. 15-28, 2012.
- 39) 各市町村史参照 (表 2-2-4).

第四章

- 1) 作田哲啓, 赤坂信：吾妻小富士の雪形—地域限定・期間限定の自然風景—に関する一考察, ランドスケープ研究 Vol. 70, No. 4, pp. 312-319, 2007.
- 2) 宮腰和弘：雪形の見える山の景観特性について—新潟県をケーススタディとして—, 都市計画論文集 Vol. 32, pp. 349-354, 1997.
- 3) 室谷洋司：八甲田山の雪形, 青山県立郷土館土曜セミナー, 2011.
(<https://www.slideshare.net/aokyodokan/ss-8140393>)
- 4) ニッポン旅マガジン HP : 岩木山「黒うさぎ」(竜の子) 雪形.
(<https://tabi-mag.jp/yukigata-mtiwaki/>)
- 5) 田淵行男：山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 6) 古道 塩の道 千国街道 HP : 塩の道 雪形ウォッチング.
(<https://fumoto.info/snow.html>)
- 7) 稲雄次：雪形一覽, 北方風土：北国の歴史民俗考古研究誌, Vol. 54, pp. 120-140, 2007.
- 8) 妙高市 HP : 妙高山と善光寺.
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/6709.html>)
- 9) 斎藤義信：図説雪形, 高志書院, 1997.
- 10) 山崎進：新潟県榎尾郷の雪形, pp. 93-118, 長岡市立科学博物館研究報告, Vol. 41, 2006.
- 11) 大越公平：雪形伝承にみる自然観—自然との共生, 生活文化研究: 紀要, Vol. 9, pp. 187-200, 2002.
- 12) 石狩市 HP : 愛冠岬「馬雪」.
(<https://www.city.ishikari.hokkaido.jp/site/sightseeing-guide/15835.html>)
- 13) 国土地理院編：国土地理院地図.
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 14) 徳久球雄, 石井光造, 武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.

- 15) 山と溪谷社編：日本の独立峰 45 選，山と溪谷，Vol. 4，pp. 24-25，2021.
- 16) 気象庁編：日本活火山総覧(第4版)，2015.
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/menu_jma_hp.html)
- 17) 国土地理院編：国土地理院電子地形図 20 万.
(https://www.gsi.go.jp/kiban_joho/kiban_joho40085.html)
- 18) 国土地理院編：1. 地形分類, 2. 自然地域の名称.
(https://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atlas-d_j_02.pdf)
- 19) 各市町村史参照 (表 2-2-4).
- 20) Bell Curve 社：統計解析ソフトエクセル統計.
(<https://bellcurve.jp/ex/>)

第五章

- 1) 岩科小一郎：山の民俗，pp. 200-240，岩崎美術社，1968.
- 2) 田淵行男：山の紋章・雪形，学習研究社，1981.
- 3) 更科源蔵：北海道伝説集，pp. 10-11，楡書房，1955.
- 4) NHK for School ホームページ：群馬県の産業 養蚕.
(https://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005402167_00000)
- 5) 伊達町史編纂委員会編：伊達町史 第4巻(別巻1)(奥州蚕種本場養蚕日誌修正)，pp. 311，伊達町史編纂委員会，1985.
- 6) 作田哲啓，赤坂信：吾妻小富士の雪形—地域限定・期間限定の自然風景—に関する一考察，ランドスケープ研究 Vol. 70, No. 4, pp. 312-319, 2007.
- 7) 伊達市公式サイト：伊達地方の養蚕業.
(<https://www.city.fukushima-date.lg.jp/soshiki/87/144.html>)
- 8) 李世化：中华文化公开课：生肖文化十六讲，当代世界出版社，2019.
- 9) 斎藤義信：図説雪形，高志書院，1997.
- 10) 北野天満宮 HP：北野天満宮と牛.
(<https://kitanotenmangu.or.jp/story/%E5%8C%97%E9%87%8E%E5%A4%A9%E6%BA%80%E5%AE%AE%E3%81%A8%E7%89%9B/>)
- 11) 錦天満宮 HP：天満宮と牛.
(<https://nishikitenmangu.or.jp/grounds/>)
- 12) 新潟観光ナビ HP：来年の初詣はうさぎだらけの「光兎神社」がおすすめ！／関川村.
(<https://niigata-kankou.or.jp/blog/862>)
- 13) THINGS - NIIGATA LOCAL WEB MAGAZINE HP：うさぎ好きは要チェック！うさぎだらけの「光兎神社」が熱い.
(<https://things-niigata.jp/other/kosagijinja/>)
- 14) 中西僚太郎：明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について，歴史地理学，Vol. 169, pp. 2-22, 1994.
- 15) 小佐々学：日本在来馬と西洋馬-獣医療の進展と日欧獣医学交流史-，日獣会誌，Vol. 64, pp. 419-426, 2011.
- 16) 大島建彦：講演会「十二支と日本人」，pp. 1-19，国立国会図書館国際子ども図書館，2005.
- 17) 表 2-2-1 (第2章を参照) .
- 18) 国土地理院編：国土地理院地図.
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 19) 徳久球雄，石井光造，武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版，三省堂，Vol. 3, 2011.
- 20) 山と溪谷社編：日本の独立峰 45 選，山と溪谷，Vol. 4，pp. 24-25，2021.

- 21) 気象庁編：日本活火山総覧(第4版)，2015。
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/menu_jma_hp.html)
- 22) 国土地理院編：国土地理院電子地形図20万。
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)
- 23) 国土地理院編：1. 地形分類, 2. 自然地域の名称。
(https://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atlas-d_j_02.pdf)
- 24) 各市町村史参照(表2-2-4)。

第六章

- 1) 文化庁文化部記念物課監修：日本の文化的景観—農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書一, pp. 78, pp. 80, 同成社, 2005.
- 2) 秋田谷英次：雪形に期待する, 砂防と治水, Vol. 29, No. 5, pp. 4-6, 1996.
- 3) 安曇野市公式ホームページ：観光案内, 雪形。
(<https://www.city.azumino.nagano.jp/soshiki/32/10316.html>)
- 4) 福島市HP：観光PRキャラクターももりん。
(<https://www.i-fukushima.jp/tokushu/archive/2015/19154/>)
- 5) 妙高市HP：妙高市観光PRキャラクター「ミョーコーさん」。
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/107.html>)
- 6) 樋口忠彦：景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間一, pp. 4-6, 技報堂出版, 1975.
- 7) 徳久球雄, 石井光造, 武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- 8) 山と溪谷社編：日本の独立峰45選, 山と溪谷, Vol. 4, pp. 24-25, 2021.
- 9) 気象庁編：日本活火山総覧(第4版)，2015。
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/menu_jma_hp.html)
- 10) 国土地理院編：国土地理院電子地形図20万。
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)
- 11) 国土地理院編：1. 地形分類, 2. 自然地域の名称。
(https://www.gsi.go.jp/atlas/archive/j-atlas-d_j_02.pdf)
- 12) Bell Curve社：統計解析ソフトエクセル統計。
(<https://bellcurve.jp/ex/>)
- 13) 国土地理院編：国土地理院地図。
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 14) 山と溪谷社編：日本の独立峰45選, 山と溪谷, Vol. 4, pp. 24-25, 2021.
- 15) 気象庁編：日本活火山総覧(第4版)，2015。
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/menu_jma_hp.html)
- 16) 深田久弥『日本百名山』新潮文庫, 新潮社, 2003年。
- 17) 「観光資源台帳」日本交通公社。
(<https://www.jtb.or.jp/page-search-tourism-resource/> (旧))
(<https://www.jtb.or.jp/research/tourism-resource-list/> (新))
- 18) とよだ時：『日本百霊山伝承と神話でたどる日本人の心の山』ヤマケイ新書, 山と溪谷社, 2016年。
- 19) 中島信典：『おらが富士340座—全国富士行脚18年の記録』Mybook, 1993年。
- 20) 国土地理院編：基準点成果等閲覧サービス。
(<https://sokuseikagis1.gsi.go.jp/top.html>)
- 21) 佐野浩祥, 渡辺貴介, 羽生冬佳：全国地方富士の特性とその成立に関する研究, 都市計画論文集 Vol. 4, pp. 1093-1098, 2000.
- 22) 各市町村史参照。

- 23) Bell Curve社：統計解析ソフトエクセル統計。
(<https://bellcurve.jp/ex/>)

第七章

- 1) 安曇野市公式ホームページ：観光案内, 雪形.
(<https://www.city.azumino.ngano.jp/soshiki/32/10316.html>)
- 2) 福島市HP：観光PRキャラクターももりん.
(<https://www.i-fukushima.jp/tokushu/archive/2015/19154/>)
- 3) 妙高市HP：妙高市観光PRキャラクター「ミョーコーさん」.
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/107.html>)
- 4) 和泉薫：全教育としての新潟“雪”物語, 気象利用研究, Vol. 13, pp. 51-54, 2009.
- 5) 小山茂喜：伝統・文化に関する教育の充実に関する実践—雪形を扱った事例, 教職研究, Vol. 3, pp. 73-90, 2010.
- 6) 山崎英二：農事暦をテーマとした昔話について, 越谷保育専門学校研究紀要 Vol. 4, pp. 12-18, 2015.
- 7) 作田哲啓, 赤坂信：吾妻小富士の雪形—地域限定・期間限定の自然風景—に関する一考察, ランドスケープ研究 Vol. 70, No. 4, pp. 312-319, 2007.
- 8) 勝山市：勝山市観光計画, pp. 15, 2011.
- 9) 勝山市：勝山市エコミュージアム推進計画, 2002.
- 10) 福島市：福島市景観形成基本計画, pp. 1, 2018.
- 11) 福島市：福島市中心市街地活性化基本計画 pp. 4, 2021.
- 12) 白馬村：白馬村観光地経営計画, pp. 42, 45, 58, 2016.
- 13) 飯綱町：飯綱町景観計画, pp. 3, 2021.
- 14) 妙高市：妙高市歴史文化基本構想, pp. 52, 60, 81, 82, 2018.
- 15) 上越市：上越市景観計画, pp. 15, 26.
- 16) 黒部市：黒部市観光振興計画, pp. 59, 74, 101, 2007.
- 17) 黒部市：黒部市都市計画マスタープラン, pp. 134, 2010.
- 18) 魚津市：第4次魚津市総合計画, pp. 182, 2011.
- 19) 魚津市：生物多様性うおづ戦略, pp. 24, 2014.
- 20) 徳久球雄, 石井光造, 武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- 21) 岩科小一郎：山の民俗, pp. 200-240, 岩崎美術社, 1968.
- 22) 編纂委員会編：全国駒・馬の雪形, 編纂委員会, 2009.
- 23) 栗駒山麓ジオパークHP：雪形「駒姿」.
(<https://www.kuriharacity.jp/geopark/index.html>)
- 24) 田淵行男：山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 25) 伊達町史編纂委員会編：伊達町史 第4巻(別巻1)(奥州蚕種本場養蚕日誌修正), pp. 311, 伊達町史編纂委員会, 1985.
- 26) 福島市HP：福島市観光PRキャラクター「ももりん」.
(<https://www.city.fukushima.fukushima.jp/suidou/?p=49562>)
- 27) 勝山市役所PR室：勝山に春を告げる「鶴峯の残雪」。(勝山市へのヒアリングにより入手.)
(<https://www.facebook.com/ktSAGICHO/posts/5147442881994151/>)
- 28) 福井県大野郡教育会 編：大野郡誌「鶴峯の残雪」, pp. 426, 1912.
- 29) 勝山市：勝山市史第1巻 風土と歴史「勝山八景」, pp. 312, 1974.
- 30) 魚津埋没林博物館 編：魚津埋没博物館広報誌 うもれ木 NO. 11, pp. 1, 1999.
- 31) 魚津市史編纂委員会 編：魚津市史 上巻, pp. 888-891, 1968.
- 32) 長井真隆：第1回「富山の雪形とその伝承」, 日本海学講座, pp. 1, 2000.
- 33) 魚津市HP：魚津の四季.

- (<https://www.city.uozu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=2253>)
- 34) 黒部市 HP : 僧ヶ岳の雪絵.
(<https://www.city.kurobe.toyama.jp/attach/EDIT/017/017731.pdf>)
 - 35) 魚津市観光協会 HP : 僧ヶ岳の雪絵 季節を告げる風物詩.
(<https://uozu-kanko.jp/library/sougadake-yukie/>)
 - 36) 魚津市 : 「魚津市観光 MAP UO!NAVI」『魚津市発地型観光パンフレット』.
(<https://www.city.uozu.toyama.jp/attach/EDIT/052/052582.pdf>)
 - 37) 魚津市 : 魚津市観光振興計画 (案) , pp. 18, 2012.
 - 38) 著者撮影 : 妙高山「はね馬」、「山の字」、南葉山「大男」.
 - 39) 山崎進 : 妙高山と南葉山の雪形, あしなか, Vol. 253, pp. 1-10, 1999.
 - 40) 妙高市 HP : 妙高山と善光寺.
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/6709.html>)
 - 41) 了貞 : 二十四輩巡拝図会, 第五巻, 1803.
 - 42) 井出道貞, 他 : 信濃奇勝録 巻之 2, pp. 228-229, 1887.
 - 43) 上越タウンジャーナル : 妙高山に「山」の字の雪形 江戸時代は「跳ね馬」より有名だった?, 2018.
(<https://www.joetsutj.com/articles/11183955>)
 - 44) 上越タウンジャーナル : 妙高に「山の字」, 駒ヶ岳に「いの字」, 2010.
(<https://www.joetsutj.com/articles/744001503>)
 - 45) 妙高市 HP : 妙高市観光 PR キャラクター「ミョーコーさん」.
(<https://www.city.myoko.niigata.jp/docs/107.html>)
 - 46) 小島 正巳 : 続・妙高火山の文化史, pp. 81-84, 2016.
 - 47) 上越妙高タウン情報 : 妙高の「はね馬」モチーフ 新地ビール発売中.
(<https://www.joetsu.ne.jp/36348>)
 - 48) 朝日新聞デジタル : 新潟 春告げる雪形「はね馬」妙高山にくっきり, 2007.
(<https://www.asahi.com/articles/ASK4S3SD3K4SU0HB002.html>)
 - 49) 駒ヶ根市 HP : 中央アルプスの魅力再発見.
(<https://www.city.komagane.nagano.jp/soshikiichiran/syoukoukankouka/kankogakari/tozanjyou/6776.html>)
 - 50) 大町市 HP : おおまちの春夏秋冬.
(<https://www.city.omachi.nagano.jp/00014000/00014100/00014160/00014192.html>)
 - 51) 大町市 公式観光サイト HP : 雪形.
(<https://kanko-omachi.gr.jp/spot/yukigata/>)
 - 52) 中央アルプス山岳観光協会 : パンフレット 国定公園中央アルプス. (駒ヶ根市へのアンケート調査により入手)
 - 53) 信濃毎日新聞 : せっかち 島田娘, 2021. (駒ヶ根市へのアンケート調査により入手)
 - 54) 長野日報 : 早くも「嫁さま」島田娘, 2021. (駒ヶ根市へのアンケート調査により入手)
 - 55) 日本家庭薬協会 : 養命酒製造株式会社 看板・マークの由来. (駒ヶ根市へのアンケート調査により入手)
(<https://www.hmaj.com/mark/youmei/>)
 - 56) 化粧水 島田娘 (駒ヶ根市へのアンケート調査により入手)
 - 57) 富士じかん : 富士山に浮き出るかぐや姫.
(https://www.city.fuji.shizuoka.jp/fuji_jikan/fujipedia/kb719c000000095i.html)
 - 58) 杉みき子 : 杉みき子選集 4. 朝やけまつり, 新潟日報事業社, 2008.
 - 59) 鈴木智香子, 中島直人, 江口久美, Vichienpradit Pornsan, 北村修一, 長澤怜, 山田渚 : 北前船をテーマとした広域観光に関する基礎的検討-北前船関連観光資源の全国調査を中心として-, 第13回観光に関する研究論文選論文集, 財団法人アジア太平洋観光交流センター, 2007.

第八章

- 1) 編纂委員会編 : 全国駒・馬の雪形, 編纂委員会, 2009.

- 2) 国土地理院編：国土地理院地図。
(<https://maps.gsi.go.jp/>)
- 3) 岩科小一郎：山の民俗, pp. 200-240, 岩崎美術社, 1968.
- 4) 田淵行男：山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 5) 徳久球雄, 石井光造, 武内正編：三省堂日本山名事典 改訂版, 三省堂, Vol. 3, 2011.
- 6) 田淵行男：山の紋章・雪形, 学習研究社, 1981.
- 7) 奥州市埋蔵文化財センターHP：雪形と駒形神社
(http://www.oshu-bunka.or.jp/maibun/publics/index/117/detail=1/b_id=653/r_id=197/)
- 8) 小山直嗣, 村山富士子：日本の伝説 41 越後の伝説, pp. 5, 角川書店, 1979.
- 9) 小島正巳：続・妙高火山の文化史, pp. 81-84, 2016.
- 10) 大平晟：妙高紀行, 山岳 Vol. 1, No. 1, pp. 101-114,
- 11) 高校農業 木曾馬の飼育と活用 HP：木曾馬の歴史。
(https://gakuen.gifu-net.ed.jp/~contents/kou_nougyou/kiso/1_1.html)
- 12) 日本遺産 木曾路 HP：構成文化財 木曾馬。
(<http://www.kisoji-isan.com/heritage/11.html>)
- 13) 中西僚太郎：明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について, 歴史地理学, pp. 2-22, Vol. 169, 1994.
- 14) 小佐々学：日本在来馬と西洋馬-獣医療の進展と日欧獣医学交流史-, 日獣会誌, pp. 419-426, Vol. 64, 2011.
- 15) 気象庁 HP：活火山とは。
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/katsukazan_toha/katsukazan_toha.html)
- 16) 尾崎孝弘：日本在来馬の歴史の変遷と現状, 鹿大史学 Vol. 59, pp. 15-28, 2012.
- 17) NHK for School：五街道。
(https://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005310087_00000)
- 18) 国土交通省 HP：道の歴史, 近世の道 五街道—諸道の性格。
(<https://www.mlit.go.jp/road/michi-re/3-3.htm>)
- 19) JapanKnowledge 電子版：駒形神社, 日本大百科全書, 小学館。
(<https://japanknowledge.com>)
- 20) 各市町村史.
- 21) 日本伝承大鑑：遠野伝承園 御蚕神堂。
(<https://japanmystery.com/iwate/osirasama.html>)
- 22) 樋口淳, 陶雪迎：馬娘婚姻譚の日に比較, 専修大学人文科学研究月報, pp. 1-18, Vol. 196, 2001.
- 23) 近藤良子：蚕と猫と馬～養蚕をめぐる動物たち～岩手県立博物館だより, pp. 6-7, No. 153, 2017.
- 24) 柳田国男：遠野物語, pp. 54-56, 1910.
- 25) 日本遺産：サムライゆかりのシルク。
(<https://samurai-yukarino-silk.jp/>)
- 26) 室谷洋司：八甲田山の雪形, 青山県立郷土館土曜セミナー, 2011。
(<https://www.slideshare.net/aokyodokan/ss-8140393>)
- 27) 国土地理院編：国土地理院電子地形図 20 万。
(<https://www.gsi.go.jp/kibanjoho/kibanjoho40085.html>)
- 28) 国土地理院編：基準点成果等閲覧サービス。
(<https://sokuseikagisl.gsi.go.jp/top.html>)
- 29) 児玉幸多編：宿場 (日本史小百科), 東京堂, 1997.
- 30) 五街道の旅：(<http://home.b05.itscom.net/kaidou/index.html>)
- 31) NHK for School：五街道.

(https://www2.nhk.or.jp/school/watch/clip/?das_id=D0005310087_00000&p=box)

- 32) 中西僚太郎：明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について，歴史地理学，pp. 2-22, Vol. 169, 1994.
- 33) 小佐々学：日本在来馬と西洋馬-獣医療の進展と日欧獣医学交流史-，日獣会誌，pp. 419-426, Vol. 64, 2011.
- 34) 尾崎孝弘：日本在来馬の歴史の変遷と現状，鹿大史学 Vol. 59, pp. 15-28, 2012.
- 35) 千宝：搜神记，中华书局，1979.

発表論文

【第4章・第5章】

韓 旖睿, 白 琳, 孫 氷玉, 湯浅 かさね, 池邊 このみ：雪形(YUKIGATA)の景観・産業・文化特性からみる価値評価に関する研究，土木学会論文集D1分冊（景観・デザイン），2023.01.12 (Accepted) .

【第4章第5節】

Yirui Han : A study on the relationship between the Japanese cultural landscape YUKIGATA and the Chinese zodiac culture, Academic Journal of Humanities & Social Sciences, Vol6, No.1, pp.24-30, 2023.

【第6章・第7章】

韓 旖睿, 白 琳, 孫 氷玉, 池邊 このみ：地域の景観・文化資源としての雪形の特性に関する研究—主に雪形の住民意識と地方自治体における観光利活用等の現状調査—，自治体学，36-1号, pp.65-71, 2022.

図表リスト

第一章

- 図 1-1-1 ネガ型とポジ型の雪形
- 図 1-1-2 長野県白馬岳「代馬」と馬を利用した代かきの情景
- 図 1-1-3 長野県常念岳「万能鍬」と万能鍬で代かき作業
- 図 1-1-4 長野県八方尾根「手斧」の雪形と手斧
- 図 1-1-5 青森県八甲田山の「苗モッコ」と田植え作業と苗モッコ
- 図 1-1-6 葛飾北斎の『富嶽百景』(1834)
- 図 1-2-1 ガイドブック『雪に学び、雪を楽しむ』
- 図 1-2-2 ガイドブック『農と食のサイエンス 2014』
- 図 1-2-3 岩手県岩手山「鷲」の雪形
- 図 1-2-4 際雪形研究会が作成した雪形分布図 (YUKIGATA DISTRIBUTION MAP)
- 図 1-2-5 アメリカソルトレイク郡スーペリア山「ドラゴン The Dragon」
- 図 1-2-6 アメリカソルトレイク郡スーペリア山「バタフライ The Butterfly」
- 図 1-3-1 雪形に関する景観・文化特徴
- 図 1-4-1 研究のフロー

- 表 1-3-1 雪に関する自然景観
- 表 1-5-1 世界遺産条約における各領域別の文化的景観
- 表 1-5-2 文化的景観候補として選定された雪形

第二章

- 図 2-2-1 各文献による抽出されたの雪形の詳細数
- 図 2-2-2 全国における雪形の分布とその空間的特徴
- 図 2-2-3 各県における雪形の分布

- 表 2-2-1 雪形の抽出及び諸特徴の把握に用いた文献
- 表 2-2-2 雪形の数と分布地域
- 表 2-2-3 雪形が出現する山岳と所在地

第三章

- 図 3-2-1 雪形の望見地の立地地形と位置づけ
- 表 3-2-1 「景観」に対する価値認識
- 表 3-2-2 データベース A : 全国における雪形 (631 体) の望見地の立地特性と山岳の地理的特性に関するデータベース
- 表 3-2-3 雪形の形象の種類と数
- 表 3-2-4 雪形に関する産業・地域文化の種類と数
- 表 3-3-1 データベース B (150 体) : 「文化的価値」を有する雪形の特性分析に関するデータベース

表 3-4-1 データベース C (95 体) : 「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベース

第四章

- 図 4-2-1 地理・立地特性による全国における雪形 (631 体) の景観特性の特徴
- 図 4-3-1 地理・立地特性による全国における雪形 (631 体) の景観特性の類型化
- 図 4-3-2 全国における各類型の雪形の分布状況
- 図 4-4-1 タイプ A 岩木山の雪形
- 図 4-4-2 タイプ B 日本アルプスの雪形
- 図 4-4-3 タイプ C 妙高山の「山の字」
- 図 4-4-4 タイプ D 守門岳「釈迦の首」
- 図 4-4-5 タイプ E 愛冠岬「馬雪」

- 表 4-1-1 地理・立地特性による全国における雪形 (631 体) の景観特性の分析に使用した評価項目
- 表 4-3-1 地理・立地特性による全国における雪形 (631 体) の景観特性の類型の特徴

第五章

- 表 5-1-1 全国における雪形 (631 体) の産業・文化特性の分析に使用した評価項目
- 表 5-1-2 各タイプにおける全国における雪形 (631 体) の景観特性と産業・文化特性の詳細
- 表 5-5-1 十二支の形の雪形に関する産業・文化の特徴

第六章

- 図 6-2-1 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) が出現する山岳の特性の特徴
- 図 6-2-2 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) が出現する山岳特性の類型
- 図 6-2-3 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) の眺望特性の特徴
- 図 6-2-4 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) の眺望特性の類型

- 表 6-1-1 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) が出現する山の山岳特性に関する評価項目
- 表 6-1-2 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) の眺望特性に関する評価項目
- 表 6-2-1 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) が出現する山岳の各類型の特徴
- 表 6-2-2 「文化的価値を有する雪形」 (150 体) の眺望特性の各類型の特徴

第七章

- 図 7-5-1 栗駒山麓ジオパークガイドブック
- 図 7-5-2 吾妻小富士雪形「雪うさぎ」
- 図 7-5-3 福島市観光 PR キャラクター「ももりん」
- 図 7-5-4 大日山「鶴峯の残雪」
- 図 7-5-5 僧ヶ岳「大入道、僧 (虚無僧)、兎、猫」
- 図 7-5-6 妙高山「はね馬」
- 図 7-5-7 妙高山「山の字」『二十四輩巡拝図会』(1803)
- 図 7-5-8 四山一望『信濃奇勝録』

- 図 7-5-9 妙高山如来の御影札と「山の字」
- 図 7-5-10 燕鉦泉全図と「山の字」
- 図 7-5-11 観光 PR キャラクター「ミヨーコーさん」
- 図 7-5-12 妙高高原ビール「ハネウマ IPA」と妙高山の「跳ね馬」
- 図 7-5-13 パンフレット『国定公園中央アルプス』に取り上げられている雪形
- 図 7-5-14 地域新聞に報道されている「島田娘」
- 図 7-5-15 田切岳の雪形「飛龍」と養命酒の飛龍マーク
- 図 7-5-16 雪形「島田娘」の名称を使用した化粧品

表 7-3-1 景観・文化資源としての雪形への意識と活用方法

表 7-4-1 各自治体における景観・文化資源としての雪形への意識と活用方法の特徴

表 7-4-2 各種計画に取り上げられている雪形

第八章

図 8-4-1 「馬・駒」の雪形が出現する山岳の分布図

図 8-4-2 明治前期における耕馬の分布

図 8-4-3 日本全国における火山の分布

図 7-3-1 「馬・駒」の雪形望見地と経由された街道

表 8-1-1 データベース C (95 体) : 「馬・駒」の雪形と関連する地域文化の考察に関するデータベース

雪形を景観・文化資産として保護・継承の現状及び雪形による地域振興の実態に関するアンケート

回答者所属名：

氏名：

連絡先：

問1 雪形の基本状況について：

1) 市町村内でよく知られている雪形はありますか？（ある場合は雪形の名称と山岳の名称を記入してください。）

a. あり

b. なし

回答：

2) 雪形が出現する山岳の類型はどちらですか？

a. 独立峰

b. 連峰

c. 山塊

d. その他（ ）

*もし宜しければ、山名を項目の横に記入して頂ければ幸いです。

3) 市町村内で雪形を農事暦として利用されていますか？（ある場合は雪形の名称と山岳の名称、農事の種類を記入してください。）

a. あり

b. なし

回答：

4) 山名の由来になった雪形はありますか？（ある場合は雪形の名称と山岳の名称を記入してください。いつ山の名前になったのをご存知でしたら、教えて頂ければ幸いです。）

a. あり

b. なし

回答：

5) 雪形が出現する場所の地形をできれば記入してください。(植林の上に出現する、沢に出現する、露岩に出現するなど)

回答:

6) 雪形の望見範囲はどうですか? (例: どこでも望見できる、農事を従事する地域のみ望見できる、望見範囲が狭い、前山に遮られたのであまり望見できないなど)

回答:

7) 雪形が出現するその山が市の最高点(ランドマークやシンボル)になっていますでしょうか?

a. あり

b. なし

8) また、その山自体が観光資源になっていますでしょうか?

a. あり

b. なし

問2 貴市町村では、雪形を観光や景観、歴史文化基本構想などの計画の対象に
されていますでしょうか?

a. あり

b. なし

◆されている場合には、以下の間にお答え頂ければ幸いです。

1) 選定するまでどんな調査を行いましたか?

回答:

2) その際に、どんなものを選定の理由として参照しましたか？（古文献に関する記載・山名の由来・伝説など）

回答：

3) 観光や計画に導入する場合には、景観性（美しさ、見える範囲の広さ）と文化性（アイデンティティ）をどちらかを重要視しましたか？

回答：

4) 将来的に、**文化的景観**として指定するような意見が出ていますでしょうか？

a. あり

b. なし

◆**されていない場合は、将来、市町村の自然景観として、観光や景観計画に導入する意向はありますか？**

a. あり

b. なし

問3 雪形を景観としての認識について：

1) 雪形は市町村の景観として認識されていますか？市民の認知度はどうですか？（高齢者、若い人、子供、観光客、登山者など）

回答：

（参考例：認識されているが、高齢者の認知度は高い、若い市民の認知度は低い。など）



参考例：(新潟県妙高市妙高原ビール「ハネウマ IPA」は神奈山の雪形

「はね馬」の名称と形を使用した。)

8) 雪形の名前や形を使った地域のロゴはありますか？(店舗のロゴ、マンホールのマークなど)

a. あり

b. なし

◆ある場合は、店の名称や設置する場所などをできれば記入してください。(関連資料のコピーなどがございましたら、アンケートの回答と併せてお送り頂きますと幸いです。もしくは、お問い合わせの項に記載の「問い合わせ先メールアドレス」宛にデータをお送り頂いても構いません。)

回答：

9) 雪形に関する信仰・民話・童謡・俗謡・歌謡・絵本・俳句などの文学作品、或いは浮世絵・挿絵などの絵画作品はありますか？

a. あり

b. なし

◆ある場合は、作品の名称、内容をできれば記入してください。(関連資料のコピーなどがございましたら、アンケートの回答と併せてお送り頂きますと幸いです。もしくは、お問い合わせの項に記載の「問い合わせ先メールアドレス」宛にデータをお送り頂いても構いません。)

回答：

ご回答ありがとうございました。アンケート調査で得た得た情報は研究目的以外に使用しないこと、研究成果は論文として発表して社会に還元することを保証致します。

お問い合わせ:

千葉大学園芸学研究科 博士課程 韓 旖睿

千葉大学園芸学研究科 池邊このみ*

*文化庁文化審議会第三専門調査会名勝委員
世界文化遺産審議委員

「データベース A の対象である雪形 (631 体)」

北海道	函岳	兔雪
	砂蘭部岳	鯨雪
	狩場山	白馬
	写万部山	鯨雪「サマンベウバシ」
	ワイスホルン	白い馬
	羊蹄山	鯨馬うま
	利尻山	わく舟
	愛冠岬	猫の目 馬雪
青森県	岩木山	下りウサギ
		上り犬
		牛
		馬賊「マンガ」
		馬
		早馬
		苗とり爺と婆
		苗シヨイ婆「爺」
		種蒔き爺
		田植え雪
		チセ株
		爺
		賊負う婆
		種と爺
		鎌と婆
		田打ち爺
		雁木
		への字
		鷲「アワサギ」
		豆蒔き婆
		上りネズミ
		下りネズミ
		スキ (鮒)
		スキ (鮒)
		天神様
		童の子
		ツバメ (山羊さん)
		犬
		山羊さん
		牛首
		ダイロン
		唐獅子
		ダイロン (小)
	四つマナコ	
	のぼり童	
	くだり童	
	鯉の滝登り	
	苗モッコ「モッコ、苗祭り (しよい、背負い) モッコ」	
	八甲田山	駒形
		種蒔き爺
		船形
		駒雪 (駒の雪、白馬)
		種蒔き爺 (種蒔き法師)
		蟹ハサミ
		牛クビ
		雁
		馬賊 (マンガ)
		松 (文字)
		YZ
		二本銀 (戸山、平新田)
		麩形 (豆蒔き郭公、種蒔きトド)
		松形
	大駒ヶ岳	馬
	増川岳	馬
	尾太岳	馬
	翁臥山	三つ草 (サンボン)
	湯森山	苗取爺様
苗形		
駒		
苗とり爺		
駒		
三ツ雪		
(秋田) 駒ヶ岳	駒	
	駒形	
	亀ノ子形	
	苗東二東	
東福山 (駒形嶺、駒形山)	ととき舟	

岩手県	焼石連峰（獅子ヶ鼻岳）	鴨形 モッコ形（種まきモッコ） 猫頭 蛇雪 ハル形 鳥帽子形
	焼石連峰（横岳）	鳥帽子形
	焼石連峰（経塚山）	牛形（駒形）
	焼石連峰（東焼石岳）	鮎頭形（鮎頭）
	焼石連峰（天笠山）	裏櫛形 種まき坊主
	早池峯山	上の字
	三森山	馬
	栗駒山（股引岳）	股引き
	和段岳	代掻き坊主
	真昼岳	馬
	岩手山（鯨鷲山、霧山岳、霧ヶ岳、奥の富士、南部片富士、南部富士）	鷲と雉
	宮城県	栗駒山（駒形山、酢川岳、須川岳）
蔵王山（水引入道山）		犬と猿
馬ノ神岳		牛引き坊主
秋田県	藤里駒ヶ岳（藤駒岳）	駒
	（秋田）駒ヶ岳	駒 駒
	栗駒山（駒形山、酢川岳、須川岳）	火雪（エンコ雪） 種まきじっこ（種まき爺） 舟形（帆掛船、さつき舟）
	鳥海山	三羽ガラス（三羽鳥） 種蒔き小僧 文福茶釜
	鳥海山（稲倉岳）	酒こしばんぼ
	高松岳	八の字雪
	白神岳（上の字ヶ岳、上文字山、白上山）	上の字
	鶴ヶ岳	鶴
	真昼岳	種まきオオジ（猿形）
	神室山	高砂の翁と婆 種蒔き爺
	山形県	鳥海山
月山		馬雪 帆かけ舟 蛇ノ目 地蔵 子ノ字
地神山（地紙山）		シシノマナコ
（飯豊連峰）駒形山		駒
障子ヶ岳		べこ雪（仔牛、鬼雪） オトミ雪 鬼雪
竜ヶ岳		ワラズ雪
朝日岳（中岳）		させとり馬（代掻き馬）
西朝日岳		鈴雪
大朝日岳		クルミ雪
小朝日岳		松茸雪
蔵王山		犬
飯豊山		水引き入道 相撲とり 水くみ婆
志蔵山（志葛山）		ワッパ雪
八森山		鳥のトモ足 種まき坊主
葉山		牛 銀杏の葉雪
瀧山		鳩の形 やきめし
神室山		鬼 馬
栗子山		三つ又雪
空浦十鳥山		栗蒔き入道 鯉雪

福島県	久遠へ及び	駒形
		船形
	箕輪山	粟時き入道
	磐梯山	虚無僧
		牛雪 (狐雪)
		駒雪
		蛇雪
	(会津) 駒ヶ岳	二匹馬
		駒
	吾妻小富士	代播き馬
		雪返(種時きうさぎ)
	半田山	種まき坊主
	秋山	霧雪
	盛ヶ岳	金狹 (火打ち鉄)
	(飯豊連峰) 大日岳	飯豊牛
(飯豊連峰) 駒形山	駒	
飯豊山	種まきじさま (種時き爺さん)	
牛首山	代播き馬 (黒馬)	
牛首山	タカの羽	
光臺山 (鴻鷲山、光鷲山)	狐形	
えぶり差岳	尻籠や (私人形)	
	鏡前	
	ミヨウガの葉	
	鯛形	
	帆前船	
	逆さ男 (さつき男)	
	逆さ男 (さつき男)	
	山形 (山の字形)	
	鯛形	
	飯盛り婆さ	
二王子岳	鷄首	
	鶯がり雁	
	オヨリ婆	
	粟時き爺さ	
	恵比寿さま	
	鷲の首	
	鷲の首	
	私人形	
	狐形	
	鯉形 (黒鯛)	
	音物形	
	鯛形	
	黒鯛	
	逆さ形 (杉)	
	馬蹴 (マンガ)	
	天神形 (天神杉)	
	雪三つ	
	イフリサオ	
	七どこ雪	
	鷲形	
	ガニの鱗	
	馬形	
七の字 (七形)		
鯉ほこ		
黒牛形		
蟹籠形 (肩輿)		
飯豊山	粟時き入道 (僧形)	
	御鏡雪 (鏡鏡雪)	
	鞍かけ豆	
笠掛山	僧侶の形 (虚無僧)	
駒形山	駒形 (馬形)	
	種時き爺	
	馬 (の形)	
金鉢山	八の字	
	逆さ男	
	スズ時き男	
	マンマフットツ	
棚橋山	種時き男	
	馬蹴 (鯉形)	
菱ヶ岳	逆さ狐	
	スズ時き男	
	駒の首	
	逆瓢箪 (タナフクバ)	
4211	三角ちまき	
	川の字	
	王神雪 (川雪、三本雪、三つ雪)	
	龍雪	

	二本紙 (ニツ雪)
	道心雪
	ボウズエキ
	猫雪
森立峠	人形雪 (アマイン・ヨマイン)
	連嶺 (ツンネ) の雪
萱峠	布雪
	鹿の子斑
栗師山	雪の真ん中に割れ目
	わらた雪 (笹雪)
	ワラダ雪 (笹雪)
	夕顔雪
金倉山	カガミエキ
	カボチャエキ
	サルガエキ (猿が雪)
	フナソコエキ (船底雪)
白山	牛雪
	種蒔き入道
	鼠雪
	牛形
	鳥形
	栗蒔き婆
	牛形
	籠形
	お精形 (森)
	農手薬 (ノテワラ)
	机形
	七ドコ雪
	ヨツリバリエキ (魚釣針雪)
	ジャノメカラカサエキ (蛇の目唐傘雪)
	栗蒔き爺さん (栗蒔き婆さん、しまい雪)
	鶏 (鶏)
御神楽岳	大森 (盛) の雪
	鷲の形
鱒倉山 (人ヶ谷山)	垂れ袴
	象の鼻
	牛形
	種蒔き爺さん (種蒔き入道)
	代掻き馬 (代馬、牛形)
	牛引き爺さん (鼻取り)
	ヤモリ (イモリ) 形
	扇形 (三角ちまき、モッコ)
	釈迦の袈裟 (うの字)
	釈迦の首
	三日月
	鯛形
	祝い餅
	鯛形
	寝牛形
	連峰の雪 (つんねの雪)
	うの字
	栗蒔き爺さん
	栗蒔き地蔵
	豆まき爺さん形
	カツギエキ
	栗蒔き地蔵
	豆まき鳩 (鳩雪)
	代掻き馬
	代掻き馬
	馬の形
	代掻き鞍
	代掻き馬
	麗の地紙 (麗、豆蒔き平)
	豆蒔き太夫
	豆蒔き太夫 (升を持ったタヌサマ)
	金満斗 (カナジョーコ)
	日の丸
	扇の骨
	種蒔き爺さん
	種蒔き爺さん
	種蒔き爺さん
	イモリ
	種蒔き爺さん (と犬)
	代掻き馬
	種蒔き爺さん (と狐)
	代掻き馬 (代掻き牛)
	圓形 (種蒔き爺さん)
守門岳	

		タツノオトシゴ
		扇 (複数)
		牛
		鯉
		寂迦の寝姿 (大仏の寝姿、地藏様の寝姿)
		豆まき鳩 (鳩雪)
		天狗の鼻
		牛 (代馬、牛の寝姿、寝牛、馬雪、牛)
		前投き (鳩の形)
		寂迦の寝姿
		種蒔き爺さん
		馬の形
		寝牛 (牛)
		槍雪
		馬の形
五百山		鹿の丁雪 (カノコマダラ)
猿倉山		炬燵やぐら
		押み猿
		わらだ形
大平山 (一之貝山)		いの字形
		山笠の形
(上下) 権現堂山		カタウリタネぐらいの間隔
		鹿の子
		駒形 (頂上の尾根を駆け登る馬、駒雪)
		田播き馬
		駒
		田播き馬
		半夏爺さ
		鬼形
		夫婦カラス (ミヨットガラス)
		昇り童・下り童
		田播き岩 (ヘソ)
		ヘソ (鱗)
		田播き馬 (田播き鞍)
		大根
		牛の鞍 (首を下げた田播き馬、田播き牛)
		田播き牛
		扇の地紙 (扇)
		首だけの田播き馬
(越後) 駒ヶ岳		豆蒔き爺
		飯盛りしゃもじ
		半夏爺さ
		田播き馬
		田播き馬
		田播き馬
		鳩
		田播き馬
		狸の滝登り
		鯉形 (鯉の滝のぼり)
		馬
		馬糞
		種蒔き入道 (豆蒔き爺さん)
		豆蒔き爺さん
		豆蒔き入道 (田植え爺さん、半夏爺様、巨人の手)
		鷲形 (鷲に泥鰌、鴨が泥鰌を取る形)
		田播き婆
		鎌形
		大根の形
		牛の田播き形
		田播き馬
		田播き馬
		田播き馬
		田播き馬
		田播き馬
		田播き馬
		田播き馬
		大浪
		カラス
		トッピ (タカ)
		駒
		鷹匠
		田植え爺さ
		ニの子
		虚無僧 (コムソウ)
		船乗り地蔵 (岩船地蔵)
		神雪 (神人形)
		ホラ貝
		犬の字
新潟県		
	八海山	
	中ノ岳 (おつき山)	
	大平山 (一之貝山)	
	猿倉山	
	五百山	
	(上下) 権現堂山	
	(越後) 駒ヶ岳	

	八の字 (逆さ八の字)
	鯛
	兎
	逆さ鶴
	鬼の面
八海山 (薬師岳)	田掻き馬 田掻き馬 子持ち島 半夏爺様
丹後山 (月形山、扇山)	ミョウガ畑 鎌雪 蔵の壁 馬のアトツブシ
苗場山	月形状の地肌 三杯飯 三つ星
金城山 (イワキ頭)	七とこ雪 魚雪 狛犬 (コマイン、犬雪) 狛犬 (コマイン、犬雪) 鳩雪 鳥雪 (鶏雪) 鉄砲雪 逆さ鶴 銀杏の葉
樹形山	樹形
巻機山 (牛ヶ岳)	黒牛 (乳牛) 白牛 (乳牛) 猿 牛の字の形 牛女 銀杏の葉 寝牛 黒い牛 牛 逆さ鶴 (鶴の羽根) 亀 左鎌 臼 田掻き馬 田掻き馬 ヒメ (逆さヒメ) 亀 (狛犬) 鶴
巻機山 (米子頭山、栢沢山)	ニュージッタ (清水の日輪) 桑
万太郎山 (サゴノ峯、サツゴノ峯)	鹿の角
仙ノ倉山	三の字 (二の字、一の字) ツットコ形 (タナモンツツコウ)
米山	鯛形 火の字 駒形 (馬形) 種まき男 (種蒔き爺さん、種蒔き形)
(刈羽) 黒殿山	傘形
尾神岳	栗蒔き雪
菱ヶ岳	馬蹴 (鉄形) 馬の形 (跳ね馬)
妙高山 (明高山)	山の字
妙高山 (神奈山)	馬形 (妙高農牛、寝牛、春馬、駒の首) 跳ね馬 牛形 一本杉 鉄形 鉄形 爺さん・婆さんの雪形 栗蒔き坊主
妙高山 (赤倉山)	栗蒔き坊主
南薬山 (青田難波山)	種蒔き男 (犬男、山男、種蒔き爺さん)
南薬山 (龍町難波山)	犬男
火打山	虎 馬の形
焼山	コウモリ形 鶴の舞
烏帽子岳	花こうがい

冠城駒ヶ岳	はねこんま (牛形)	
黒姫山	船くぼ形 土瓶形	
白鳥山	鳥	
雨飾山	ももひき形 鶴	
金北山	種蒔き猿	
	種蒔き猿B	
	種蒔き猿C	
	種蒔き猿D	
	種蒔き猿G	
	種蒔き桜 (田植え桜)	
	いの字 オオミキスズ 苗代	
五頭山	鯛形 (鯉形)	
	鯛形 (タイガタ)	
	鯛形 (西山)	
郭彦山	御籠形 駒形	
菅名岳	駒形 (馬形) 栗蒔き鷲	
日倉山	爺と媼 (爺雪と婆雪)	
蒜場山	鯛形 カタツムリ 鷲の首	
	乗鞍岳	雄鶏 (羚羊) 種蒔き爺
	小蓮華山 (大日岳)	仔馬 嫁岩 種蒔き爺 種蒔き爺 (婆) 島田娘
白馬岳 (大蓮華岳、上駒ヶ岳)		代馬 (代播き馬、白き天馬) 雄馬 (黒馬)
白馬岳 (八方尾根)		そばまき爺 手斧打ち 八の字
鷲ヶ岳		花立岩 双鶏 (鶴) 鶴首 (雷鳥)
五竜岳 (御菱岳、顔鬼ヶ岳)		御菱 (武田菱)
鹿島嶺ヶ岳 (シシ岳、鶴岳)	獅子 (羚羊) 鶴	
西岳 (槍沢)	狐と狸 種蒔き爺さんと婆さん	
爺ヶ岳	爺c 種蒔き爺さん	
不動岳 (扇岳)	扇面	
鉄鬼岳	風神	
常念岳	常念坊 万能 (銀)	
東大井岳	白犬 (白い仔犬)	
前穂高岳 (御幣岳、明神岳)	御幣	
蝶ヶ岳	蝶	
乗鞍岳	馬 駒	
鉢伏山	雁 (マの字雪・字形、鎌雪)	
四阿山 (根子岳)	十一の字 (左ナの字)	
飯綱山	人形	
高社山 (犬伏女山)	雪風 七とこ雪	
権現山	権現鹿の子 種蒔き爺 (種蒔き爺媼、種蒔き小僧)	
特基頭山	双馬 飛龍 二匹の駒 (左) 八の字 駒形 (降り駒)	
	(木曾) 駒ヶ岳 (中岳、西駒ヶ岳)	種蒔き爺 (種蒔き爺媼、種蒔き小僧) 昇り駒 舞姫 モルフオ (蝶)
	茶白山	親子駒
	麦草岳	童
	伊那前岳	牛引き・親子駒 黒蝶

長野県

		種蒔き爺
		サギダル
	宝剣岳 (剣ヶ峯、錫杖岳)	島田娘
		駒形
		樺蒔き小僧 (伊那節踊り)
	宝剣岳 (極楽平)	鶯
		盆踊り娘
		農夫
	熊沢岳	白鷺
		鬼面
	空木岳	種蒔き爺
		ウツギ
	南駒ヶ岳 (赤柳岳)	種蒔き爺 (権兵衛)
		駒
		鬼面
	南駒ヶ岳 (田切岳)	五人坊主
		飛龍
		種蒔き爺
	南駒ヶ岳	種蒔き爺 (女) (種蒔きじょうし、女郎衆 (娘)、いれこ娘)
		陣屋代官姿
		白鳥
	越前山	牛天神
	御嶽山 (剣ヶ峰)	種蒔き爺
	間ノ岳	鬼面
		上り鯉・下り鯉
	八ヶ岳	鹿の形
	車山	馬形 (鞍馬)
	仙岳山	山の字
	赤石岳	五ノ字
	雨節山	鶴
	黒負山 (望見地は新潟である)	嫁さん
		鹿の角
栃木県	日留賀岳	ホウシノタマ
	太郎山	ガッサンタレコ
	茶臼岳	いの字
	南月山	船雪形
	至仏山	馬
群馬県	谷川岳	親馬子馬
	木白根山	逆さ男
	浅間山	種まき爺
	鉢伏山	うの字
	東笠山 (鯉附山、鶯岳)	鯉
	西笠山 (鯉附山、傘山、鷹山)	鯉
		傘
		花嫁
		虚無僧 (僧形、弘法様、坊様)
		鬼
		猪
		猫
		鶏
		少年
		少女
	人形山	人形雪 (二人の人形)
	早乙女岳 (前大日岳)	早乙女
	舞岳	シカノハナ
	越中駒ヶ岳 (北駒)	駒 (駒の鼻取り、パンジョメ)
	朝日岳 (東根岳、秋岳)	エブリ (秋)
	笈ヶ岳	二人の像
		猿たばこ
		牛に乗った僧 (牛に乗った袈裟かけの坊さん、大ガラス)
		カラス
		コウモリ
		ツバメ
		田植え男 (五月男)
		苗男
		水竜
		火竜
石川県	白山	鷲
	鷲走ヶ岳	鷲
	大日山	いぶり形
		農鳥
		農牛
		鯉形
		農男
		鯉形
		田 (藪)
		豆まき小僧
山梨県	富士山	種蒔き小僧

	(鳳凰山) 観音ヶ岳	農牛 (豆蒔き牛)
	(白根三山) 間ノ岳	農鳥
	農鳥岳	農鳥
		農牛
		鋤
		鋸
静岡県	富士山	お犬雪
		農男
		農男
兵庫県	氷ノ山	牛
愛媛県	石鎚山	鋸形 (鋸の柄)
		犬伏した形
		みのかさ雪
岐阜県	笠ヶ岳	馬
	乗鞍岳	牛のネカサ
		兎の尻尾
福井県	大日山 (越前大日岳)	馬の鬣
		鶴
		兎

「データベースBの対象である雪形（150体）」

山岳名	雪形名		
写万部山	蝶雪	蒜場山	鷲の首
狩場山	白馬		雄鶏
ワイスホルン	白い馬	乗鞍岳	種蒔き爺
羊蹄山	競馬うま		嫁岩
八甲田山	駒形	小蓮華山	仔馬
	種蒔き爺		代馬
	駒雪	白馬岳	雄馬
	蟹ハサミ		そばまき爺
	牛クビ	八方尾根	手斧打ち
大駒ヶ岳	鳶形	五竜岳	御菱
	馬	鹿島槍ヶ岳	獅子（羚羊） 鶴
釜臥山	牡丹		種蒔き爺さんと婆さん
東福山	駒	爺ヶ岳	種蒔き爺さん
焼石岳	ハル形	越百山	牛天神
（焼石）駒ヶ岳	駒	不動岳	扇面
獅子ヶ鼻岳	亀ノ子形	東天井岳	白犬
横岳	モッコ形		常念坊
経塚山	牛	常念岳	万能鎌
岩手山	鷲と雉	前穂高岳	御幣
栗駒山	駒形	四阿山	左ナの字
	股引き	鉢伏山	雁
蔵王山	種蒔き入道	蝶ヶ岳	蝶
（秋田）駒ヶ岳	駒	飯縄山	種蒔きじいさん
藤里駒ヶ岳	駒	赤石岳	五ノ字
白神岳	上の字	高社山	雪兎
鶴ガ岳	鶴		駒形（降り駒）
鳥海山	種まき爺	（木曾）駒ヶ岳	種蒔き爺
地神山	扇の地紙		昇り駒
（飯豊）駒形山	駒	伊那前岳	裨蒔き爺
牛ヶ岩山	牛		サギダル
安達太良山	粟蒔き入道	宝剣岳	島田娘
	駒形	空木岳	ウソギ
鬼面山	扇		鬼面
磐梯山	虚無僧	南駒ヶ岳	駒
（会津）駒ヶ岳	駒	田切岳	飛龍 五人坊主
吾妻小富士	代掻き馬	赤柳岳	種蒔き爺
燧ヶ岳	金狹	御嶽山	種蒔き爺
光兎山	兎形	浅間山	佐久鯉の滝のぼり
えぶり差岳	杵爺や	将基頭山	双馬
	鯛形	八ヶ岳	上り鯉・下り鯉
二王子岳	逆さ男	鉢伏山	うの字
	黒牛形	僧ヶ岳	虚無僧
駒形山	駒形（馬形）	西笠山	傘 鮒
飯豊山	御鏡雪		鯉
金鉢山	八の字	東笠山	牛
菱ヶ岳	馬の首	牛岳	人形雪
鋸山	王神雪	人形山	早乙女
粟ヶ岳	粟蒔き婆	早乙女岳	早乙女
	釈迦の寝姿	（越中）駒ヶ岳	駒
守門岳	扇の地紙	笈ヶ岳	二人の像
	日の丸	颯岳	シカノハナ
（越後）駒ヶ岳	駒形	朝日岳	エブリ
中ノ岳	田掻き馬		農鳥
八海山	二の字	富士山	豆まき小僧
	船乗り地藏		農男
	八海の放れ駒		かぐや姫
	クワ	農鳥岳	農鳥
入道岳	豆まき入道	観音ヶ岳	農牛
薬師岳	田掻き馬	間ノ岳	農鳥
兎岳	兎		猿たばこ
巻機山	白		牛に乗った僧
牛ヶ岳	黒牛		カラス
	白牛		コウモリ
仙ノ倉山	三の字	白山	ツバメ
万太郎山	刺子		田植え男
榊形山	榊		苗男
米山	鯉形		水竜
	山の字		火竜
妙高山	馬形	鷲走ヶ岳	鷲
	跳ね馬	石鐘山	鎌形
青田難波山	種蒔き男	笠ヶ岳	馬
頸城駒ヶ岳	はねこんま	大日山	鶴
日倉山	爺と媼	赤兎山	兎

*その中に、県市町村HPに紹介されている雪形も含まれる。

「データベースCの対象である雪形(95体)」

山岳名	雪形名		
狩場山	白馬		田播き馬
羊蹄山	笠馬うま	中ノ岳	田播き馬
ワイスホルン	馬		田播き馬
愛冠岬	馬雪		田播き馬
岩木山	馬		馬
	早馬		田播き馬
八甲田山	駒形		田播き馬
	駒雪(駒の雪、白馬)		田播き馬
戸来岳(大駒ヶ岳)	馬	八海山	田播き馬
増川岳	馬		田播き馬
尾太岳	馬		田播き馬
(秋田)駒ヶ岳	駒		八海の放れ駒
束稲山(駒形嶽、駒形山)	駒		田播き馬
(焼石)駒ヶ岳	駒	八海山(薬師岳)	田播き馬
	駒形		馬のアップシ
焼石連嶺(経塚山)	牛形(駒形)	丹後山	馬の形(跳ね馬)
三森山	馬	巻機山	田播き馬
栗駒山(駒形山、柿川岳、祭川岳)	駒(駒形)	米山	駒形(馬形)
藤里駒ヶ岳(藤駒岳)	駒	菱ヶ岳	馬の形(跳ね馬)
(秋田)駒ヶ岳	駒	妙高山	馬形(妙高農牛、寝牛、春馬、駒の首)
(飯豊連峰)駒形山	駒	火打山	跳ね馬
朝日岳(中岳)	させとり馬(代播き馬)	鎮城駒ヶ岳	馬の形
神室山	馬	弥彦山	駒形
安達太良山	駒形	菅名岳	駒形(馬形)
(会津)駒ヶ岳	駒	小選挙山(大日岳)	仔馬
苜蓿小富士	代播き馬	白馬岳(大連華岳、上駒ヶ岳)	代馬(代播き馬、白き天馬)
(飯豊連峰)駒形山	駒		種馬(黒馬)
飯豊山	代播き馬(黒馬)	乗鞍岳	馬
二王子岳	馬形		駒
駒形山	駒形(馬形)	特養頭山	双馬
	馬(の形)		二匹の駒
菱ヶ岳	駒の首	(木曾)駒ヶ岳	駒形(降り駒)
	代播き馬(代馬、牛形)		昇り駒
	代播き馬	茶臼山	親子駒
	代播き馬	伊那前岳	牛引き・親子駒
	馬の形		駒形
	代播き馬	宝剣岳	駒
	代播き馬	南駒ヶ岳	駒
	代播き馬(代播き牛)	霧ヶ峰	馬形(寝馬)
	牛(代馬、牛の寝姿、寝牛、馬雪、牛)	至仏山	馬
	馬の形	谷川岳	親馬子馬
	馬の形	越中駒ヶ岳(北駒)	駒(駒の鼻取り、パンジヨメ)
	駒形(頂上の屋根を駆け登る馬、駒雪)	笠ヶ岳	馬
	田播き馬	大日山(越前大日岳)	馬の鬣
(越後)駒ヶ岳	駒		
	田播き馬		
	田播き馬(田播き鞍)		
	牛の鞍(首を下げた田播き馬、田播き牛)		
	首だけの田播き馬		

謝辞

この論文は、筆者が千葉大学大学院園芸学研究科環境園芸学専攻緑地環境学コース博士後期課程に在籍していた時に行った研究成果をまとめたものです。多くの方々にご指導や支援をいただいたことに心から感謝しております。

千葉大学大学院園芸学研究科環境園芸学専攻緑地環境学コースの池邊このみ教授、木下剛教授、章俊華教授、武田史朗教授、政策研究大学院大学政策研究科特別教授家田仁教授には、役立つ指導と、力強い励ましをいただきました。

本研究の過程において、池邊先生の専門知識や経験、文化財事業に対する情熱は、筆者に大きな影響を与えました。池邊先生の指導と励ましのおかげで、私は文化的景観研究の道を進むことができました。学位取得の道の中で、池邊先生の教えと指導は筆者にとって大きな支援となりました。

また、第7章のアンケート・ヒアリング調査において、回答していただき各市役所、博物館、文化館の関係者の方々、及び上越市の記者川村康弘氏、童話作家杉みきこ氏、雪形について様々な有用な情報を提供いただいたことに心から感謝申し上げます。

最後に、論文執筆中に直面した困難に対し、私のネガティブな感情を受け止めてサポートを与えてくれた両親に深く感謝しています。同時に、私は論文のために長期間日本に滞在しなければならず、小さい頃から育ててきた愛犬と一緒に過ごす時間があまりありませんでした。そして2021年の最後の日、愛犬は天国に旅立ってしまいました。しかし、論文を執筆中には、愛犬との思い出が私を支え、最終的に論文を完成させることができました。

この過程において、私に力を与えてくれたすべての人々にこころから感謝しています。